DOOMS DAY

滅亡の日

麻原彰晃

「黙示録大預言」の秘密のベールを剝ぐ

This book is the record of the events that Jesus Christ revealed. God gave him this revelation in order to show his servants what must happen very soon. Christ made these things known to his servant John by sending his angel to him, and John has told all that he has seen. This is his report concerning the message from God and the truth revealed by Jesus Christ. Happy is the one who reads this book, and happy are those who listen to the words of this prophetic message and obey what is written in this book! For the time is near when all these things will happen.

DOOMS DAY

滅亡の日

麻原彰晃

「黙示録大預言」の秘密のベールを剝ぐ

オウム出版

救済の儀式、シャクティーパット。ハルマゲドンの回避、
超人類の創造は、尊師がシヴァ神に与えられた使命だ。

今世紀最後の救世主、麻原彰晃尊師。その登場によって、
「黙示録」の封印は初めて解かれた。

はじめに

八八年秋、数多くのシャクティーパット（P102参照）と特別イニシエーションによって、私は肉体的エネルギーを失っていた。特別イニシエーションもシャクティーパットに換算してみると、合計で八千名に私の霊的エネルギーを注入したことになる。

――休息に入りなさい――

というシヴァ神から示唆が下ったのは、そんな、私がへとへとに疲れきって微熱と倦怠感に襲われていたときであった。

シヴァ神は、私のグル（修行を導いてくださる師）である。この人間の世界にいらっしゃるのではなく、アストラル世界と呼ばれる異次元にいらっしゃる方だ。そして、私が悩んでいたり困っていたりすると、いつでも適切な示唆を与えて救ってくださるのである。私は今回も示唆に従って休息に入ったのだった。

さて、何日か経って私のエネルギーがどうやら回復してきたという頃、私のところにS君とい

う人物がやってきた。彼は預言の研究に興味を持っている編集者である。このとき、『聖書』の中に預言も書かれているということを聞いたのだった。彼は『聖書』をパラパラとめくって、

「ここですよ。」

と指し示した。これが私と『ヨハネの黙示録』との最初の出会いだったのである。

その夜のことであった。シヴァ神から、

――『ヨハネの黙示録』の封印を解いてしまいなさい――

という示唆があったのは――。

「シヴァ神がこうおっしゃられるからには意味があるに違いない。また、封印を解くことができるのだろう。」

私はこう思って早速『ヨハネの黙示録』の解読作業にとりかかった。

だが、それは思ったより時間がかかって大変な作業となった。解読自体が大変だったのではなく、それを証明するための史実との照合がである。実際に読んでいただければ、完璧なまでに世界史を始めとする膨大な資料をひっくり返して検討したのだということをご理解いただけよう。もちろん、本書に載せられなかった資料もたくさん残されてはいるが、皆さんに納得していただける内容になったと自負している。

本書を書くにあたって、実に十余名もの人が協力してくれている。特にその中の数名は、私が

脱稿するまでかかりっきりになって助力を惜しまないでいてくれた。したがって、本書はたくさんの人々の好意と努力の賜物であり、その根底にそれを支えるオウムという組織があってのことだったと考えている。

シヴァ神が、わずか三年間でこのような組織を与えてくださったのも、預言にも出てくるように、今後のオウムの動きが世界的なものになっていくことを表わしているのではないだろうか。言い換えれば、救済活動が私一人の力ではできないからこそ、このような大乗の思想に基づく組織ができ上がったということになろう。

本書を読むことによって、皆さんが真理に目覚めてくれたら、そして十戒を守ってシヴァ神の意思に合った生き方をしてくれたら幸いである。

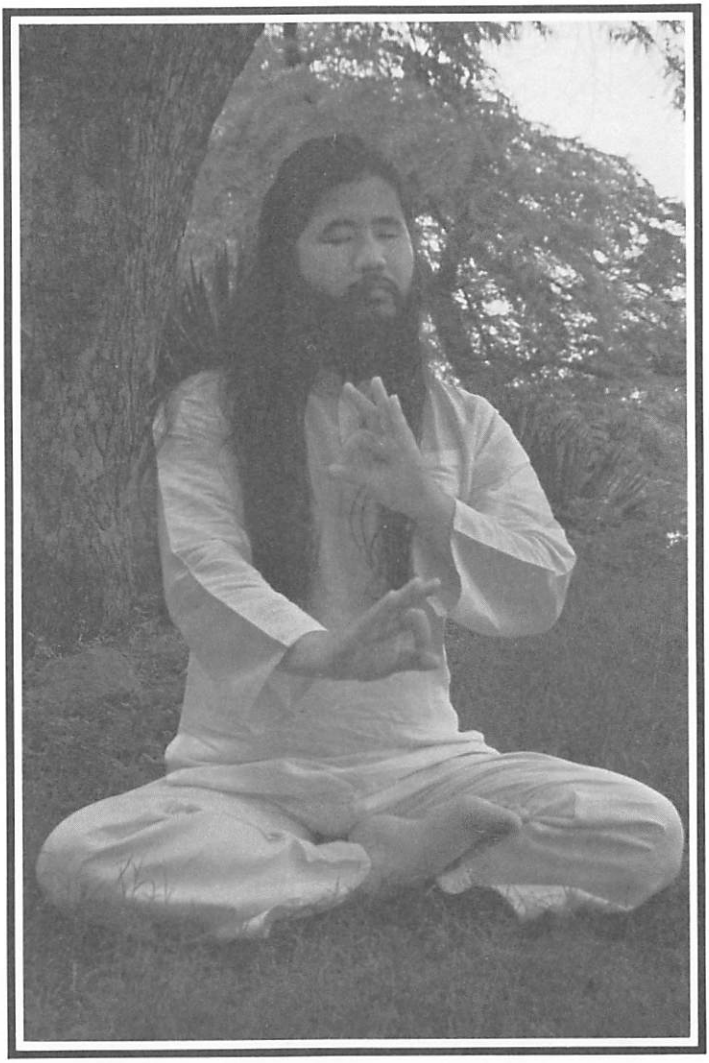
人類滅亡の日は必ずやってくる。一日も早く真理に目覚めてほしい。

参考のために

〈十戒〉

①不殺生（殺生をしてはならない）
②不偸盗（盗んではならない）
③不邪淫（邪淫をしてはならない）

④不妄語（ウソをついてはならない）
⑤不綺語（必要のない言葉をしゃべってはならない）
⑥不悪口（悪口を言ってはならない）
⑦不両舌（人と人とを仲たがいさせるような言葉をしゃべってはならない）
⑧不慳貪（むさぼってはならない）
⑨不瞋恚（憎しみから怒りを発してはならない）
⑩不邪見（真理を否定してはならない）



目次 CONTENTS

滅亡の日

麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剝ぐ

はじめに

第一章 預言解読の神託は下りて 17

●● シヴァ神に導かれ——時を超えたヨハネ 18

●封印を解くべき時が来た！
●大預言書『ヨハネの黙示録』
●予言者による預言の解読
●「人の子のような者」――現われたシヴァ神
●七つの燭台――七つのチャクラ

◉◉教会への手紙――目覚めさせたメッセージ

●オウムへ――シヴァ神からの手紙
●待ち受ける苦難――最後の十年間
●奇跡を現わすオウムの超能力
●悔い改めよ――修行者への警告
●女預言者――共産主義の象徴
●タントラ・ヴァジラヤーナの世界
●シヴァ神からの叱咤
●サハスラーラの崩壊――最終解脱の証明

●神の聖所――シャンバラ
●涅槃のときではない

第二章　七つの封印が今解かれる　63

◉◉小羊の使命――シャンバラからの示唆　64

●シャンバラのシヴァ神
●封じられた巻物が指すものは？
●封印を解く者――ダビデの若枝
●世々限りなく栄光と賛美の中に……
●ほふられた小羊――救済者の象徴

◉◉黙示録の四騎士――歴史は綴られる　78

●解かれゆく封印――明かされる真実
●白い馬――キリスト教の発展
●赤い馬――戦後の歴史の始まり
●黒い馬――貨幣経済の発達
●青白い馬――地を支配するイスラム教

◉◉神の印を刻め――それは救済への道　90

●与えられた白い衣――殉教者の叫び
●神の怒り――大噴火による洗礼
●額の印――イニシエーション
●成就・解脱の示唆――もはや飢えることはない

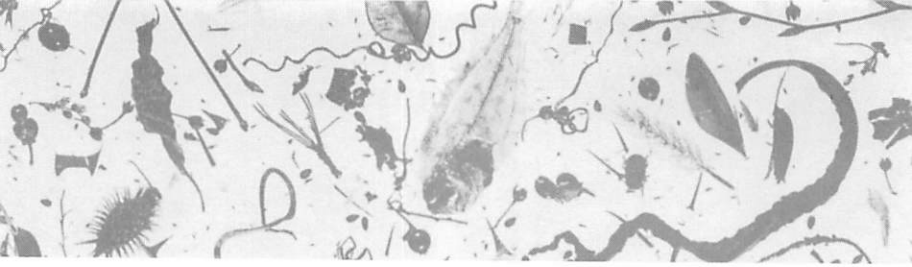
第三章　七つのラッパが鳴り響くとき

105

◉◉兵器の発達——戯画された戦争の歴史　106

●第七の封印——雷鳴と、いなずまと
●第一、第二のラッパ——それは兵器の歴史
●苦よもぎ——化学が災いをもたらす
●暗示された水質汚染の災禍
●第四のラッパ——炸裂と震動
●第五のラッパが響く——第一次世界大戦の勃発
●〝いなご〟は恐怖と苦痛を与えた

◉◉第二の災い——飛躍的に進化する殺戮兵器 122
●第六のラッパ——第二次世界大戦の始まり
●解き放たれた四人の御使とは？
●次々と現われる新兵器
●原子力——封印された本当の姿
◉◉預言者と救世主——歴史は『黙示録』に乗って 132
●第二の災いは過ぎ去った
●今解明される歴史のシナリオ
●歴史を動かした二人の〝預言者〟
●第七のラッパ——暗示された救世主の誕生



第四章　今奏でられる救済の序曲　149

●●赤い龍の登場――共産主義の命運　150

●女と赤い龍――登場した共産主義
●繰り広げられる戦い――共産主義の分裂
●武力と権力をふりかざす〝獣〟
●傷を受けた一つの頭――チェコ事件の勃発
●二〇〇四年、ソ連は崩壊する！
●「カルマの法則」とシャクティーパット

●●666の秘密――獣の謎を解く　166

●意外な結末――明かされた獣の正体
●弱肉強食――〝獣〟アメリカの歴史
●〝先の獣〟ソ連の復興
●〝刻印のない者〟――東西陣営のはざま

◉◉救世主は来りて――超人類への予感

●救世主の出現――小羊と十四万四千の聖徒
●救世主を称えるシャンバラの歌
●大破局を越えて――予言された〝超人類〟の誕生
●仏教とモーセの戒の類似性
●かまを入れて刈り取れ！
●彼らによって神の激しい怒りは終わる……

第五章　そして、七つの鉢が傾けられた　191

◉◉ カタストロフに向けて——現代の危機的情況　192

●最後の災害の始まり——傾けられた七つの鉢
●第一の災害、人間に対する死の宣告——「癌」
●第二の災害、脅かされる生物たち——「海洋汚染」
●第三の災害、しのびよる魔の手——「放射能汚染」
●第四の災害、悪業がもたらした異変——「旱魃」
●第五の災害、アメリカをみまう恐怖——「エイズ」

◉◉ 近付くハルマゲドン——すさまじい核戦争　210

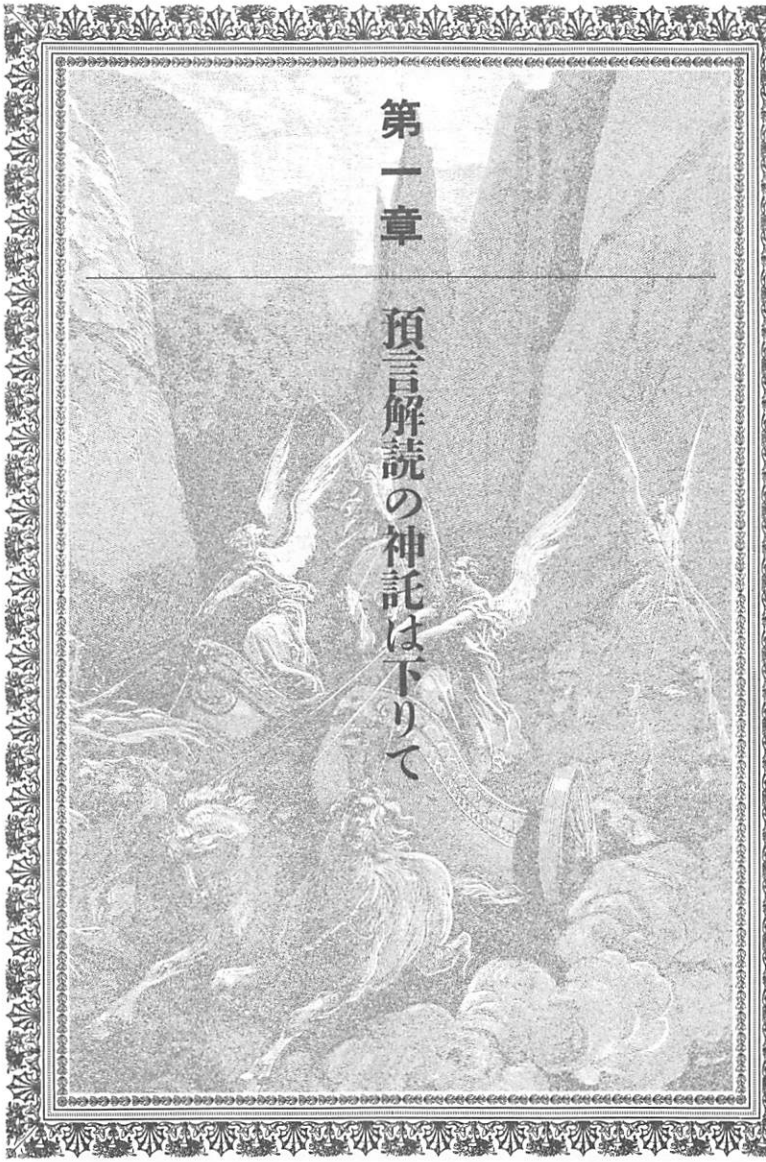
●第六の災害、対立化する世界――「石油危機」
●ハルマゲドン――それは近い未来に

第六章　多くの魂の救済に向けて　217

参考資料……聖書・第一七章～二二章　224

※本文中の『ヨハネの黙示録』は、日本聖書協会発行の聖書から引用させていただきました。

■デザイン：近藤喜久／谷大志／望月義晶
■カバー・デザイン：岐部哲也



第一章

預言解読の神託は下りて

シヴァ神に導かれ……時を超えたヨハネ

◉◉封印を解くべき時が来た!

「今や『ヨハネの黙示録』の封印を解くべき時が来た。その示唆を受け取り、オウム真理教の救済計画を固めよ。」

私のグルであられるシヴァ神が、あまりにも突然にこう告げた。今までヨーガと原始仏教の修行を中心に行なってきた私に、聖書の一部である『ヨハネの黙示録』の封印を解けとおっしゃられるのだ。それも「今や封印を解くべき時が来た」と。「その示唆を受け取ってオウム真理教の救済計画を固めよ」と。

「ああ、シヴァ神がこうおっしゃられるからには、『ヨハネの黙示録』の解読がオウムの動きを大きく前進させることになるのに違いない。なぜなら、このわずか三年間のうちにシヴァ神のご意思がオウムを全国規模の、——いや全国規模どころかニューヨークに支部を有し、今年中にもまだいくつかの海外支部ができる予定の世界規模とも言える宗教団体に発展させてくださったのだから。」

私は即座にこう思ったのだった。

本当に都合の良いことに、この時期私は時間的余裕にも恵まれていた。というのも、これまでの超多忙なスケジュールとシャクティーパットによって肉体的にも精神的にも限界にきていた私は、自分自身の修行を中心とした毎日に切り替えていたのである。

つまり、修行とシッシャ（弟子）への指導と指示、そして信徒の皆さんへの特別イニシエーションのみに活動を制限していたのだ。これは偶然の一致ではあるまい。執筆活動も向こう数カ月休むということが決定していたが、こちらの方はこのようにシヴァ神のご意思によって再開。私が今述べたような経緯によって『ヨハネの黙示録』を解読し、世に出すからには、必ずやオウム関係者のみならず人類全体の大いなる恩恵となろう。何しろ問題の書には私自身でさえ事の重大さに茫然とするような驚くべき秘密が隠されていたのだから。

驚くべきこととは一体何であったか——しかし本題に入る前に、この『ヨハネの黙示録』というものが一体どんなものであるかご説明しておいた方がよいだろう。

◉◉大預言書『ヨハネの黙示録』

この書は『新約聖書』に含まれる最後の一書である。イエス・キリストの十二使徒の一人聖ヨハネによって書かれたと伝えられる。〝黙示〟とは原典のギリシア語では〝アポカリプス〟とい

う言葉で言い表わされている。これは「隠された真理の開示」という意味である。この他にも「神の秘密の預言」「未来を開示し、この世の終わりの神の裁きを告知する」という意味を持っており、これだけでもこの書がただならぬものであることを暗示していると言えよう。

ヨハネは西暦九五年頃、ローマ帝国のドミティアヌス帝によってエーゲ海の孤島パトモス島に流された。そこで脱魂状態になり、後に彼が『ヨハネの黙示録』として書き留めた神秘的でかつ恐ろしいヴィジョンを見たのだという。

以来二千年近くもの間、この『ヨハネの黙示録』は、「聖書の奥義書」「あらゆる預言の原典」「預言中の預言」などと呼ばれ、多くの『聖書』学者や『黙示録』研究者らによって研究されてきた。それには、人類の未来、世界の破滅が預言されていたのである。

ところが、ヨハネの使っている言葉があまりにも象徴的なため、現代に至っても難解な書とされ、研究者の間でも様々な見解が出されているというのが現状なのだ。

それに加えて、それらの預言が現実化する時期さえはっきりと示されてはいない。それゆえに、「ローマ帝国時代にすべてが終わってしまったのだ」という見解もあれば「ヨハネの時代からこの世の終わりまで」という見解もある。また「預言はこの世の終わりの時期に集中している」とか、あるいは『黙示録』の内容を一つの時間の流れにそって並べ解釈することはできない」という見地に立つ研究者もいる。

このように『ヨハネの黙示録』は謎多き古代の預言書なのだ。にもかかわらず、間もなく二十一世紀を迎えようとしている現代に至っても、多くの研究者や一般人の強い関心を引き付け続けているという事実。彼らは本能的に何かしらを感じ取っているのかもしれない。『黙示録』に隠されている何かしらを――。

◉◉予言記者による預言の解読

『ヨハネの黙示録』の封印を解こう。「今やその時が来た」とシヴァ神は言われているのだ。私は早速解読作業にとりかかった。CSI（コスミック・サイエンス・インスティテュート）のM大師と『ヨハネの黙示録』に詳しいオウム編集部のS君が事実確認等の協力をしてくれた。

まず、今までの『ヨハネの黙示録』研究者達が発表した見解には一切とらわれないで解読をしていくことにした（もっとも、私の方もそういった類の書物を読んだこともなかったが）。シヴァ神のお力と私自身のインスピレーションを信じて――。

何しろ私自身も予言者なのである。ヨハネと同じ見地に立ち易いことであろう。ヨハネはアストラル世界という異次元の空間でヴィジョンを見たのである。それは、彼が〝脱魂状態となって〟と伝えられていることからも明らかである。

そして、この私もアストラル世界で見たヴィジョンを予言として発表しているのだ。その適中

率の高さは『マハーヤーナ』NO16でも特集されていたが、適中させるためにはアストラル世界と現実世界との一致とズレを常に意識していることが必要なのである。ヨハネがアストラル世界で見たヴィジョンを同じくアストラル世界をよく知っている私が解く——これほどの解読適任者は他にいないだろう。

『ヨハネの黙示録』を読み始める前に私は二人にこう断言した。

「ヨハネは現実化する時代順に『黙示録』を書いているよ。」

と。

「しかし尊師、研究者の間では……。」

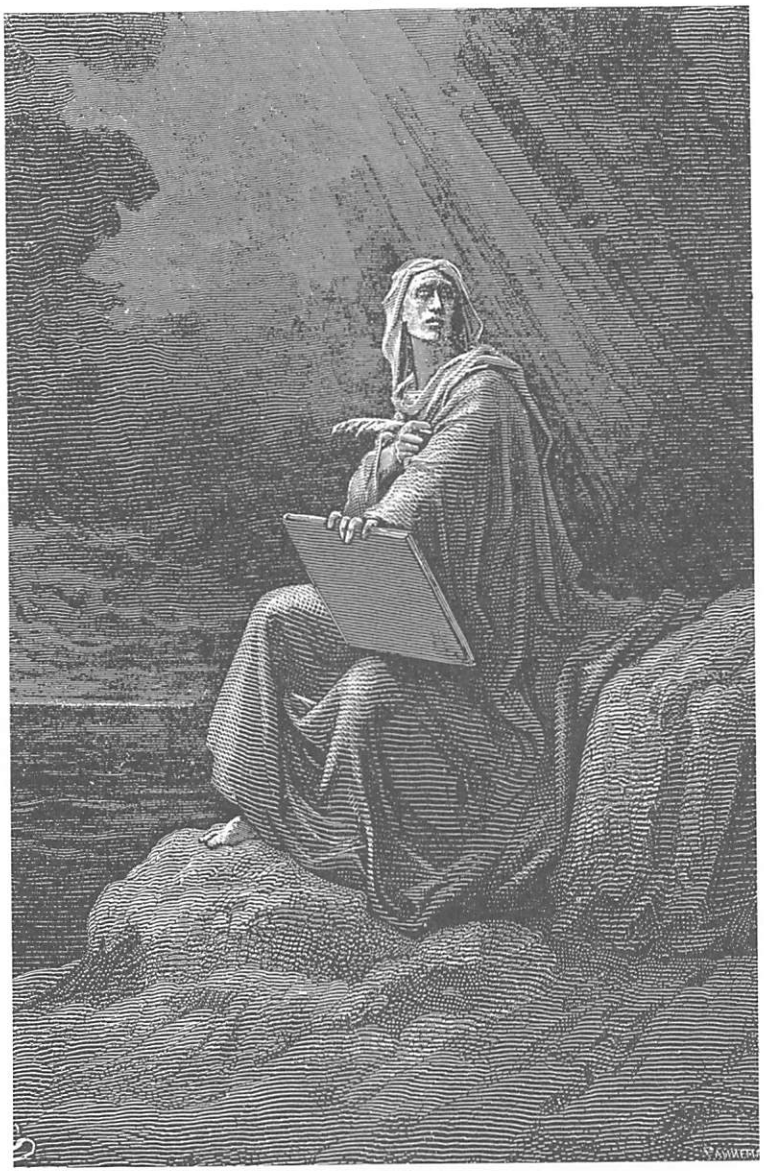
早くもS君が研究者達の見解を持ち出してきた。私は言った。

「もし、あなた方が預言者であったとしたらどうする？　時代別にするかしないか？　後世の人の解読の手掛かりとして順番をはっきりさせておこうとは思わないか？」

「そうですねえ、うーん。」

「じゃあ、まず特徴的でわかり易いものから当てはめていってみることにしよう。もちろん解読して世に出そうというからにはミスは許されない。だから反論があったら遠慮なく出してくれ。だれもが納得できるように一つ一つ丁寧に検討していくことにしよう。」

こうして解読が始まったわけだが、これから詳しく書いていくように、一つの例外もなく時代



順に並んでいたのである。内容にしても、一回読むだけで「これは何を指している」とぱっとひらめくのであった。そしてそれをもとに史実と照らし合わせると、まさにその通りである、とこんな調子だ。初めは「今までの見解と違い過ぎるから」と何かにつけ抵抗していたS君も、その見事な一致に唖然としていたものである。その彼は、

「私達がいかに無智と観念で覆われていたか、それを知ることができた。『ヨハネの黙示録』がいにしえより難解だとされていたのは、私達が曇ったガラスを通して見ていたからで、最終解脱者の純粋観照智の前にすべてが明らかなのだ。」

と後に語っている。

解説を進めるうちに、私はシヴァ神がなぜ今それをやれとおっしゃったのかを悟った。なんと『ヨハネの黙示録』にはオウムのことが何回も出てくるのだ。以後の解説文を読んだなら、あなたは何を思うだろうか？ 何を感じるだろうか？ 底知れぬ恐怖を感じるかもしれない。あるいは、「オウムの真理の流れから外れてはならない」と決意を新たにするかもしれない。あるいは——？

いずれにせよ、私の願いは、何が書かれていたとしても決して目をそらさずに最後まで読んでいただきたい、ということただ一つである。

◉◉「人の子のような者」――現われたシヴァ神

『ヨハネの黙示録』は二十二章からなる文章である。第一章から第三章にわたって、彼が『黙示録』を書くようになった経緯や彼がアストラル世界で出会い、様々なヴィジョンを彼に見せた〝人の子のような者〟について語られている。そして、彼が見せられた恐ろしい未来ヴィジョンについての記述は第四章以降となる。

パトモス島にいたヨハネは、ある日自分の後方でラッパのような大きな声がするのを聞く。その声はこう言ったのだった。

「あなたが見ていることを書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤ（注いずれもアジアにある地名）にある七つの教会に送りなさい」

（第一章一一節）

ヨハネが振り向くと、そこには〝人の子のような者〟がいるのであった。彼は、〝人の子のような者〟についてこう表現している。

ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、

胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、強く照り輝く太陽のようであった。

（第一章一二～一六節）

「この〝人の子のような者〟はシヴァ神じゃないか！」

私はびっくりした。最初からシヴァ神の登場である。

「ヨハネに未来ヴィジョンを見せて記録させたのはシヴァ神だったんだね。だって、この〝人の子のような者〟の姿は、私がアストラル世界でお会いするシヴァ神と同じだね。シヴァ神は、本当にこういう姿をしているんだよ。」

私はM大師とS君に説明した。

「足までたれている衣を着てらしてね、全身が光り輝いているんだ。だからヨハネの目に〝足は炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり〟〝顔は、強く照り輝く太陽のようであった〟と映っても何の不思議もないだろうね。髪の毛もヨハネの言っている通り真っ白だよ。そして何よりも、シヴァ神の口からは意外にも牙がつき出しているんだ。確かこのことは前に『トワイラ

イトゾーン』に書いたことがあったと思うよ。」
「では、シヴァ神が自ら二千年前にヨハネに与えた『黙示録』を尊師に解くようにおっしゃっていることになりますね。」
とM大師。
「そうだ。そういうことになる。何やら面白くなってきそうだね。まだ私達にはわからないけど、眼前にシヴァ神が意思している道が広がっているという感じだ。」
私は続けた。
「シヴァ神がヨハネの後ろにいらした、というのもどうしてなのか私にはわかるよ。私がアストラル世界に飛ぶときは、いつもシヴァ神が後ろについていて助けてくださるんだよ。それと同じように、シヴァ神がヨハネの後ろについてアストラル世界に連れていったんだね。」

◉◉七つの燭台——七つのチャクラ

「ところで、〝七つの金の燭台〟と〝七つの星〟というのが出てきますよね。これは何のことなんですか？　少し後でシヴァ神が、七つの星と七つの金の燭台の奥義として、『七つの星は七つの教会の御使であり、七つの燭台は七つの教会である』と言われているんですが、そう言われても意味がわからないんですよ。」

S君が聞く。

「ああ、それはこういうことだ。」

私の口からは、前もって何回もその文章を読み、既に解読してあったかのようにスムーズに言葉が出てきた。

「まず〝七つの燭台は七つの教会〟という方からいこう。それはチァクラ（霊的センター）のことを言っているんだ。人間がその身体に持っている主なチァクラは、君達も良く知っている通り七つだろう。そしてロウソクが辺りを照らすようにサットヴァの光（善性のエネルギー）に照らされることによってチァクラが開くんだ。だからその象徴として燭台が見えたんだろうね。おまけにその色はクンダリニーの色である金色となっている。本当に見事な象徴だと言えるね。」

「それと教会とどう関係があるんですか？」

「チァクラは高い世界とつながっているところだよね。そして、そのチァクラの一つ一つに教えと秘儀がある。例えば胸のアナハタ・チァクラが開いたときに、どういうステージに至ることができ、どういう超能力を獲得できる、というようなことだ。それと同じだろう、教会も。神々の高い世界につながっていて教えが存在している。」

「うーん、すごいですね。」

「じゃあ、もう一つの〝七つの星は七つの教会の御使〟は何のことだと思うか？　星の照らす範

囲は狭いよね、光が小さいから。そういった意味で各チァクラだけを担当している七人の守護者を表わしているんだよ。だから教会、つまりチァクラの御使いとね、こうなるんだ。シヴァ神が修行者であるから修行者に最も関係しているチァクラの象徴が表われていたんだろう。」

そして私は付け加えた。

「こういうことは私達のような精神世界の修行者でないと絶対わかりっこないだろうね。だから今まで難解だと言われて解釈で論議を呼んでいたんだね。あっ、ちょっとここのところを読んでごらん。」

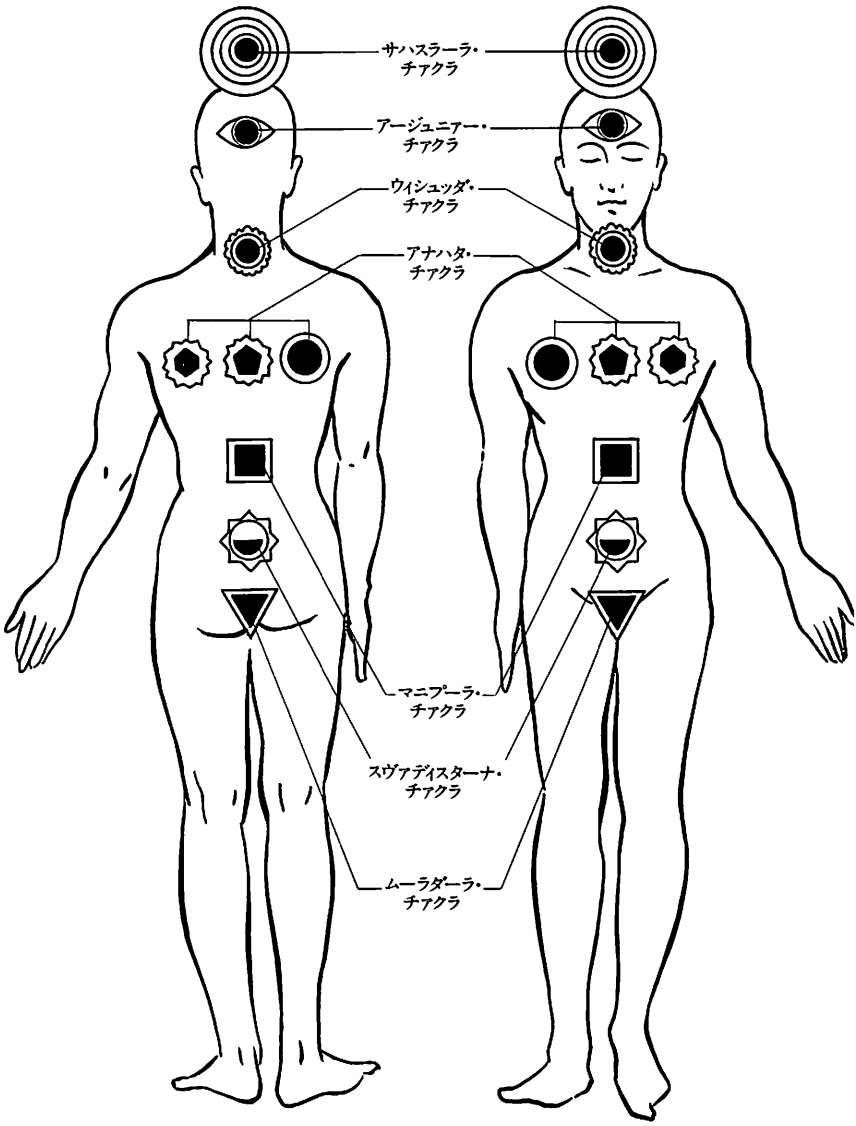
わたしは初めであり、終りであり、また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉(よみ)とのかぎを持っている。

（第一章一七～一八節）

「これは、〝人の子のような者〟つまりシヴァ神がヨハネに『恐れるな』と言って、自分のことについて説明しているところだね。」

「生死を超越した最終解脱者であることを言っているんですね。」

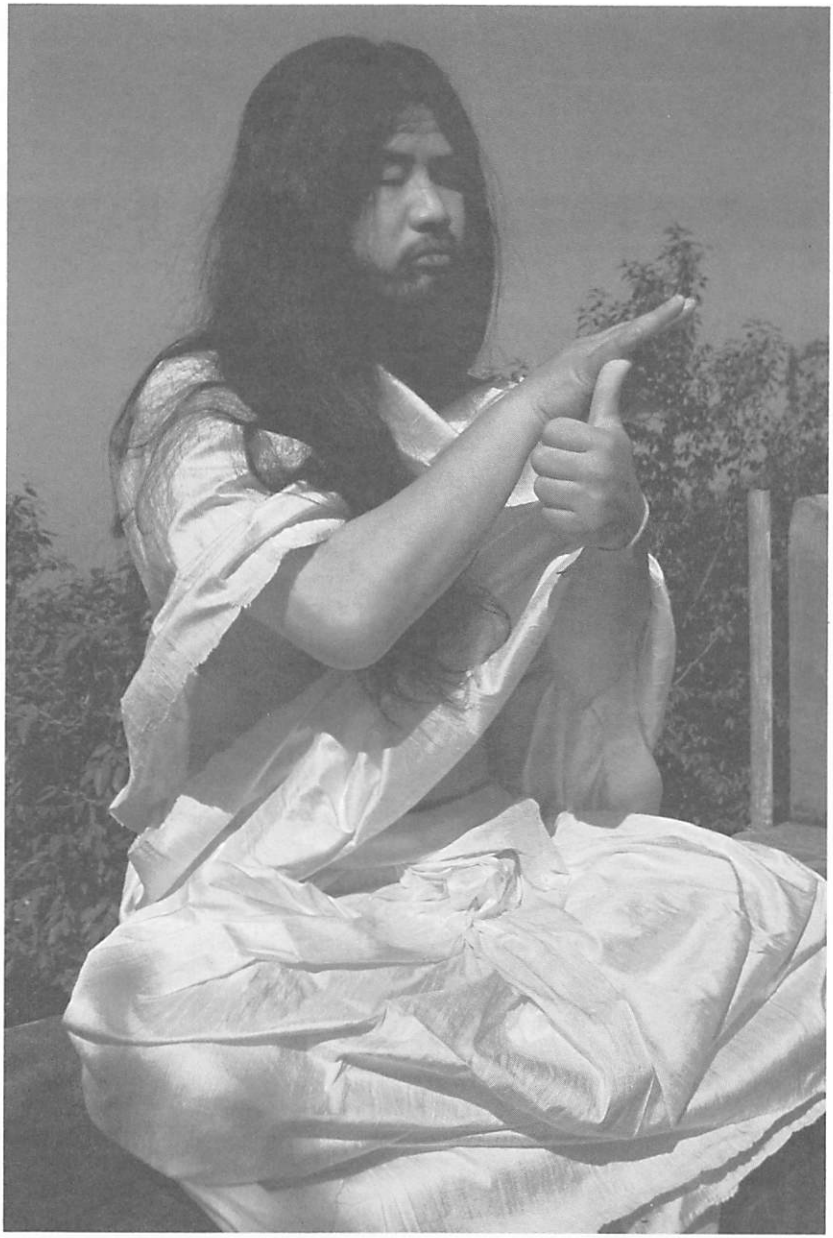
「そういうことになる。そして、初めであり終わりであるということもインドのヒンドゥー教と


サハスラーラ・
チャクラ
アージュニアー・
チャクラ
ウィシュッダ・
チャクラ
アナハタ・
チャクラ
マニプーラ・
チャクラ
スヴァディスターナ・
チャクラ
ムーラダーラ・
チャクラ

チャクラ図

一致しているわけだ。一般にブラフマンが世の創造を司り、ヴィシュヌ神が維持を、そしてシヴァ神が破壊を司っているとされているけれど、三身一体説もあるんだ。要するに、すべて同じシヴァ神のことを指しているという。この私もシヴァ神をグルと仰ぎ信奉しているんだから、もちろん三身一体説支持派だ。」

「なるほど。実に明快ですね。」



教会への手紙——目覚めさせたメッセージ

◉◉オウムへ——シヴァ神からの手紙

その後、シヴァ神はヨハネに七つの教会に『こう書きおくりなさい』と言って細かく指示する。第二章と第三章はその手紙によって構成されている。

初め私はここの部分を全く重視していなかった。預言が始まるのが第四章からだったので、「預言には関係ないから」とあっさりと(実は全く読みもしないで)第四章に進んでしまったのだった。

ところが、あとでなんとなく気になって読んでみると、それはまるでシヴァ神が私と弟子であるシッシャ達にあてた手紙であるかのようだった。ほとんどが人類の救済を目指す真理の道の修行者に対する戒めなのである。このことにより、〝教会へ書きおくる〟という表現も象徴的なものに過ぎないことを知った。特に、名を挙げられた教会が皆アジアにあるということは、アジアにおいて発達する精神文明と関係した示唆であることを暗示しているのではあるまいか。

シヴァ神はヨハネにこう指示した。

エペソにある教会の御使に、こう書きおくりなさい。
『右の手に七つの星を持つ者、七つの金の燭台の間を歩く者が、次のように言われる。わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。また、あなたが、悪い者たちをゆるしておくことができず、使徒と自称してはいるが、その実、使徒でない者たちをためしてみて、にせ者であると見抜いたことも、知っている。あなたは忍耐をし続け、わたしの名のために忍びとおして、弱り果てることがなかった。しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい。もし、そうしないで悔い改めなければ、わたしはあなたのところにきて、あなたの燭台をその場所から取りのけよう。』（第二章一～五節）

これは、まだ完全には救世主として完成されていない修行者、あるいはまだあまりレベルの高くない救世主に対しての警告である。シヴァ神は、
『わたしは、あなたのわざと労苦と忍耐とを知っている。』
と述べ、修行者や救世主の行為や労苦についてよくわかっている、ということを示している。しかし、それに理解を示す一方で、
『あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔

い改めて初めのわざを行いなさい。」

と、彼らが初めの愛（慈悲）から離れてしまったことを指摘し、初心に帰るように言っているのだ。悔い改めなければ、

「あなたの燭台をその場所から取りのけよう。」

と警告もしている。

ここで燭台とは、前にも出てきたようにチャクラの象徴である。それを取りのけると言っているのだから、これはそのチャクラが持っている神秘的な力、超能力を奪い取ってしまうぞ、ということに他ならない。「救済の道を歩む者よ。慈悲の心をゆめ忘れることなかれ」――大変重要な戒めである。

この手紙の最後はこう結んである。

「勝利を得る者には、神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることをゆるそう」

（第二章七節）

〝勝利を得る者〟とは、シヴァ神の導きに従い、すべてのことを克服し成就することのできた者という意味だろう。彼らは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べることが許されるのだ。

いのちの木とは、仏教的に言えば天界の如意樹であり、この木の実を食べると不死を得ることができるのである。

◉◉待ち受ける苦難——最後の十年間

次にシヴァ神は、スミルナの教会に書き送るべき内容としてこのように語る。

『わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知っている（しかし実際は、あなたは富んでいるのだ）。また、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たちにそしられていることも、わたしは知っている。あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔が、あなたがたのうちのある者をためすために、獄に入れようとしている。あなたがたは十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、いのちの冠を与えよう。耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得る者は、第二の死によって滅ぼされることはない』（第二章九～一一節）

シヴァ神は、救済を志す修行者に苦難や貧しさがあるのを知っている、とおっしゃっているのだ。しかし実際は富んでいる、と。これは、現実的に苦難の中で貧しくとも、功徳を積んで心を

豊かにしている修行者の生き方とカルマの法則のことを指しているのである。

『十日の間、苦難にあうであろう。死に至るまで忠実であれ。』

ということであるが、私は十日の間というのは人類の終末までの最後の十年間を指しているのだと思う（人類の終末に関しては預言のところで詳しく触れる）。これも私のインスピレーションだ。私自身、まもなく始まろうとしている最後の十年間に、人類救済という活動ゆえに想像を絶するような苦難が待ち受けていることを予測し、覚悟している。また、シッシャ達に修行時間を大幅に増やさせ、その厳しさも極限状態にまでもっていかせている。これは来るべき苦難の時代においても救済活動を続けられるようにする備えだ。

当然その厳しさに耐えきれずに脱落する者も増えてきたが、それは仕方のないことであろう。今に耐えられなかったら、これから先は到底私とともに救済活動などとてもできまい。

それに極厳修行に打ち込んでいるシッシャ達が、順調にステージを上げ、今年中にもラージャ・ヨーガとクンダリニー・ヨーガの成就者が四十人近く出るだろうと思われることは未来を少しは明るくしている。

中でもクンダリニー・ヨーガの成就者がそれを完成状態にまで持っていったなら、完全なる六神通（六つの超能力）を得る。この力は私の考える救済に必要欠くべからざるものだ。

六神通とは、

・天眼通（遠隔透視のできる超能力）
・天耳通（遠隔透耳のできる超能力）
・神足通（空中に浮かぶことのできる超能力）
・他心通（人の心を読む超能力）
・宿命通（前世・未来世を見透す超能力）
・漏尽通（人の煩悩の状態を見きわめることのできる超能力）

の六種の超能力のことである。

既にオウムでは私をはじめ、これらの能力を持つ高いステージのシッシャが多くなっているので〝超能力者養成機関〟としても注目を集めているようである。本来なら、正しい修行をしていればこれらの超能力はついてあたり前のことなのだ。それは、修行自体が人間を〝神〟のような状態に変化させていくためのものだからである。

◉◉奇跡を現わすオウムの超能力

今夏来日したチベット仏教の修行者が私に尋ねた。

「オウムでは、何人くらいの人間が空中浮揚できるのか？」

と。

「何人くらいかなあ。あまり気にしていなかったので数えたことがないよ。でもたくさんいるよ。」としかそのとき私には答えられなかった。

彼はしつこいくらいに重ねて聞いた。それがどうしてだか私には痛いくらいによくわかった。かつてチベット仏教のタントラの修行者の中には、修行で超能力を得た者が数多くいたのだ。ところが、今では経典にのみそれらが残っているという程度となってしまっている。私はそれがチベット仏教の持つ曖昧さが原因しているような気がしたが、あえて彼にそれを言うことはしなかった。

私が、

「神通力はこれだけじゃないよ。」

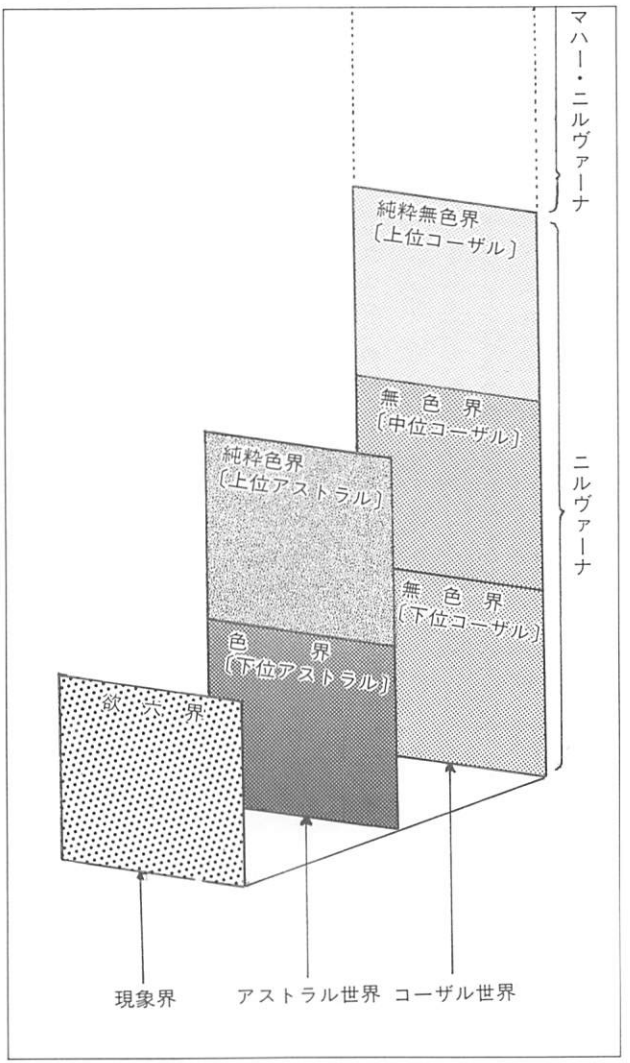
と、一番弟子のアニャータ・ケイマ大師が得た十二時間にも及ぶニルヴィカルパ・サマディの話をした。これは高度な瞑想の力によって、意識を鮮明に持ち続けたまま長時間（彼女の場合十二時間という科学的データがある）無呼吸というまさに奇跡の力である。

「ケイマ大師はいつ、どのようにしてグルであるあなたに出会ったんですか？」

二十年間修行してきた彼、それに比べ、わずか数年間でこのような力を得たケイマ大師。チベット仏教でも、過去のサマディの記述が残されているので彼の興味は尽きないようである。

彼は帰国間際、私にこう言い残して行った。

三つの世界の位置関係


マハー・ニルヴァーナ
純粋無色界
〔上位コーザル〕
無色界
〔中位コーザル〕
ニルヴァーナ
純粋色界
〔上位アストラル〕
無色界
〔下位コーザル〕
色界
〔下位アストラル〕
欲界
現象界
アストラル世界
コーザル世界

「あなたの瞑想プロセスを学びたい。まず日本語をマスターし、言葉の壁を取り除いた後に正しく学びたい。数年以内に必ず日本に来ますから、どうか私に教えてください。」と。

このとき、私は(正しい修行システムというのは本当にオウムにしか現存していないんだ)と改めて思ったのだった。この修行システムを私に与えてくださったシヴァ神に心から感謝している。

ところで、十日と十年という表現の差についてご説明しておこう。アストラル世界で見るヴィジョンのもととなっているのは、コーザル世界(データだけが存在する光の世界)のデータなのである。そのデータはすべて正確なものなのであるが、それを受ける側が自分のイメージや観念などに多少影響されたりして、そのままに受け取れないことがあるのだ。これは、私が初めに書いた「(預言を)適中させるためにはアストラル世界と現実世界とのズレを意識していることが必要なのである」ということとも関係している。

私は、ヨハネの言う十日と私の言う十年というズレは、そんなところに原因があると感じている。また、私とヨハネとのズレは他の箇所にもわずかながら存在しているので、この場でそのことをお断りしておきたい。それらのズレは、ヨハネがクリスチャンであったことからきているものである。彼は、シヴァ神の見せたヴィジョンを受け取るのに、決してキリスト教の枠からはみ出すことができなかったのだ。

◉◉悔い改めよ――修行者への警告

次にシヴァ神は、ペルガモにある教会の御使いに書き送る内容を語った。

「わたしはあなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの座がある。あなたは、わたしの名を堅く持ちつづけ、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住んでいるあなたがたの所で殺された時でさえ、わたしに対する信仰を捨てなかった。しかし、あなたに対して責むべきことが、少しばかりある。あなたがたの中には、現にバラムの教を奉じている者がある。バラムは、バラクに教え込み、イスラエルの子らの前に、つまずきになるもの置かせて、偶像にささげたものを食べさせ、また不品行をさせたのである。同じように、あなたがたの中には、ニコライ宗の教を奉じている者もいる。だから、悔い改めなさい。」

（第二章一三～一六節）

〝サタンの座がある〟というのは、修行者の心がまだ完璧でなく、サタンのつけ入るスキがあるということだろう。現にオウムの大師レベルでさえも、まれにではあるが煩悩が出ることがある。こんなときは、さすがに私も怒鳴ってしまったりするものだ。

しかし、それでも皆シヴァ神に対する帰依心は相当強い。これを、シヴァ神を信じていたのに

殺された人がいるが、そんなときでさえ信仰を捨てなかったと表現しているのだろう。

ところが、それとともに他の教えを奉じている者もいるのだという。オウムの現状を言われているようで、そら恐ろしい。確かにシッシャの中にはいるのだ。昔のグルをいまだに尊敬していたり、その宗教団体と接触したりする者が。そういう者の中には、ただ単に尊敬の念を抱いている者もいれば、スパイもどきの不審な動きを感じさせる者もいる。現に、他の宗教団体からスパイとして侵入したあるシッシャを破門したことがある。

そういう者達への警告がこの手紙なのだ。

◉◉女預言者――共産主義の象徴

次のテアテラの教会の御使いには、次のように書くようシヴァ神は言われた。

「わたしは、あなたのわざと、あなたの愛と信仰と奉仕と忍耐とを知っている。また、あなたの後のわざが、初めのよりもまさっていることを知っている。しかし、あなたに対して責むべきことがある。」

（第二章一九～二〇節）

と、シヴァ神は修行者の修行や信仰を認めながらも、「責むべきことがある」と次のことを言う。

「あなたは、あのイザベルという女を、そのなすがままにさせている。この女は女預言者と自称し、わたしの僕たちを教え、惑わして、不品行をさせ、偶像にささげたものを食べさせている。わたしは、この女に悔い改めるおりを与えたが、悔い改めてその不品行をやめようとはしない。見よ、わたしはこの女を病の床に投げ入れる。この女と姦淫する者をも、悔い改めて彼女のわざから離れなければ、大きな患難の中に投げ入れる。また、この女の子供たちをも打ち殺そう。……（略）……ただ、わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていなさい。勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。」

（第二章二〇～二七節）

さすがの私も〝この女〟に関してはちょっとつまずいた。

「これは女に注意しろということなのかなあ。こういう女が既に出現しているのか、これからするのかわからないけど、私が女に弱いから巻き込まれないように注意しろと言っているのかも……。」

と言いながらも、自分が女に弱いなどと決して思っていなかったが、M大師とS君の鼻白んだ顔が目の前にあったのでもう一度読んでみることにした。

そして、『わたしが来る時まで、自分の持っているものを堅く保っていなさい』というところまで再び読み進めてきたとき、私はハッとした。

「この女は象徴だったんだ。共産主義の象徴だったんだ！」

◉◉タントラ・ヴァジラヤーナの世界

「共産主義――ですか？」

二人とも私が次の言葉をしゃべらない限り、何とも答えようがないという様子だ。

「共産主義は宗教を否定しているよね。当然真理の宗教によって全魂をマハー・ニルヴァーナ（絶対自由・絶対幸福の世界）へ導こうとしているシヴァ神にとって、この共産主義はそれこそ目の敵にしなければならない存在なんだ。だからこそ、こんなにも強い調子で悪行を訴え、それから離れるよう警告を発しているんだよ。共産主義を女預言者としているのにも理由がある。女は一般的に〝衣食住がすべて〟という印象があるね。共産主義も大まかに言えば、そういうことを中心に共産主義の幸福を説く。『共産社会はこんな理想的な調和のとれた社会なんだ』と、人々が素晴らしいと感じるようなヴィジョンだけを誇大宣伝する。だから、人々を惑わす女預言者として表わされたんだ。」

「では〝女を病の床に投げ入れる〟というのは、共産主義の経済的停滞とか、政治の腐敗のこと

を言っているんですね、現在既に問題となってきている――。」
「そういうことになるだろう。ところで、この手紙の後の方は、もっと興味深いことが書いてあるよ。『勝利を得る者、わたしのわざを最後まで持ち続ける者には、諸国民を支配する権威を授ける。彼は鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように、彼らを治めるであろう。』という言葉だ。」
「ここですね。」
「『鉄のつえをもって、ちょうど土の器を砕くように』というのだから、これが武力で支配することだというのはだれにでもわかるだろう。力で良い世界をつくる。これこそ、タントラ・ヴァジラヤーナの世界だ。シヴァ神は、シヴァ神への強い信仰を持ち続けたタントラ修行者が、諸国民を支配することを望んでいらっしゃるんだ。これはもうそう断定してしまって差し支えない。」
「そうなると、オウムのこれからの動きへの示唆ではないですか!? オウムの主宰神はシヴァ神。シッシャは全員タントラ・ヴァジラヤーナの修行者。」
「そうだ、M大師。ここはそうとしか読み取れない。オウムではシッシャだけでなく一般信徒の中でもタントラ・ヴァジラヤーナの修行を選択する人がかなりいるし。」(オウムの「ヨーガ・タントラ」と呼ばれている修行システムが信徒のためのタントラ・ヴァジラヤーナである)
「どう思うかS君?」

彼は顔色を変えたまま押し黙っていた。

◉◉シヴァ神からの叱咤

サルデスにある教会の御使いに書き送る言葉――

『あなたは、生きているというのは名だけで、実は死んでいる。目をさましていて、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。……（略）……もし目をさましていないなら、わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない。しかし、サルデスにはその衣を汚さない人が、数人いる。彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。わたしは、その名をいのちの書から消すようなことを、決してしない。』

（第三章一～五節）

「これはまいった。前の手紙でオウムの使命を伝えてきたと思ったら、今度は『麻原彰晃よ。お前は今一体何をしているのか!?』というシヴァ神の激烈なる叱咤だ。」

『生きているというのは名だけで、実は死んでいる』

私は近頃この状態だった。〝生きているというのは名だけ〟というのは、決してやる気をなくしてぐうたらしているという意味ではない。「現世涅槃」のことだ。肉体はこの世にある。しかし、何も食べなくても平気、飲まなくても平気。心はマハー・ニルヴァーナの絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の状態に浸りきり至福――私はこの現世涅槃に安らいでしまっていた。

現世涅槃は解脱し悟った者だけが、生きながらにして味わえる最高の境地である。だが、救済者にはそれは許されないものだったのだ。なぜなら、救済のためには自ら人々の苦悩の世界に飛び込み、その苦悩を自分が背負っていかなくてはならないのである。他の魂をマハー・ニルヴァーナに引き上げた後にマハー・ニルヴァーナに入る最後の魂とならなくてはならないのだ。

にもかかわらず、私は身近な人間に「自分は今、現世涅槃している」などと臆面もなく語るなどして、満足してしまっていた。何ということだ。ひたすら反省。それにしても、二千年前という過去からの手紙が私の目を覚ましてくれた。シヴァ神の大いなる愛を感ぜずにはいられない。

『目をさましていて、死にかけている残りの者たちを力づけなさい。』

これはもうおわかりになるだろう。自分だけ涅槃に入ろうとしている他の修行者達を、自己犠牲によって救済活動のできる大乗の修行の道へ導きなさい、ということになる。

そして、シヴァ神の命を聞けないのなら、

『わたしは盗人のように来るであろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決してわからない。』

とシヴァ神は続ける。全く予期しない時に突然やってきて、罰を与えるというのだろう。

実は、シヴァ神の逆鱗に触れたことがある。一昨年のことだ。理由は私の救済活動が遅れ気味になっていたことだった。そのとき、私はアストラル世界にあるシヴァ神の宮殿にいたのだが、シヴァ神は一言も発せず、いきなり私の頭を金棒で殴りつけたのだ。シヴァ神は、普段は修行の手助けをしてくださる大変優しい方なのだが、怒るとものすごく怖い——そういう方なのである。

「尊師、白い衣が出てきましたね。」

S君が感心したように言う。

『彼らは白い衣を着て、わたしと共に歩みを続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。勝利を得る者は、このように白い衣を着せられるのである。』

「これはもう言うまでもないね。」

白の衣はオウムのシッシャのユニフォームだ。特に大師の称号が贈られると、純白のシルクの衣をまとうことが許される。私達真理の道の修行者は、シヴァ神と共に歩み続けることができるのだ。

◉◉サハスラーラの崩壊――最終解脱の証明

ヨハネはヒラデルヒヤにある教会の御使いには、こう書き送るように言われる。

「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにもかかわらず、わたしの言葉を守り、わたしの名を否まなかったからである。……（略）……忍耐についてのわたしの言葉をあなたが守ったから、わたしも、地上に住む者たちをためすために、全世界に臨もうとしている試錬の時に、あなたを防ぎ守ろう。わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。」（第三章八～一一節）

「〝だれも閉じることのできない門を開いておいた〟というのは、何の門のことを言っているのでしょうか？」

「チァクラのことだよ、S君。」

「しかし、前に出てきたチァクラは七つの燭台を象徴としていましたよね。今回はたった一つですよ。チァクラが他の世界に通じている門だということはわかりますけど。」

「チァクラと言ってもね、最高位のチァクラであるサハスラーラ・チァクラを指しているんだよ。

このチャクラはね、開くというレベルを超えて崩壊させることができると二度と閉じることはないんだ。」

「サハスラーラ・チャクラを崩壊させる……。」

「そうだ。最終解脱をするときにこれは崩壊するんだ。そして、最終解脱の特別な身体がここから抜け出せるようになる。つまり、二度と閉じることのないサハスラーラ・チャクラから特別な身体が出入りすることができる——だから、〝だれも閉じることのできない門〟なんだよ。」

「言い換えれば、この門を開くということが最終解脱の証明ということになりますね。」

「そうそう、そういうことになる。そして、もうこれが開いているというのだから、これは間違いなく最終解脱を果たした私への呼びかけだね。」

◉◉神の聖所（せいじょ）——シャンバラ

M大師が尋ねた。

「尊師、その最終解脱の特別な身体というのは、どういう世界へ行くことができるんですか?」

「限りなく高い世界から低い世界まで自由自在だ。例えば、純粋（高位）コーザル世界にも行けるし地獄にも行ける。

またね、最終解脱者であり救済者である者が、この世の肉体を捨てる決心をしたときには、そ

の身体でシャンバラに飛び、そこに住むことが許されている。シャンバラとはね、マハー・ニルヴァーナで安住する資格があるのに、それを捨てて救済の道を選んだ者達が集う世界だ。そう言えば、この世界の門もシヴァ神がだれかのために開こうと意思されるとその人が入るまで絶対に閉じることはない。とすると、シヴァ神はサハスラーラ・チャクラだけではなく、シャンバラの門も私のために開いたという二つのことを私に言っていると考えていいね。」

「その解釈だと一番スムーズですね。最後の部分にシャンバラを思わせる記述がありますね。」

とS君。

『勝利を得る者を、わたしの神の聖所における柱にしよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。』（第三章一二節）

〝柱〟と表現しているからには、〝神の聖所〟（シャンバラ）の確固たる存在、つまり住人とするという意味だ。そして『彼は決して二度と外へ出ることはない』と保証している。

私の考えでは、〝二度と出ない〟と言ってもシヴァ神の命で、この世に救済者として降りることはあると思う。だがそれもシャンバラでの時間を単位としたら、瞬き程度の時間なのであろう。

それにしても、この手紙にも『全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。

わたしは、すぐに来る。あなたの冠がだれにも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい』と書かれている。何回も同じ未来ヴィジョンが繰り返し言われているのだ。もう間違いない。これらの手紙は七通とも私と真理の道の修行者達にあてられているのだ。そして、〝全世界に臨もうとしている試練の時〟は間もなくやってくるのだ。

◉◉涅槃のときではない

最後の、ラオデキヤにある教会の御使いへの手紙はこうである。

『わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言っているが、実は、あなた自身がみじめな者、あわれむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸な者であることに気がついていない。そこで、あなたに勧める。富む者となるために、わたしから火で精錬された金を買い、また、あなたの裸の恥をさらさないため身に着けるように、白い衣を買いなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買いなさい。すべてわたしの愛している者を、わたしはしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改め

なさい。見よ、わたしは戸の外に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中にはいって彼と食を共にし、彼もまたわたしと食を共にするであろう。勝利を得る者には、わたしと共にわたしの座につかせよう。」（第三章一五～二一節）

シヴァ神は言われる。「あなたは冷たくもなく、熱くもない」と。これも現世涅槃してしまっていた私を指しているのだろう。

更に「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、なんの不自由もないと言ってるが――」これもこのときの私だ。決して私は富んではいないが、不自由というものがなかった。シッシャや信徒の皆さんがそれこそ至れり尽くせりのことをしてくださるのだ。つい最近、そういう人たちの尽力によって、私は生まれて初めて自分専用の修行場を持つことさえできた。新畳を敷きつめた広々とした空間、冷暖房完備、防音設備、特殊なクッション天井（これは空中浮揚して頭をぶつけても大丈夫なように）、そしてこれまた特注の水槽のあるバスルーム付き（この水槽は、水中サマディの練習用である）。しかも図書室兼書斎まであるのだ。

電気もなく、水や食物にさえ不自由なヒマラヤ山中で猛烈に修行していた頃がウソのようだ。また、自ら望んで頭陀（ずだ）の行さえしていたというのに。

今このようなあまりにも恵まれた環境で、現世涅槃してしまっていたなんて我ながら情けない。

シッシャや信徒の皆さんが私のために修行場を贈ってくださったのなら、今までの何倍、何十倍もの修行をしてその心に報いらなければならなかったのだ。救済の悲願の達成に向けて、自分自身がもっともっと力をつけなくてはならなかったのだ。

シヴァ神が言われるように、シヴァ神から火で精錬された金を買わなければならない。白い衣を買わなければならない。目薬を買わなければならない。

〝火で精錬された金〟とは、すなわち黄金色に燃えるクンダリニー。修行をしてクンダリニーをどんどん上げろということである。〝白い衣〟とは、シヴァ神の意に沿う活動と功徳を積むこと。白は功徳のエネルギーの色なのだ。そして、〝見えるようになるため、目にぬる目薬〟。これは曇りがちになっていた私の心の眼を澄ませなさいということなのである。

「グル・シヴァ神よ。私は七通の手紙を読むことによって生まれ変わりました。心から感謝いたします。」

第二章

七つの封印が今解かれる

小羊の使命——シャンバラからの示唆

◉◉シャンバラのシヴァ神

次の第四章から、いよいよ「ヨハネの黙示録」は未来ヴィジョンを明らかにする預言へと移っていく。

「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから後に起こるべきことを、見せてあげよう。」

シヴァ神はヨハネに言った。ヨハネはその言葉に従い天に昇っていく。

すると、そこには御座があり、御座に座っていらっしゃる方があった。その方は、碧玉や赤めのうのように見え、また御座の周囲には緑玉のように見える虹が現われていた。

また、御座の周りには、二十四人の長老が白い衣を身にまとい、頭に金の冠をかぶって、それぞれの座についていた。

御座からは、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが発せられていて、七つのともし火が燃えている。御座の前は、まるで水晶に似たガラスの海のようだった。

御座の周りに四匹の生き物がいた。それらは、その前にも後ろにも一面に目を持っていた。第一の生き物は獅子のよう、第二の生き物は雄牛のよう、第三の生き物は人のような顔を持ち、第四の生き物は鷲のようであった。四匹の生き物には、それぞれ六つの翼があって、その周りにも内側にも数多くの目があった。

そして、四匹は昼も夜もこう叫び続けていた。

「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、
全能者にして主なる神。
昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者」

四匹が、御座にいる世々限りなく生きておられる方に、栄光と誉を帰して感謝をささげているとき、二十四人の長老はその方の前にひれ伏して拝み、彼らの冠を御座の前に投げ出して言った。

「われらの主なる神よ、
あなたこそは、
栄光とほまれと力とを受けるにふさわしい方。
あなたは万物を造られました。
御旨によって、万物は存在し、
また造られたのであります」

（第四章一～一一節参照）

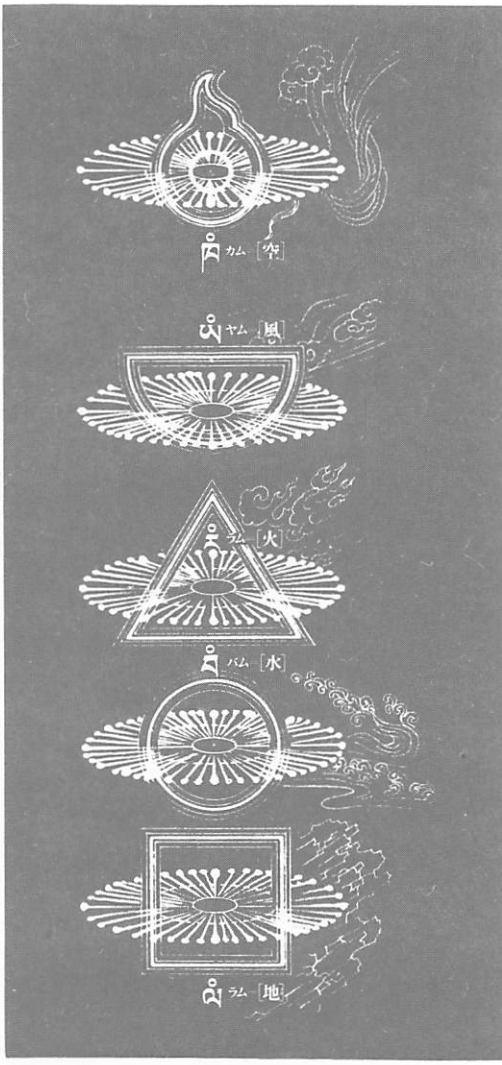
この〝御座にいる方〟はだれであろうか？　実は、この方もシヴァ神だったのである。シャンバラでは五元素（宇宙を構成している五つの要素でありエネルギーである）のうちの火元素によって、身体が赤く見える。また、風元素によって、まるで緑色の衣をまとっているかのように見えるのである。したがって、ヨハネに碧玉（緑色の宝石）や赤めのうのように見えても、異様でも何でもない。ヨハネはシャンバラのシヴァ神を見たのだ。

まあ、これだけでは全くシヴァ神だという決め手とはならないのだが、後に出てくる〝いなずま〟も〝雷鳴〟もシヴァ神の象徴である。しかも〝世々限りなく生きている〟という言葉。覚えていらっしゃるだろうか？　〝人の子のような者〟の姿をしたシヴァ神も、ヨハネにこう語っている。『わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である』と。全く同じではないか。

それだけではない。その方の御座の周りには、緑玉のように見える虹が現われているというのだ。緑玉とはエメラルドのこと。エメラルドのように透明な美しい緑色の虹、これはシヴァ神がその身体から発しているエネルギーがそのように見えるのである。

ちなみに、シャンバラは蝶の形をした緑色と透明光に満ちた空間だ。それは、シャンバラの根本であるシヴァ神のエネルギーの影響である。ヨハネも言っている。『御座の前は、水晶に似たガラスの海のようであった』と。透明光によってそのように見えるのである。

元素	色
空	青
風	緑
火	赤
水	白
地	黄



五大元素と色との対応

また、シャンバラだけでなくアストラル世界にあるどの世界にも透明光がある。私もよくアストラル世界のことを人にわかってもらおうとするとき、〝光り輝く海〟とか〝サットヴァに輝いている空間〟等の表現を使っているのである。

◉◉封じられた巻物が指すものは?

ヨハネは、御座にいらっしゃる方の手に巻物があることに気付く。その巻物には、内側にも外側にも字が書いてあった。そして、七つの封印で封じてあった。

一人の御使いが、大声で、

「その巻物を開き、封印を解くのにふさわしい者は、だれか。」

と呼ばわっていた。しかし、天にも地にも地の下にも、その巻物を開いてそれを見ることのできる者は一人もいなかった。それを知ったヨハネは激しく泣いた。

すると、一人の長老がヨハネに言う。

「泣くな。見よ、ユダ族の獅子・ダビデの若枝(わかえだ)である方が、勝利を得たので、その巻物を開き七つの封印を解くことができる。」

と。

(第五章一～五節参照)

この辺の言葉自体は非常にわかり易く書かれている。が、そのわかり易い言葉の裏にかえって重要な意味が隠されていることを私は知った。

例えば、どうしてその巻物には内側にも外側にも字が書いてあったのか？　一見何でもないことのようだけれど、ちょっと考えてみれば普通は表にしか文章は書かないのではないか、ということに気付くことだろう。

だとしたら、内側と外側の両方に書かれているというのは何を暗示しているのだろうか？　内と外。まず考えられるのは、内側には秘すべき事柄、外側には公開してもかまわない事柄が書かれているということだ。内側は封印を解くまで見えないのだから。そして一枚の巻物の表・裏——これはその表と裏に書かれていることが対照的な内容であることを表わしているのではないだろうか？

で、このあと封印が解かれて未来ヴィジョンが見えてくることを考えると、巻物の一面は間違いなく『黙示録』ということになる。では外側は？　『黙示録』と対照的な文章が存在しているのか？

それを見つけるのは容易だった。『黙示録』が含まれている『新約聖書』に対して『旧約聖書』があったからだ。そう、だれが読んでもかまわない対照的なものは『旧約聖書』だったのである。

例えば、『創世紀』ではこう書かれている。

『旧約聖書』の中の『創世紀』と『黙示録』とを比較してみよう。

「『天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現われよ。』……（略）……神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。」

これに対して『黙示録』では、

「海もなくなってしまった」

となっている。

また、『創世紀』で

「神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。」

となっているが、『黙示録』では、

「そこには夜がない」

など、随所にその対照的な記述を発見することができるのである。

全体的に見ると『旧約聖書』にはアダムとイブの楽園追放から始まって人間が神から遠ざかっていくプロセスが書かれている。それに対して、『黙示録』には一部の人間が神に近付いていくプロセスが書かれているのだ。このことは、『黙示録』を読み進めていくうちに一層明らかになっていくだろうが、今までの手紙の部分を読むだけでも納得できることと思われる。

その他にも、〃内側〃と〃外側〃によって暗示されていることがありそうだ。内側は深い意味が隠されていることを表わし、外側は表面的な意味をとったり、いろいろな意味に解釈してしま

うということを表わしているとも言えるだろう。

また、外側の『旧約聖書』の方を先に理解しておきなさい、ということを言っているのかもしれない。『旧約聖書』を読んでおいた方が、『黙示録』を解釈し易いということは事実である。

◉◉封印を解く者——ダビデの若枝（わかえだ）

〝ダビデの若枝である方が封印を解くことができる〟という言葉には注意していただきたい。天にも地にも地の下にもこの封印を解ける者はいなかった。だが、たった一人、ダビデの若枝である方が解くことができるようになったというのだ。それはだれなのであろうか？

ダビデという名は有名なのでご存じの方も多いであろう。紀元前一〇〇〇年頃から約四十年間イスラエル王国の王であった人である。

もともとは羊飼いの少年にすぎなかったのだが、知恵と武勇に優れていたのをイスラエル国王のサウル王に認められて引き立てられ、後に王女と結婚するまでになった。その後王との間に大きな亀裂が生じ、ダビデは一度はイスラエル王国を出ることとなったものの、サウル王がペリシテ人との戦いに敗れて戦死した後、推されて王位を継ぐ。

王となった彼は、次々と近隣諸国の征服に成功し、イスラエル王国の黄金時代を築き上げるとともに、宗教にも大変力を入れたため、王の宗教上の権力が強化されたのであった。

また、ダビデ王の名は聖書にも登場し、英雄扱いをされ、「主の僕」「祭儀の祖」などともいわれている。

さて、このような〝ダビデの若枝〟とは一体？　若枝というのは幹から出ている。幹ではないが同じ系統の新しいものだ。ということは、〝ダビデ王に似た新しい者〟とみて差し支えなかろう。

次に、〝ダビデの若枝〟はヨハネの前に姿を現わす。更に読み進めてみよう。

◉◉世々限りなく栄光と賛美の中に……

ヨハネは、御座と四匹の生き物との間、長老たちの間に、ほふられたと見える小羊が立っているのを見た。それは七つの角と七つの目を持っていた。これらの目は、全世界につかわされた、神の七つの霊だ。小羊は進み出て、御座にいらっしゃる方の右の手から、巻物を受け取った。巻物を受け取ったとき、四匹の生き物と二十四人の長老は、それぞれ立琴と香の満ちている金の鉢とを手に持って、小羊の前にひれ伏した。この香は聖徒の祈りだ。

彼らは新しい歌を歌って言う。

「あなたこそ、その巻物を受けとり、封印を解くのにふさわしい方です。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに

至るでしょう。」

御座と生き物と長老達との周りに、多くの御使い達の声があがるのが聞こえた。その数は万の何万倍、千の何千倍もあって、大声で叫んでいた。

「ほふられた小羊こそは、
力と、富と、知恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、
さんびとを受けるにふさわしい。」

ヨハネは、天と地、地の下と海の中にあるすべての造られたものと、すべてのものの言う声を聞いた。

「御座にいます方と小羊とに、
さんびと、ほまれと、栄光と、権力とが、
世々限りなくあるように。」

四匹の生き物はアァメンと唱え、長老達はひれ伏して礼拝した。（第五章六～一四節参照）

ここに至って〝ダビデの若枝〟の正体が、少しばかりはっきりしてくる。〝ほふられたと見える小羊〟であったのだ。

◉◉ほふられた小羊――救済者の象徴

〝ほふられた〟というのは、本来は〝体を切り裂かれた〟という意味である。が、『聖書』では、いけにえの小羊等をほふってその血を祭壇の周りに注ぎかけたり、脂肪や肉を祭壇で焼いて神に捧げたりしたことから、いけにえを意味するようになっている。つまり、〝ほふられた小羊〟というのは、いけにえになった小羊ということなのだ。

しかし、ヨハネが小羊と言っていても、間違ってもかわいい目をして柔らかい羊毛にくるまれた羊の仔をイメージしてもらっては困る。小羊は〝力と、富と、智恵と、勢いと、ほまれと、栄光と、さんびとを受けるにふさわしい〟のだ。それは、ほふられて血を流すことによって、何やら神のために偉業を成し遂げたからであるらしいということも理解できる。つまり、他のために自らを犠牲にした救済者を象徴しているのが小羊なのだ。

先ほど、私が述べたシャンバラのことを思い出していただきたい。シャンバラは、絶対自由・絶対幸福・絶対歓喜の世界であるマハー・ニルヴァーナへ入る資格があるのに、それを捨てて救済者となった者が集う世界なのである。そのことからも、この小羊がシャンバラに住む救済者の一人であることがご理解いただけよう。

また、その救済者がシヴァ神のしもべであり、完全にその教えに帰依し、また力、富、栄光等を受けるにふさわしいということから、主のしもべであり宗教的であり英雄であったダビデの名

が出てきたのだろう。

ところで、ヨハネがイエス・キリストの十二使徒の一人であったせいか、〝ほふられた小羊〟がイエス・キリストを指しているような印象が強いが、そう断定することは避けた方がよいと思う。なぜなら、シャンバラには時間というものが存在していないからだ。存在していないというのが少しおかしいのなら超越していると言おうか。過去も現在も未来もないのだ。だから〝昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者〟という言い表わし方もきわめて自然である。

だが、いくらなんでも普通の人間にこの特殊な時間の観念を理解しろと言っても到底無理である。「こういうものなのか」程度に思ってくださるだけでいい。なお、この特殊な時間を体験的に知っているのは、瞑想に熟達してアストラル世界に飛ぶことのできる修行者だけである。

まあ、今述べたような理由から、この小羊で象徴される、『ほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、神のために彼らを御国の民とし、祭司とした』者を、ヨハネの持っている時間の感覚で六十五年前に十字架にかけられたイエスと結び付けてしまうと短絡的になってしまう恐れがあるのである。もっと過去のことかもしれないし、もっと未来のことかもしれないのだ。

黙示録の四騎士——歴史は綴られる

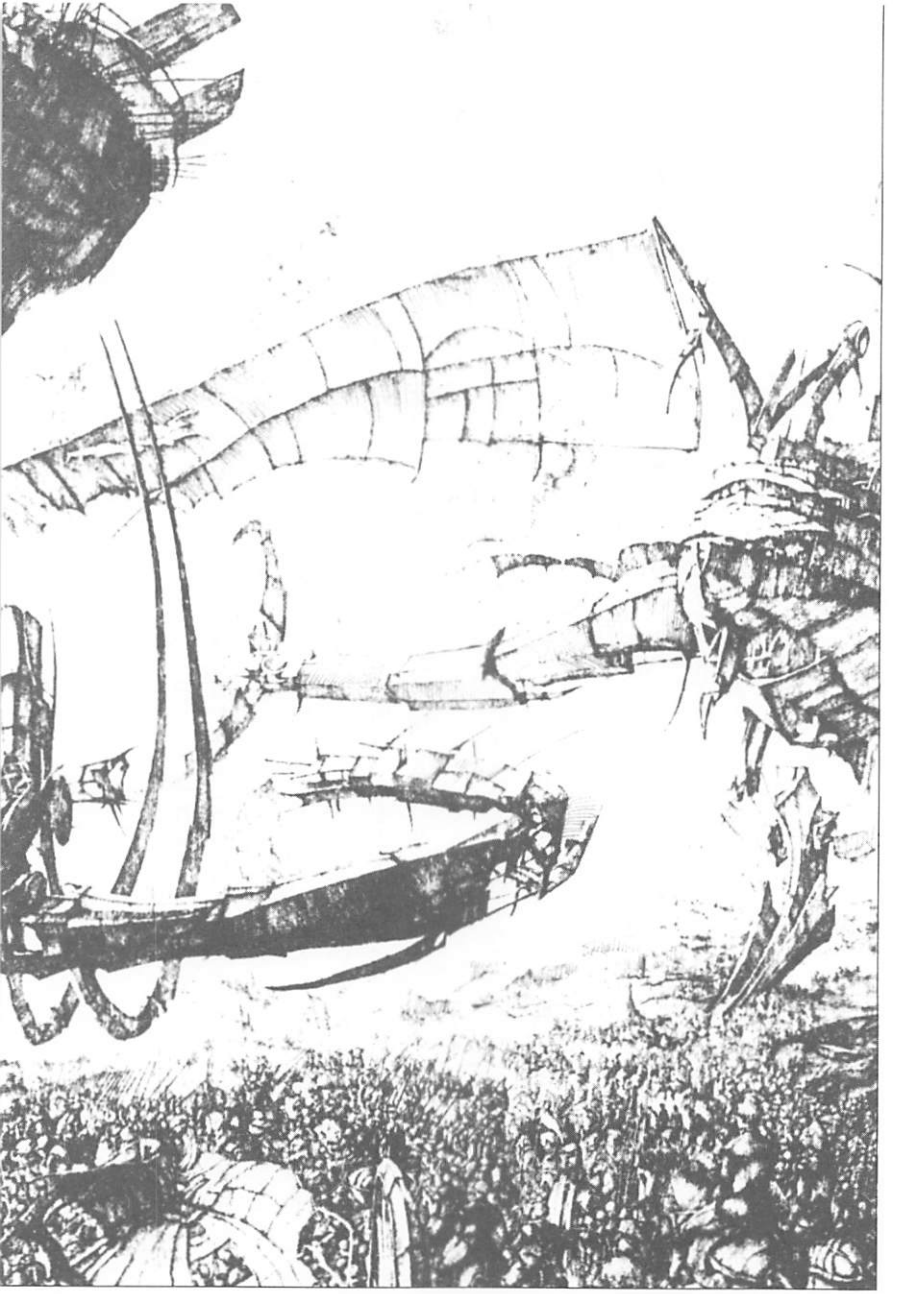
◉◉解かれゆく封印——明かされる真実

小羊はその後、七つの封印を一つ一つ解いていく。その度にヨハネの眼前に未来ヴィジョンが現われ、そして過ぎていくのである。ヨハネはこう書いている。

小羊がその七つの封印の一つを解いた時、わたしが見ていると、四つの生き物の一つが、雷のような声で「きたれ」と呼ぶのを聞いた。そして見ていると、見よ、白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、弓を手に持っており、また冠を与えられて、勝利の上にもなお勝利を得ようとして出かけた。

小羊が第二の封印を解いた時、第二の生き物が「きたれ」と言うのを、わたしは聞いた。すると今度は、赤い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、人々が互に殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取ることを許され、また、大きなつるぎを与えられた。

また、第三の封印を解いた時、第三の生き物が「きたれ」と言うのを、わたしは聞いた。そ



こで見ていると、見よ、黒い馬が出てきた。そして、それに乗っている者は、はかりを手に持っていた。すると、わたしは四つの生き物の間から出て来ると思われる声が、こう言うのを聞いた、「小麦一ますは一デナリ。大麦三ますも一デナリ。オリブ油とぶどう酒とを、そこなうな」。

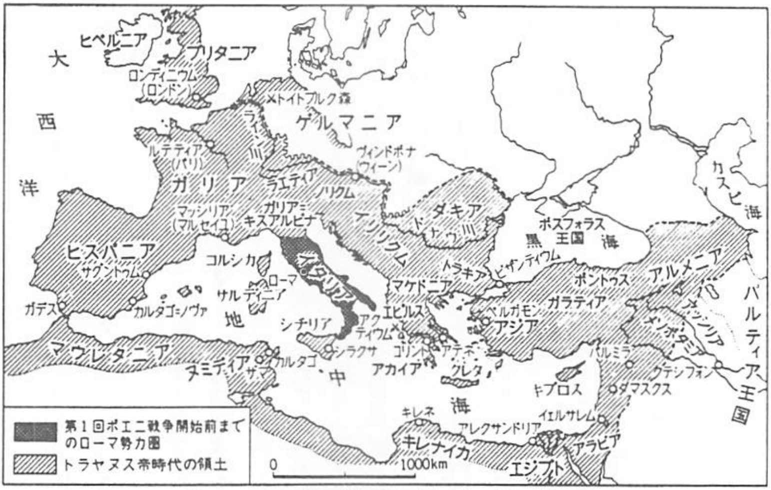
小羊が第四の封印を解いた時、第四の生き物が「きたれ」と言う声を、わたしは聞いた。そこで見ていると、見よ、青白い馬が出てきた。そして、それに乗っている者の名は「死」と言い、それに黄泉が従っていた。彼らには、地の四分の一を支配する権威、および、つるぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが、与えられた。（第六章一～八節）

ここでは一つの封印を解くごとに、それぞれ色の違う馬とそれに乗っている者とが預言として出てきている。そして、四つの封印までの四つの預言が書かれているので、最初から順を追って検討していってみよう。

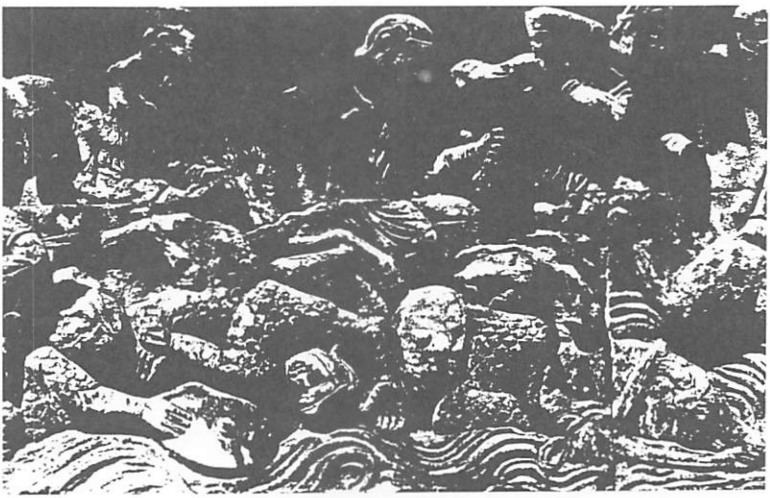
◉◉白い馬――キリスト教の発展

最初は弓を手にした者が、白い馬に乗って出てくる。そして、冠を与えられて、勝利の上にも勝利を得ようとして出かけて行ったというのである。

「これは、ローマ時代のキリスト教公認のことだ。」


ヒベルニア
ブリタニア
大
西
洋
ロンディニウム
(ロンドン)
トイトブルク森
ゲルマニア
ライン川
ルテティア
(パリ)
ヴィンドボナ
(ウィーン)
ガリア
ラエティア
ノリクム
マッシリア
(マルセイユ)
ガリア＝キスアルピナ
イリリクム
ダキア
ドナウ川
ボスフォラス王国
黒海
カスピ海
ヒスパニア
サグントゥム
コルシカ
ローマ
イタリア
サルディニア
トラキア
ビザンティウム
ポントゥス
アルメニア
マケドニア
エピルス
ペルガモン
ガラティア
アジア
ガデス
カルタゴ＝ノヴァ
地
中
海
シチリア
アクティウム
メソポタミア
アッシリア
パルティア王国
マウレタニア
ヌミディア
ザマ
カルタゴ
シラクサ
コリント
アテネ
アカイア
クレタ
パルミラ
クテシフォン
キプロス
ダマスクス
キレネ
イェルサレム
アレクサンドリア
キレナイカ
エジプト
アラビア
第１回ポエニ戦争開始前までのローマ勢力圏
トラヤヌス帝時代の領土
0
1000km

ロ ー マ 帝 国 の 最 大 領 域



考えたわけでもないのに、ふと口をついて出たのがこういう言葉だった。果たしてこの文に一致しているのかどうか、三人で世界史をひも解いてみる。

M大師、

「キリスト教は、三一三年のミラノ勅令で、コンスタンティヌス帝によって公認されています。」

「じゃあ、そのときのローマ情勢を調べてみようか。」

当時コンスタンティヌス帝は、帝国西半部で実権を握り、三一〇年より自ら正帝を名乗っていたが、その帝位は正式に認められてはいなかった。

三一一年、帝国は内乱状態に陥り、翌年彼は対立していたマクセンティウスの全軍を全滅させるという大勝利を収める。この出来事が、戦いを表わす〝弓〟と〝勝利〟によって表現されている。勝利を得た彼は、ローマに入城し、第一正帝位を宣した。ここに〝冠を与えられ〟たのだ。ちなみに、現在もローマにある有名な凱旋門は、この勝利を記念して建てられたというものである。さて、コンスタンティヌス帝の野望はとどまることを知らず、西半分だけでなく、帝国全土の独裁者となることを彼は望んだ。

〝勝利の上にも勝利を得る〟ためにはどうしたらよいか？　そこで彼が目をつけたのが、キリスト教を公認して、キリスト教徒を抱き込むことだったのである。

あの暴君と呼ばれたネロ帝以来、キリスト教徒は残酷な迫害を受け続けてきた。しかし、それ

にもかかわらず、ローマ帝国内（特に東半部）で増加の一途をたどっている。これを公認することで味方につけることができたら――。コンスタンティヌス帝はキリスト教に改宗し、公認するに至った。馬の白は功徳の白だ。宗教とともに勝利を得ようとしている様子が明確に現われているではないか。

三二四年、彼はとうとう帝国全土を手中に収めることに成功する。預言の言葉と一字一句違わないと言ってもいいだろう。

ところで、この預言は何が目的だったのか？　私はコンスタンティヌス帝よりも、むしろキリスト教の方に重点が置かれていたと考える。このキリスト教公認は、キリスト教が世界的な大宗教として発展していく第一歩を築いたものであったからだ。その後のキリスト教が、いかに世界の情勢や文化に関与してきたかを考えると、人類の歴史はキリスト教を抜きにしては語れない。そこにこの出来事が『ヨハネの黙示録』に載せられた理由があるのだろう。私はこの預言書の中にある預言は、一つの例外もなく人類に大きな影響を与える出来事についてのものであると確信している。

◉◉赤い馬――戦争の歴史の始まり

次に小羊が第二の封印を解く。このとき現われたのは、赤い馬とそれに乗っている者だ。彼は

『人々が互に殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取ることを許され、また、大きなつるぎを与えられた』のだという。

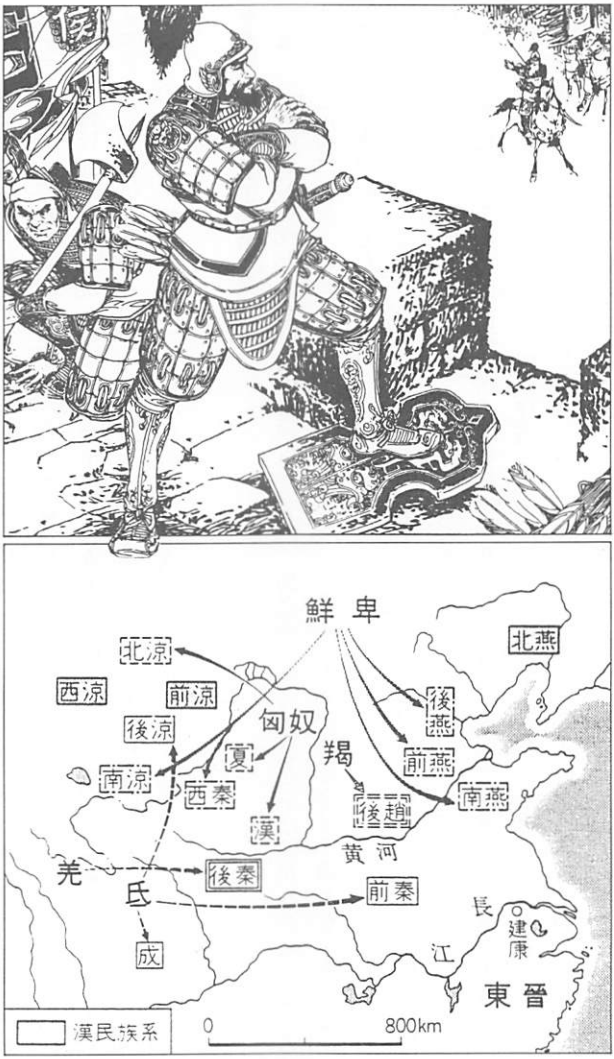
これが戦乱を暗示しているのは明らかである。よく「人類の歴史は戦争の歴史でもある」といわれるが、右の表現ではこのときからそれが始まろうというニュアンスが強い。

確かに、先に述べたローマ時代以前から、戦いは繰り返し行なわれてきた。しかし、戦乱の世というのはなかったのである。その後、ゲルマン系の諸部族が大移動を始め、ローマ帝国内に侵入してきたときでさえ、両者の間に平和的な土地分割が行なわれているのだ。まだまだ、ゆったりとしているような感じを受ける。

とかく世界の歴史というと、特に初期はヨーロッパに目が向きがちであるが、グローバルな視野を持って見ようではないか。早くも三〇〇年代以降、人間の持つ闘争本能やエゴが一気に表面化したような、戦乱の世に陥った大陸がある。中国大陸である。

『五胡十六国時代』と呼ばれた時代、中国大陸では十六もの国が異民族の武力を導入、利用するなどして、激しい興亡を繰り返した。名を挙げられている十六国以外にも、非常に短命だった国や他の諸国、国と言うには及ばない小政権までもが、中国を舞台に各地で戦争をしているというまさに殺し合いの時代だ。

この時代以降、私は世界各地で本格的な戦争の歴史が始まったと解釈している。その原因は、


鮮卑
北涼
西涼
前涼
後涼
南涼
匈奴
夏
西秦
漢
羯
後趙
北燕
後燕
前燕
南燕
黄河
羌
氐
後秦
前秦
成
長江
建康
東晉
漢民族系
0
800km

五胡十六国時代の中国

民族や国家の動きが活発化して世界が狭くなってきたことが挙げられよう。自分側の利益だけを考えての戦争である。それは現代にだってあるのだ。

また、付け加えるならば、この時代に中国では火薬が発明されている。大量殺人を可能とする火薬だ。馬の赤は戦乱だけでなく火薬の発明も暗示しているかもしれない。聖書の原典と同じヘブライ語の『ヨハネの黙示録』では、馬の色は〝火のような色〟とされている。

◉◉黒い馬——貨幣経済の発達

第三の封印が解かれたとき、黒い馬が出てきた。馬に乗っている者が手にはかりを持っている。そして、『小麦一ますは一デナリ。大麦三ますも一デナリ。オリブ油とぶどう酒とを、そこなうな』という声が聞こえたというのだ。

〝デナリ〟というのは貨幣の単位で、小麦一ますがいくら、大麦三ますがいくらと、貨幣が絶対的な力を持つようになることを預言している。つまり、貨幣経済の発達だ。

六～七世紀頃になると、各地で商工業や貿易が発達し、貨幣の重要性が増した。西ヨーロッパでも東ローマ帝国でも中国でも貨幣経済の発達がその時代の特徴として挙げられている。

貨幣経済の発達にともない、どういう現象が起こるだろうか？　それが馬の黒で表わされているのだ。人間が貨幣や物質に支配されて、貪欲になってくるのである。

「オリブ油とぶどう酒とを、そこなうな」

とは、それに対する警告と受け取ってよいだろう。オリブ油というのは、いけにえを捧げる儀式の灯油としたり、清めに使ったりする聖なる油である。良きことの象徴と言ってよいだろう。

これに対して、ぶどう酒は『ヨハネの黙示録』において、悪業が満ちてそれを清算させるときの象徴として使われているようだ。つまり悪いことを指しているのである。

したがって、良いことと悪いこととをそこなうな――これは「カルマの法則をそこなうな」という意味なのである。

◉◉青白い馬――地を支配するイスラム教

小羊が第四の封印を解くと、青白い馬が出てきた。それに乗っている者の名は「死」、黄泉がそれに従っている。彼らには地の四分の一を支配する権威、および、つるぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが与えられたという。

青白い色というのは、正しくない信仰や次元の低い信仰を表わしているアストラル世界の光の色である。だから、この馬の色は正しくない宗教を表わしていると見てよいだろう。そして、その宗教には死と黄泉がついているのだという。この世界の何の宗教を指しているのだろう?

ヒントになることは、地の四分の一を支配するらしいことである。現代までの宗教の勢力分野

を見てみると、イスラム教がちょうど四分の一になっていることに驚く。これは完全なるイスラム教国とイスラム教徒の多い国々を合わせての数字なのだ。例えばアフリカ大陸の三分の二近く、アラビア半島全域、インド、トルコ、イラン、パキスタン、アフガニスタン、インドネシア、中国とソ連の一部などである。

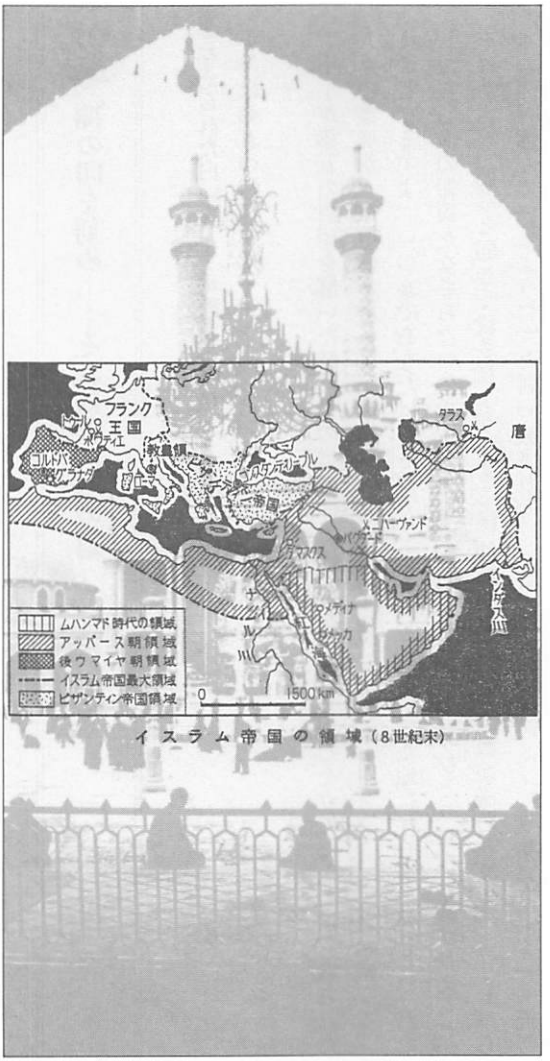
しかもこれらの国々は、ききん（食糧不足という訳もある）と猛獣の多い地域ではないか！つるぎに象徴される戦争までも多いではないか！　つい最近まで中東は戦場だったのだ。ソ連のアフガニスタン侵攻もあったし、インド・パキスタン戦争もあった。それだけでなく、イスラム教自体、ほとんど武力侵略によって広まったのだ。侵略先の宗教や文化を破壊しながら。

この預言は、世界的大宗教となったイスラム教についてのものだったのだ。

しかし、〝死と黄泉〟とは？　武力侵略でも死と黄泉はついて回ったはずである。しかし、ひょっとしたら、もっと未来のことを指しているのかもしれない。人類最終戦争といわれている第三次世界大戦の火を、イスラム教国がつけるとか……。私はなんとなくそんな気がして怖い。

なお、イスラム教では六二二年をヒジュラ（イスラム教暦）元年としている。これは、当時迫害に遭って宣教活動の危機に瀕していたイスラム教の創唱者ムハンマド（マホメット）が、信徒を連れてメッカを脱出、メディナに移住した年である。

今までの四つの預言はすべて馬が出てきた。これは、それらキリスト教・戦争・貨幣経済・イスラム教が馬のように突き進んでいくこと（大発展して世界に大きく影響すること）を暗示していたと言えよう。



イスラム帝国の領域（8世紀末）

神の印を刻め——それは救済への道

◉◉

◉◉与えられた白い衣——殉教者の叫び

小羊は第五の封印を解く——。

小羊が第五の封印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々の霊魂が、祭壇の下にいるのを、わたしは見た。彼らは大声で叫んで言った、「聖なる、まことなる主よ。いつまであなたは、さばくことをなさらず、また地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか」。すると、彼らのひとりびとりに白い衣が与えられ、それから、「彼らと同じく殺されようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいるように」と言い渡された。（第六章九～一一節）

「〝神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、殺された人々〟と言えば殉教者を指していますね。」

「それは間違いないと思うよ、S君。神の意に適う殉教を遂げた人々が『神よ、いつまで自分達の血の報復をしないのか』と叫んでいるんだ。私は、中世以降のキリスト教には疑問を感じるけれど、それ以前は真理だったんだと思うよ。だからこそ、それまでの迫害時代の殉教者に〝白い衣〟が与えられたと、こう解釈するね。白は真理の宗教の色、天界に至る白だから。」

「尊師、ここではキリスト教以外の殉教者は含まれてないんですか？」

「M大師、前の預言を見てごらん。シヴァ神はなぜかイスラム教は正しくないとしてらっしゃる。だからイスラム教は除外されるだろう。私の記憶では、仏教は強力な保護者がいない時代に衰退したことはあっても、この時代までに迫害されたことはなかった。その他の宗教についてはよく知らないが、当然、真理の殉教者がいたら含まれるだろう。」

「なるほどわかりました。」

「ところで〝もうしばらくの間〟待てとなっているところが気になる。果たして、いつまで待てというのか、いつ血の報復をするというのか。私は、これは人類滅亡の時代を指していると考える。」

「そのとき、真理のためには死をいとわない人々の数が満ち、神は邪悪なる者たちに血の報復をすると――。」

そのとき、一体何が起こるというのだろう。

◉◉神の怒り——大噴火による洗礼

小羊が第六の封印を解いた時、わたしが見ていると、大地震が起って、太陽は毛織の荒布のように黒くなり、月は全面、血のようになり、天の星は、いちじくのまだ青い実が大風に揺られて振り落されるように地に落ちた。天は巻物が巻かれるように消えていき、すべての山と島とはその場所から移されてしまった。地の王たち、高官、千卒長、富める者、勇者、奴隷、自由人らはみな、ほら穴や山の岩かげに、身をかくした。そして、山と岩とにむかって言った、「さあ、われわれをおおって、御座にいますかたの御顔と小羊の怒りとから、かくまってくれ。御怒りの大いなる日が、すでにきたのだ。だれが、その前に立つことができようか」。

（第六章一二～一七節）

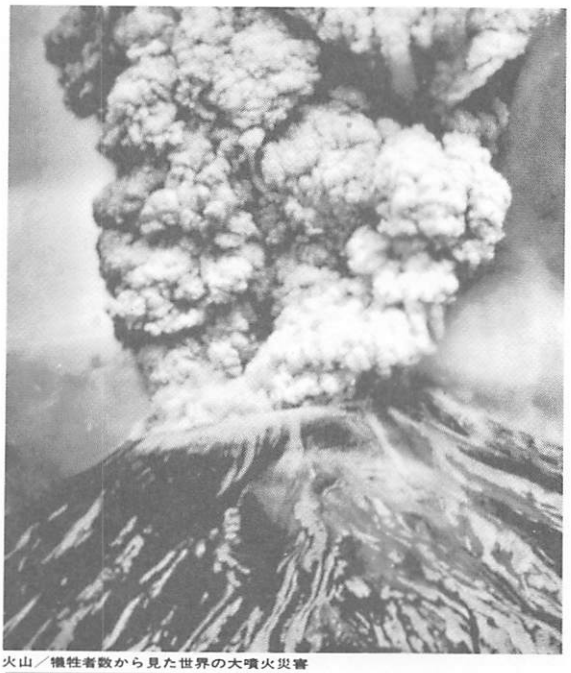
これは火山の噴火の描写であろう。M大師もS君も、「まったくもって大噴火の状態にそっくりだ」という。

「大師、この時期に大噴火の記録がないか調べてくれ。」

「えーと、ヨハネ以後だと、一一六九年のイタリアのエトナ火山の大噴火で一万五千人（二万人という説もある）が犠牲になっていますね。その後も、一六三一年、イタリアのベスビオ火山の噴火で死者一万八千人、一六六九年には再びエトナ火山の噴火で死者一万人。現代に近くなって

も、一九〇二年に西インド諸島で首都（サンピエール市）が全滅したというモンプレー火山の噴火があります。このときの犠牲者は何と二万九千人！　コロンビアのネバドデルドリス火山の噴火で二万二千人の犠牲者が出たのは三年前（一九八五年）です。」

「いつの時代になっても、神の怒りの前には人間は無力だということだ。」



火山／犠牲者数から見た世界の大噴火災害

火山名（所在地）	噴火年	死者概数(人)	備考
タンボラ(インドネシア)	1815	92,000	爆発による（餓死者をも含む）
クラカタウ島（インドネシア）	1883	36,000	おもに津波による
モンプレー（西インド諸島）	1902	29,000	熱雲で一市全滅
ベスビオ（イタリア）	1631	18,000	爆発、熔岩流出による
エトナ（イタリア）	1169	15,000	おもに熔岩流による
雲仙岳（日本）	1792	15,000	おもに津波による
ケルート（インドネシア）	1586	10,000	火山泥流による
エトナ（イタリア）	1669	10,000	おもに熔岩流による
ラーキ（アイスランド）	1783	10,000	熔岩流による(餓死者をも含む)
ケルート（インドネシア）	1919	5,100	火出泥流による
ガルンガン（インドネシア）	1822	4,000	おもに火山泥流による
アウ（インドネシア）	1711	3,200	おもに火山泥流による
ラミントン（パプア・ニューギニア）	1951	3,000	おもに熱雲による
メラピ（インドネシア）	1672	3,000	熱雲、火山泥流による

出典：理科年表62年度版

「じゃあ、噴火は神の怒りだと!?」

「そうだ。天界を司るのは五大元素で言ったら火元素だ。だから、人間の悪業が満ちてくると神は火元素を操ることで火山を噴火させて部分的にカルマ落としをしている。私が富士に道場を建てたのも、周囲のヴァイブレーションを良くすることで富士山噴火を防ぐためだった。現に、一時マスコミを騒がしていた〝前兆〟が収まっているだろう。しかし、この先悪業が勝ってしまったときは危ないね。何よりも怖いのは、このような自然の噴火でカルマを落とし切らなくなったときだ。神は人工的な火を使ってカルマ落としをさせるだろう。それがハルマゲドン（人類最終戦争）だ！」

M大師もS君も顔から血の気が引き、言葉を失っていた。火山の大噴火の爆発や溶岩流以上の惨状が繰り広げられるのだ。しかも、ハルマゲドンが今世紀末に起こるという予測は宗教界、予言界では根強い。もしそうなるとしたら、わずか十年後。あと十年しか残されていない。あなた自身が体験しなければならなくなるかもしれないのだ。戦慄すべきことに『ヨハネの黙示録』にもそれは暗示されている。

◉◉額の印——イニシエーション

小羊が第七の封印を解く前に、第七章の次の少々長い文が間に入る。

この後、わたしは四人の御使が地の四すみに立っているのを見た。彼らは地の四方の風をひき止めて、地にも海にもすべての木にも、吹きつけないようにしていた。また、もうひとりの御使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とをそこなう権威を授かっている四人の御使にむかって、大声で叫んで言った、「わたしたちの神の僕らの額に、わたしたちが印をおしてしまうまでは、地と海と木とをそこなってはならない」。わたしは印をおされた者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印をおされた者は十四万四千人であった。

ユダの部族のうち、一万二千人が印をおされ、
ルベンの部族のうち、一万二千人、
ガドの部族のうち、一万二千人、
アセルの部族のうち、一万二千人、
ナフタリの部族のうち、一万二千人、
マナセの部族のうち、一万二千人、
シメオンの部族のうち、一万二千人、
レビの部族のうち、一万二千人、
イサカルの部族のうち、一万二千人、

ゼブルンの部族のうち、一万二千人、
ヨセフの部族のうち、一万二千人、
ベニヤミンの部族のうち、
一万二千人が印をおされた。

その後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、部族、民族、国語のうちから、数えきれないほどの大ぜいの群衆が、白い衣を身にまとい、しゅろの枝を手に持って、御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った、

「救は、御座にいますわれらの神と
小羊からきたる」。

御使たちはみな、御座と長老たちと四つの生き物とのまわりに立っていたが、御座の前にひれ伏し、神を拝して言った、

「アァメン、さんび、栄光、知恵、感謝、
ほまれ、力、勢いが、世々限りなく、
われらの神にあるように、アァメン」。

長老たちのひとりが、わたしに向かって言った、「この白い衣を身にまとっている人々は、だれか。また、どこからきたのか」。わたしは彼に答えた、「わたしの主よ、それはあなたがご

存じです」。すると、彼はわたしに言った、「彼らは大きな患難をとおってきた人たちであって、その衣を小羊の血で洗い、それを白くしたのである。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えているのである。御座にいますかたは、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのち水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」。

（第七章一～一七節）

◉◉成就・解脱の示唆――もはや飢えることはない

「これはすごい。ぞくぞくしてくるね。」

私は思わず言った。

「これはタントラ・ヴァジラヤーナ、オウムそのものじゃないか。」

ここの文章は、先程書いたように挿入の形になっている。だから、今までの封印のように時代順の出来事と考えなくてもよいだろう。

タントラは、私の場合シヴァ神が導き教えてくださったように、シャンバラの宗教であり修行法なのである。そのタントラに〝四方からの風〟というのがあるので、ヨハネが見たものと同じ

ことを表わしていると考えていい。

すなわち、タントラの世界では、四方から風が吹き込んできて、十字金剛が現われ、世界の創造が始まるとされている。この風は、シヴァ神の象徴であり、何かを変化させるという働きをするのだ。

その風を引き止めているというのだから、変化が起こるのを止めているということになる。そして、文章から、変化が〝地と海と木とをそこなう〟ことであり、〝神の僕の額に印を押してしまうまで〟その変化が起こるのを止めておかなければならないのだということがわかる。

そして、額の印――それはオウムにあるではないか。そう、シャクティーパットだ。シャクティーパットは額から相手に霊的エネルギーを入れる技法であるが、そのエネルギーの根元はシヴァ神である。したがって、オウムでシャクティーパットを受けた人はすべて〝額に神（シヴァ神）の印を押された〟ということになるのだ。

となると、オウムでのシャクティーパットが終了するまで、〝地と海と木〟とをそこなうような変化が起こらないとも受け取れるが、皆さんはどうお思いになるだろうか？

では、〝衣を小羊の血で洗い、それを白くした〟というのはどういう意味か？　小羊というのは、他の人々のために犠牲となる救済者の象徴であった。そして、衣が白いということが、真の宗教心を培っているとか、真の宗教に帰依しているという意味であることもすでに何回か出てき

た。つまり、これは〝救済者の血で浄化され、真の宗教心を培った〟ということになる。

ここで、オウムのシッシャや信徒であったなら、「血のイニシエーション」を思い出すことだろう。「血のイニシエーション」は救済を目指す私の血による浄化・ステージの引き上げだ。シャクティーパットと同様、これもオウムに存在していたことになる。

では、「血のイニシエーション」を受けた人達はどんな幸福が約束されているかというと、「もはや飢えることがなく、かわくこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は彼らの牧者となって、いのちの水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとって下さるであろう」と言っている。これが現実的に単なる夢物語でないことは、オウムでは常識となっている。〝飢え、かわきがなく炎暑におかされることもない〟状態も、〝すべての涙がなくなる（＝苦悩がなくなる）〟状態も実際に成就・解脱によって得られるのだ。そして、〝いのちの水の泉〟――これは言うまでもなく、ツァンダリー（瞑想法の一種）がもたらす不死の甘露に他ならない。

これらの見事な一致には驚かざるを得ない。シヴァ神が「今こそ『ヨハネの黙示録』を解読すべきときが来た」と言っておられるからには、私達も心してオウムへの示唆を読み取ろうではないか。

《シャクティーパットについて》

シャクティーパットとは、本文にも書かれているように霊的エネルギー移入の技法である。成就・解脱した高いステージの修行者のみが、相手の額に右手の親指を当て、それを通じて霊的エネルギーを注入することができる。このとき、施す側は莫大なエネルギーを失う。それに対して、受ける側は移入されたエネルギーによって心身が浄化され、修行ステージが大幅にアップするのである。このシャクティーパットだけで三昧という瞑想の究極を体験したという例さえある。現在、オウム真理教では、少なくともラージャ・ヨーガ、クンダリニー・ヨーガ、ジュニアーナ・ヨーガという三つのヨーガを成就した大師がシャクティーパットを行なっている。

《血のイニシエーションについて》

これは、オウム真理教でのイニシエーション（秘儀伝授）の中でも最高峰とも言うべきもので、グル（師）が弟子にグルの血液中にあるデータをダイレクトに移入する方法である。限られたほんの一握りの人間しか受けることができない。当初は、私の血液を特殊な方法で与えていたが、現在では発達したバイオ・テクノロジーを利用し、ＤＮＡを取り出して利用している。

効果としては、シャクティーパットと似てはいるが、それがはるかに強められている。注意しなければならないのは、受ける側がこのイニシエーションを受けられるステージに達していない

場合である。潜在意識が浄化されていないうちにそれが顕現するため、かえって現象的に悪化したように見えることがあるからである。

言い換えれば、それだけ強力なイニシエーションなのである。

第三章

七つのラッパが鳴り響くとき

兵器の発達——戯画された戦争の歴史

◉◉第七の封印——雷鳴と、いなずまと

小羊が第七の封印を解いた時、半時間ばかり天に静けさがあった。それからわたしは、神のみまえに立っている七人の御使を見た。そして、七つのラッパが彼らに与えられた。

また、別の御使が出てきて、金の香炉を手に持って祭壇の前に立った。たくさんの香が彼に与えられていたが、これは、すべての聖徒の祈に加えて、御座の前の金の祭壇の上にささげるためのものであった。香の煙は、御使の手から、聖徒たちの祈と共に神のみまえに立ちのぼった。御使はその香炉をとり、これに祭壇の火を満たして、地に投げつけた。すると、多くの雷鳴と、もろもろの声と、いなずまと、地震とが起った。

（第八章一～五節）

「半時間ばかり天に静けさがあった」と言うからには、時代的に少し間をおいてということになろうか。香炉に火を満たして地に投げつけると、雷鳴・もろもろの声・いなずま・地震が起こったのであるから、これは、火器・火薬が実際に戦争で使われ出したということを暗示していよう。

それらが地上にどんな災いをもたらすか、次に続く。

そこで、七つのラッパを持っている七人の御使が、それを吹く用意をした。

第一の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、血のまじった雹と火とがあらわれて、地上に降ってきた。そして、地の三分の一が焼け、木の三分の一が焼け、また、すべての青草も焼けてしまった。

第二の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、火の燃えさかっている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして、海の三分の一は血となり、海の中の造られた生き物の三分の一は死に、舟の三分の一がこわされてしまった。

第三の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、たいまつのように燃えている大きな星が、空から落ちてきた。そしてそれは、川の三分の一とその水源との上に落ちた。この星の名は「苦よもぎ」と言い、水の三分の一が「苦よもぎ」のように苦くなった。水が苦くなったので、そのために多くの人が死んだ。

第四の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、太陽の三分の一と、月の三分の一と、星の三分の一とが打たれて、これらのものの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は明るくなり、夜も同じようになった。

また、わたしが見ていると、一羽のわしが中空を飛び、大きな声でこう言うのを聞いた、「ああ、わざわいだ、わざわいだ、地に住む人々は、わざわいだ。なお三人の御使がラッパを吹き鳴らそうとしている」。（第八章六～一三節）

◉◉第一、第二のラッパ――それは兵器の歴史

それでは、まず第一のラッパから第四のラッパまでを順に見ていってみよう。

第一のラッパは、火薬が兵器として使われ出したことを示している。M大師によると、それまではせいぜい投石器を使って戦争をしていた程度だったのが、一三一三年、ドイツのシュバルツが黒色火薬を発明し、火砲に応用したのだという。初期の火器は、「水瓶」とか、「鉄の壺」などと呼ばれていたそうで、ここでの「香炉」という表現ともぴったりと一致している。以来、大砲、鉄砲等に使われ、近くは一八四六年のソブレロ（イタリア）によるニトログリセリンの発明、ノーベル（スウェーデン）によるダイナマイトの発明と更に強力な殺傷兵器の発明の歴史は続いていくのである。

第二のラッパでは、大型戦艦の登場である。一四八五年、イギリスが青銅製大砲を搭載した軍艦を完成したのをはじめ、一五九一年、朝鮮が装甲軍艦完成と続いていく。十七世紀のイギリスの大型戦艦（排水量一一四一トン）、ソブリン・オブ・ザ・シーズが一〇二門もの大砲から火を吹

兵器の変遷

300頃	中国、黒色火薬を発明
1313	ドイツのシュバルツ、黒色火薬を火砲に応用
1355	手砲がヨーロッパに広まる
1430	ヨーロッパ、火縄式発火装置の小銃を発明
1485	イギリス、青銅製大砲搭載の軍艦を完成
1591	李氏朝鮮の李舜臣、装甲軍艦（亀甲船）を完成
1804	イギリス、ロケット砲弾を発明
1846	イタリアのソブレロ、ニトログリセリンを発明
1866	スウェーデンのノーベル、ダイナマイトを発明
1898	アメリカ、ホランド型潜水艦を発明
1906	ドイツ、Uボートを完成
1914	第１次世界大戦にて、飛行機を使用
1915	ドイツ、毒ガスを使用
1916	イギリス、戦車を使用
1938	イタリア、細菌兵器を完成
1939	ドイツ、He178ジェット機初飛行
1945	アメリカ、原子爆弾を使用
1952	アメリカ、水素爆弾の実験に成功
1957	ソ連、大陸間弾道弾（ICBM）の実験に成功
1959	アメリカ、戦略ミサイル（ミニットマン）の実験に成功
1961	アメリカ、ベトナムで枯れ葉剤等の化学兵器の使用を決定
1970	アメリカ、弾道ミサイル用の多核弾頭（MIRV）を実戦化
1981	アメリカ、トライデント型弾道ミサイル潜水艦を配備
1983	アメリカ、戦略防衛構想（SDI）を提唱

いているさまなど、まさに海にある、〝火の燃えさかっている大きな山のようなもの〟であったろう。

現代に至っては、科学の粋が取り入れられたきわめて高性能な軍艦が続々と誕生している。それらは、長射程のミサイルを搭載し、センサーを備え、戦闘機能はコンピュータ化されているのだ。ヨハネの見た〝わざわい〟は人類の終末に至るまで続いていくに違いない。

◉◉苦よもぎ——化学が災いをもたらす

第三の御使いのラッパによって、今度は『苦よもぎ』なるものが出てくる。これは実際に存在し、薬用になるという。アブサン酒というものをつくるときにも用いられるそうであるが、欧米では使用が禁止されている。それは多量に服用した場合の副作用があるからとされている。

また、面白いと思うのは、『苦よもぎ』には、ギリシア神話に登場する女神アルテミスにちなんだと思われるアルテミシアの名もあることである。

この女神様、若くて美しいのであるが、執念深くて残虐なところがその性格の特徴として有名である。自分の母親を侮辱したニオベに対し、その娘達を殺すことで復しゅうしたり、オリオンをサソリの毒で殺したりと、この類の話がギリシア神話に多く見られる。

これらのことは、あくまで参考までに書いたにすぎない。ところが、『苦よもぎ』によって多

くの人が死ぬということを考え合わせると、人類にとっての両刃のつるぎとも言うべき化学の発達が頭に浮かんでくることを否めない。一見良さそう（人類に素晴らしい恩恵をもたらしそう）な化学が、微量で人間を死に至らしめる毒薬をも合成してしまったということである。

大量生産できる化学合成の猛毒としては一七八二年にスウェーデンのシェーレが合成に成功したシアン化カリウム（青酸カリ）が最初であろう。以後、ますます発達していく化学は化学兵器という全く新しいタイプの兵器を誕生させるのである。

一九一四年、第一次世界大戦では、毒ガスという化学兵器が使用された。一九三八年にイタリアで完成した細菌兵器も化学兵器に含まれよう。ベトナム戦争では枯れ葉剤（ダイオキシン）などが大規模に使用された。ダイオキシンは人類が作り出した最も恐ろしい化学物質といわれている。日本でも、ベトナムのシャム双生児、ベトちゃんとドクちゃんなどが、近頃とみに同情を集めているが、彼らはベトナム戦争で使われたダイオキシンの犠牲となって生まれた奇形児なのである。また、生物兵器や神経ガスの開発等、化学兵器は進歩（？）しつつあるという。

◉◉暗示された水質汚染の災禍

また、この預言は化学兵器の誕生、発達とともに、水質汚染という公害も暗示しているものと思われる。十九世紀のヨーロッパにおける産業革命前後から、水質汚濁という公害は多くの被害

をもたらしてきている。公害関係の年表を開いてみると、特にこの日本において被害が多いことに驚く。なんと「明治十年代から栃木県足尾銅山の鉱毒で渡良瀬川の魚類大量死」という記載がある。

一九二二年頃から工業発展に伴う廃水公害が日本各地で起こっている。一九五三年、水俣病が表面化。これはアルデヒド工場からの廃水に含まれていたメチル水銀が、魚を経て人体に吸収されて集団発病させたもの。中枢神経が侵されて、最後には反狂乱状態になって死ぬ人も多いという悲惨な人災による病気である。

また、排出されたカドミウムが原因とされるイタイイタイ病もこの頃問題化している。イタイイタイ病は、その名の通り背骨や手足などを激しい痛みが襲う。骨がもろくなって無数に骨折が起こり、全身衰弱によって死亡に至るというもの。

今年になってからも、北海とバルト海においてアザラシが一万頭近く死んでいるという。死んだアザラシの体内からは、許容量の一万倍以上という放射能、PCB、水銀、そして肺炎の新ウイルスまで見つかっている。ヨーロッパ中の廃水の汚染が原因として挙げられているが恐ろしいことである。

東京湾でも、例の枯れ葉作戦で使われたのと同じ猛毒のダイオキシンが検出された。つい先月のことだ。

これからも水質汚染のニュースは私達の耳に飛び込んでくるだろう。生きる物すべての生命と切っても切れない水の汚染――それは農作物を通じて、魚介類を通じて、食肉を通じて、そして飲料水をも通じて私達の体内にも確実に有害な化学物質が蓄積し続けているということだ。

◉◉第四のラッパ――炸裂と震動

一八〇四年に発明されたロケット砲弾とダイナマイトの組み合わせによる強力な爆発、破壊力を持つ兵器や爆弾などの描写が、次の第四のラッパの預言である。〝打たれて〟というのは、その震動を表わしているのだろう。砲弾や爆弾が炸裂したとき、その黒煙等で、太陽や月も、辺りも暗くなったように見えたはずである。

◉◉第五のラッパが響く――第一次世界大戦の勃発

第五の御使が、ラッパを吹き鳴らした。するとわたしは、一つの星が天から地に落ちて来るのを見た。この星に、底知れぬ所の穴を開くかぎが与えられた。そして、この底知れぬ所の穴が開かれた。すると、その穴から煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、その穴の煙で、太陽も空気も暗くなった。その煙の中から、いなごが地上に出てきたが、地のさそりが持っているような力が、彼らに与えられた。彼らは、地の草やすべての青草、またすべての木をそこなっ

てはならないが、額に神の印がない人たちには害を加えてもよいと、言い渡された。彼らは、人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめることだけが許された。彼らの与える苦痛は、人がさそりにさされる時のような苦痛であった。その時には、人々は死を求めても与えられず、死にたいと願っても、死は逃げて行くのである。これらのいなごは、出陣の用意のととのえられた馬によく似ており、その頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり、また、そのかみの毛は女のかみのようであり、その歯はししの歯のようであった。また、鉄の胸当のような胸当をつけており、その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった。その上、さそりのような尾と針とを持っている。その尾には、五か月のあいだ人間をそこなう力がある。彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドンと言い、ギリシヤ語ではアポルオンと言う。（第九章一～一一節）

「黙示録」の預言も、一九〇〇年代に入ってきたようである。この頃世界の動きは大きく変わっていた。一八七〇年代以降、先進諸国（帝国主義）によるアジア・アフリカの植民地化が進んでいたが、ここに植民地の再分割を要求する新興帝国主義のドイツ、植民地化に抵抗する現地の動きが加わり、国際対立が深刻化する。

このような世界情勢の中で、バルカン問題から一触即発の危機にあったセルビアとオースト

リアの関係に不吉な〝星〟が落ちるのである。

『この星に、底知れぬ所の穴を開くかぎが与えられた。そして、底知れぬ所の穴が開かれた。すると、その穴から煙が大きな炉の煙のように立ちのぼり、その穴の煙で、太陽も空気も暗くなった。』

というヨハネの記述の通り、セルビアの一青年がオーストリア皇太子夫妻を暗殺（サライェヴォ事件）したのをきっかけに、オーストリアがセルビアに宣戦布告。これが様々な利害関係から結びついていた同盟国側対連合国側という二大陣営の戦争にあっと言う間に発展していった。これが第一次世界大戦である。日本も日英同盟によって連合国側に参戦している。『その穴の煙で、太陽も空気も暗くなった』というのは、まさしく戦火を指しているのだ。

次に、その煙の中から異様な〝いなご〟が現われる。私は、インスピレーションから、それが飛行機を言っているものと感じた。が、ちょっと説得力に欠けるようである。そこで、M大師、K大師とともに検討に入ったのであった。（S君はこの頃から極厳修行に入ったため、不在である。）

知識のM大師、イメージ力の強いK大師、インスピレーションの私という異色の組み合わせで話は進む。

飛行機の歴史では、一九〇三年にライト兄弟が人類初の動力飛行に成功している。しかし、速

度が時速四十八キロメートルという記録にも驚く。（よくこの速度で飛ぶことができたなあ）と。現代では乗用車でも（スピード違反をしたなら）簡単に一五〇～一六〇キロで走っているというのに。そして、十年後の第一次世界大戦の時点での世界記録でさえ時速二〇四キロメートルなのだそうだ。これが歴史に残る世界記録――これではやはり〝つばめ〟と言うよりは〝いなご〟であろう。

そして、プロペラ機であったので、『その羽の音は、馬に引かれて戦場に急ぐ多くの戦車の響きのようであった』としても別におかしくはない。また、飛行機が最初に戦場に姿を見せたのも、第一次世界大戦が始まってからであったので、これも煙の中から〝いなご〟が生まれたという表現とも一致している。

その〝いなご〟の外観であるが、難解ながら三人の意見でまとまった点を挙げておこう。

出陣の用意のととのえられた馬、鉄の胸当て――一九一五年にドイツが全金属製の飛行機を開発している。こういう飛行機を鉄の鎧で保護された出陣時の馬に似ていると表現したのではないか。

頭には金の冠のようなものをつけ、その顔は人間の顔のようであり――操縦席のこと。

そのかみの毛は女のかみのよう――ジェットエンジンが開発されて後の飛行機雲。

ししの歯――初期の飛行機の上羽と下羽のつなぎがこのように見える。

◉◉〝いなご〟は恐怖と苦痛を与えた

さて、「〝いなご〟が地の草やすべての青草、木をそこなわない」というのはすぐおわかりになると思う。飛行機がそういったものに被害を与えることなく目的地まで空間移動をすることを表わしているのだ。そして、たとえ目的地で爆撃したとしても、当然人口密集地がねらわれるので草木は少ない。

しかし、「人間を殺すことはしないで、五か月のあいだ苦しめる」とは？　私が（機銃が単発銃であったから、人々を恐怖に陥れるだけだったのかな。でも、そうすると爆撃機だったら多くの犠牲者を出しているはずだし……）などと考えていると、突然M大師が、

「ありました！」

と興奮したように叫んだ。

「当時の爆撃機は、爆弾の搭載量が少なかったので（これは飛行機自体まだ進歩していなかったことを考えれば当然だ）たいした威力は持っていなかったそうです。恐怖などによる相手側の士気崩壊をねらったようですね、ドイツがイギリスを空襲したときの記録では、計一一三回の空襲による死者が一四一五人となっています。」

「一一三回空襲をして、死者がわずかに一四一五人！」

私は少々啞然とした。計算してみると、一回当たり十人余りしか死んでいない。はるばるとイ

ギリスにまで飛んで行って。しかも大型爆撃機が使われていたそうである。これはもう苦痛だけ与えて殺さなかったとしか言いようがないではないか。そのとき、私は〝五か月のあいだ〟という語句が何だったのかはっきりわかった。五か月とは五年間のことだったのだ。第一次世界大戦は一九一四年から一九一八年までの五年間に渡って繰り広げられていたのである。こうしてみると、大戦時に登場した飛行機は、恐怖と苦痛だけを与えた存在であったということになる。

ところが、最後の一文は、そんな飛行機の前途を暗示するような恐ろしい内容で締めくくられている。

『彼らは、底知れぬ所の使を王にいただいており、その名をヘブル語でアバドンと言い、ギリシヤ語ではアポルオンと言う。』

アバドンは〝底なし沼の使い〟〝破壊者〟〝奈落の悪魔〟などと呼ばれている。これは飛行機がこの先、開発・改良を重ねられていき、強力な殺戮兵器として変貌していくということだ。

第二の災い——飛躍的に進化する殺戮兵器

◉◉第六のラッパ——第二次世界大戦の始まり

第六の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、一つの声が、神のみまえにある金の祭壇の四つの角から出て、ラッパを持っている第六の御使にこう呼びかけるのを、わたしは聞いた。「大ユウフラテ川のほとりにつながれている四人の御使を、解いてやれ」。すると、その時、その日、その月、その年に備えておかれた四人の御使が、人間の三分の一を殺すために、解き放たれた。騎兵隊の数は二億であった。わたしはその数を聞いた。そして、まぼろしの中で、それらの馬とそれに乗っている者たちとを見ると、乗っている者たちは、火の色と青玉色と硫黄の色の胸当をつけていた。そして、それらの馬の頭はししの頭のようであって、その口から火と煙と硫黄とが、出ていた。この三つの災害、すなわち、彼らの口から出て来る火と煙と硫黄とによって、人間の三分の一は殺されてしまった。馬の力はその口と尾とにある。その尾はへびに似ていて、それに頭があり、その頭で人に害を加えるのである。これらの災害で殺されずに残った人々は、自分の手で造ったものについて、悔い改めようとせず、また悪霊のたぐい

や、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようともしなかった。また、彼らは、その犯した殺人や、まじないや、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった。

（第九章一三～二一節）

第六のラッパでの預言はまだ続くのであるが、一応ここまでを見ておくことにしよう。実は、この預言に入る前に、

「第一のわざわいは、過ぎ去った。見よ、この後、なお二つのわざわいが来る。」

という一文が入っているのだが、その通り第二次世界大戦という前回にも増して大きな災いがやってくるのである。第六のラッパは第二次世界大戦を預言していたのだ。

一九三九年、ポーランドに侵入したドイツに対してイギリス・フランスが宣戦布告したことから第二次世界大戦は始まった。四一年、ドイツはソ連を攻撃、独ソ戦争開始。日中戦争は日本がアメリカ・イギリスに宣戦布告したことによって太平洋戦争へと発展していく。これらの戦争が、その拡大とともに連合国側（イギリス・アメリカ・フランス・ソ連・中国）対枢軸国（日本・ドイツ・イタリア）という二大陣営を形成していく。

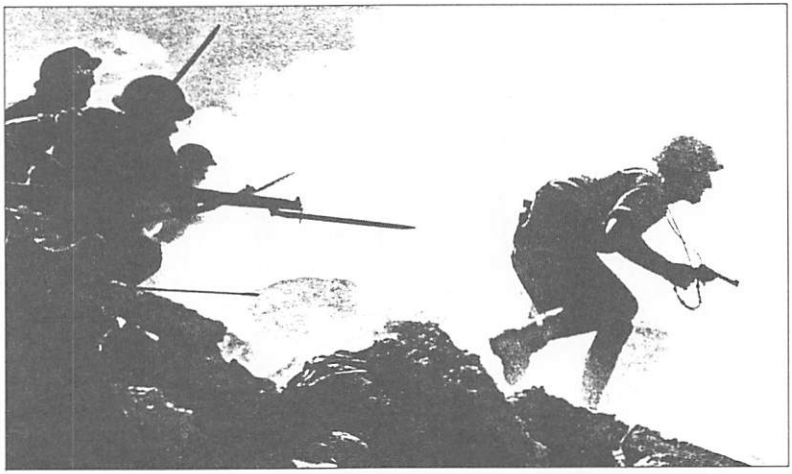
〝騎兵隊の数は二億〟となっているが、第二次世界大戦に動員された兵力は約一億一〇〇〇万人であり、これに戦争に加わらざるを得なかった民間人の数を合わせると大変な数になることがわ

かる。犠牲者は戦死者約二五〇〇万人、民間人犠牲者約二五〇〇万人、戦傷者は約三五〇〇万人とされているそうであるが、戦争にかかわった人間の〝三分の一を殺すために〟と言っても、まあ言い過ぎではないだろう。

◉◉解き放たれた四人の御使とは?

〝大ユウフラテ川のほとりにつながれている四人の御使〟であるが、私はこれらがアメリカ、ソ連、中国、日本であると考える。これらの国々は第二次世界大戦を経ることによって、かえって大きな影響力を持つようになるからだ。しかも、〝火の色と青玉色と硫黄の色〟が出てくる。実際に見ていただければおわかりになると思うが、これらの色は、四カ国の国旗のポイントとなっている色なのだ。

ユダヤ人と関係の深い大ユウフラテ川（ユーフラテス川）も出ているが、これらの国々はユダヤ人と関係がないとは言えない。アメリカの場合はその自由な空気の中でユダヤ人が活躍し、経済的にも政治的にも大きな力を持っているという事実がある。ソ連にもユダヤ人は多く、例えばロシア革命時には指導者であったトロツキー、カーメネフ、ジノビエフ、ラディックがユダヤ人であったことから、それまでの反ユダヤ主義と反共主義とが結び付けられてしまったほどである。現在のソ連の最高指導者ゴルバチョフ書記長もユダヤ人だといわれる。



第2次世界大戦における人的被害

国　　名	兵員			一般市民	合　　計
	死　亡	負　傷	行方不明		
アメリカ	314,094	668,653	151,597	———	1,134,344
イギリス(1)	353,652	475,070	90,844	60,595	980,161
フランス	166,195	408,895	———	174,620	749,710
ソ連(2)	13,600,000	———	———	7,000,000	20,600,000
ポーランド	597,320	———	———	5,000,000	1,685,000
ユーゴスラビア	1,685,000	———	———	———	5,597,320
オーストリア	———	———	———	———	700,000
チェコスロバキア	———	———	———	———	500,000
中国	1,310,224	1,752,591	115,248	———	3, 178 000
ドイツ(3)	2,100,000	4,000,000	2,900,000	500,000	9,500,000
イタリア	389,000	———	214,647	179,803	783,450
日本	1,174,474	4,616,000	1,483	672,000	6,463,957

注："The World Almanac" (1949)による。(1)イギリス連邦国を含む　(2)ソビエト連邦の概数は、W. S chumann／G. Hass (hrsg.) "Deutschland in Zweiten Weltkrieg Bd. 6"による。(3)ドイツ軍の戦死、行方不明の75%は東部戦線。

日本と中国に関して、私はインスピレーションでユダヤ人と言ったのであるが、歴史を紀元前にまでさかのぼってみると興味深い出来事がある。これはS君に聞いた話であるが、イスラエル王国の流れをくむユダ王国が紀元前五八六年にバビロニアによって滅ぼされ、多くのユダヤ人がバビロニアへ連れていかれたとき（バビロン捕囚）、東方に向かって姿を消した部族があるというのだ。そして、学説的には異端ではあるが、それらのユダヤ人の一部が日本にまでたどり着いていたという説を唱えている人もいる。もちろん中国はその道筋に当たっているのである。

思えば、日本の神道と『旧約聖書』で似ている点がある。それは、神の神託を受けるところだ。また、昔の日本人のように「敵の手にかかるよりは潔く自刃をする」という話も『旧約聖書』には出てくる。

◉◉次々と現われる新兵器

さて、『馬の頭はししの頭のようであって、その口から火と煙と硫黄とが、出ていた。』とあるが、これは大戦時、陸上戦の主力となった戦車を表わしているものと思われる。戦車の砲口からは、火と煙が吹き出、そのあとには火薬に含まれている硫黄が臭いを残したであろう。

『馬の尾はへびに似ていて、それに頭があり、その頭で人に害を加えるのである』というから、こちらの方はやはり当時使われたロケット兵器であろう。これはへびの尾のごとく尾を引いて飛

んでいき、その弾頭は炸裂して害を与えるのだ。

そして、この大戦で生き残った人々が、〝自分の手で造ったものについて、悔い改めようとしなかったのはその後の歴史が証明している。これは科学を指しているのだ。各国とも、特に二大強国アメリカとソ連が競って科学兵器や水爆を開発し、互いにそれらを保有しているということで微妙な平和が保たれているというのが現代なのである。

「また、悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようともしなかった。また、彼らは、その犯した殺人や、まじないや、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった」という記述に関しては、あなたの周囲を見回していただけさえすれば、あえてご説明する必要もなかろう。

第六のラッパの預言は続く――。

わたしは、もうひとりの強い御使が、雲に包まれて、天から降りて来るのを見た。その頭に、にじをいただき、その顔は太陽のようで、その足は火の柱のようであった。彼は、開かれた小さな巻物を手に持っていた。そして、右足を海の上に、左足を地の上に踏みおろして、ししがほえるように大声で叫んだ。彼が叫ぶと、七つの雷がおのおのその声を発した。七つの雷が声を発した時、わたしはそれを書きとめようとした。すると、天から声があって、「七つの雷の

語ったことを封印せよ。それを書きとめるな」と言うのを聞いた。それから、海と地の上に立っているのをわたしが見たあの御使は、天にむけて右手を上げ、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを造り、世々限りなく生きておられるかたをさして誓った、「もう時がない。第七の御使が吹き鳴らすラッパの音がする時には、神がその僕、預言者たちにお告げになったとおり、神の奥義は成就される」。すると、前に天から聞えてきた声が、またわたしに語って言った、「さあ行って、海と地との上に立っている御使の手に開かれている巻物を、受け取りなさい」。そこで、わたしはその御使のもとに行って、「その小さな巻物を下さい」と言った。すると、彼は言った、「取って、それを食べてしまいなさい。あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い」。わたしは御使の手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった。その時、「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない」と言う声がした。

（第一〇章一～一一節）

◉◉原子力――封印された本当の姿

「これは間違いなく日本への原爆投下のことを描写している。」

私は確信した。

「M大師、原爆が投下された瞬間はどうなる?」
「まず光ります。それから火の玉ができ、その火の玉が大きくなっていきます。次に火柱が立ち、きのこ雲が生じ、その途中で衝撃波が伝わります。雲はしばらく残り続けます。」
どうしてこんなことまで詳しく知っているのかと思われるくらい、彼の口からはすらすらと出てくるのだった。まるで生き字引きである。
太陽が火の玉を表わし、足の火の柱はそっくりそのまま原爆の火柱に当てはめられるということになる。
M大師が書物を調べながら付け加えた。
「ここに『原爆は約十秒間、まさに小さな太陽となって燃え盛った』という記述がありますね。すごいですね、この一致は。」
「それはすごい。ところで原爆というのはどのように投下されたのかわかるか? ヨハネは『雲に包まれて、天から降りて来るのを見た』と言っているんだが。」
「飛行機からパラシュートを使ってゆっくりと落としていったんです。そして、爆発は五〇〇メートル上空に来たときですね。」
「じゃあ、パラシュートが広がって雲に包まれて降りてくるように見えるかもしれないね。」
本当にこれは明らかなる原爆の預言だ。御使いが『右足を海の上に、左足を地の上に踏みおろ

して、ししがほえるように大声で叫んだ」というのも実に恐るべき暗示だ。広島も長崎も海沿いではないか。そういう場所に大きな爆音が響き渡ったのだ。

ヨハネが『七つの雷の語ったことを封印せよ。それを書きとめるな』と言われたその内容は、原子力の短所（危険性）のことだったのではなかろうか。例えば、「これが人類の破滅につながる」だとか、「原発事故の悲惨さ」だとか、「これから先、原子力を超えるエネルギーが開発される」だとか……。

しかし、どうしてヨハネに『預言を書き残して人々に知らせよ』と言っている神が、この雷の言葉に限って『封印せよ』と言うのだろうか？　私はその疑問に対しての答えが、たった一つしかあり得ないことに思い当たった。ちゅうちょする気持ちを押して言おう。

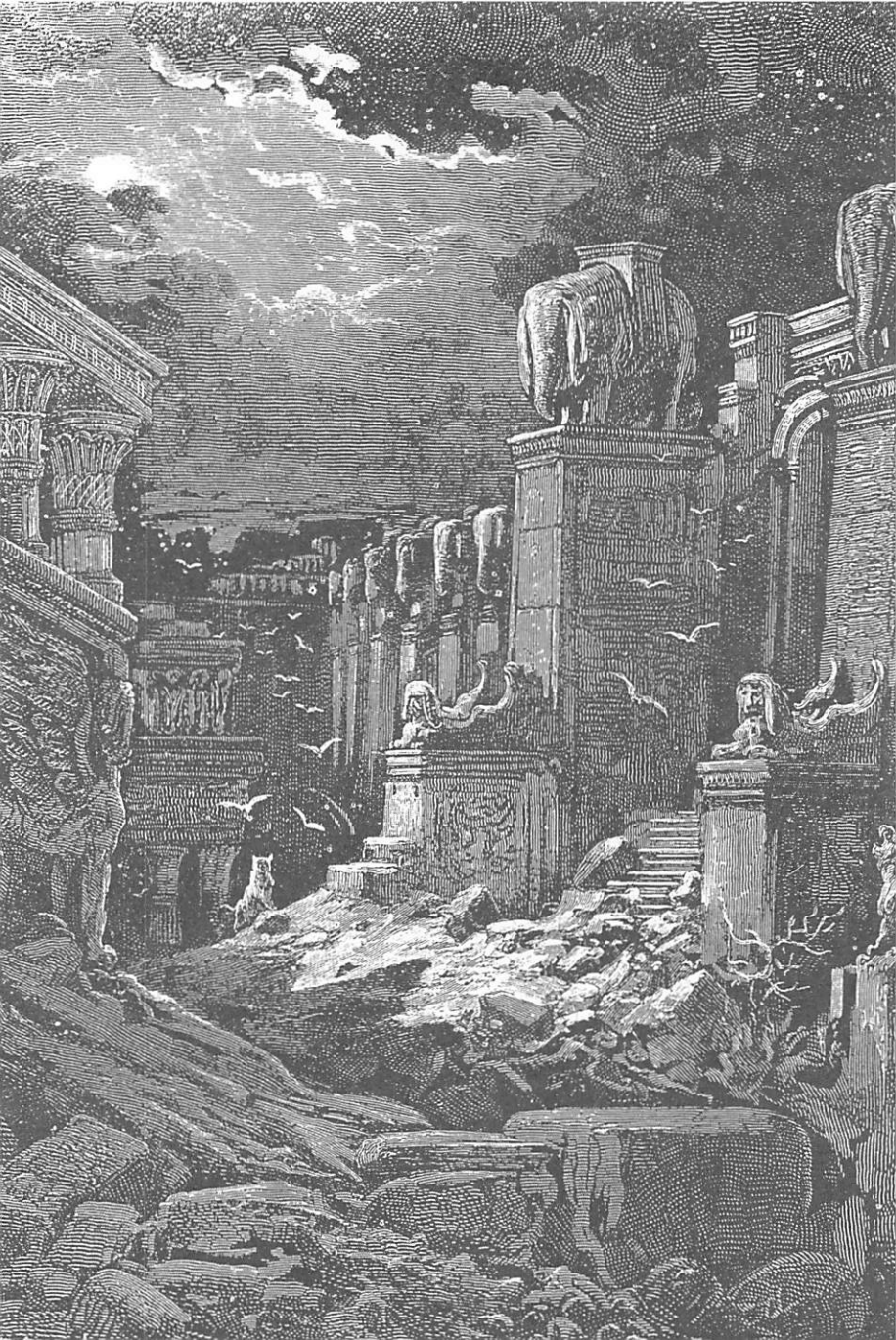
「神は人類にこれを使わせたがっているのだ。恐らくは人類が滅亡へと向かうプログラムに組み入れてあるのだ。」

ヨハネが御使いの手から受け取って食べてしまうと、〝口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦くなった〟というのも、原子力の持つ人類への恩恵と危険性という二面性を表わしていよう。

預言者と救世主——歴史は『黙示録』に乗って

◎◎第二の災いは過ぎ去った

それから、わたしはつえのような測りざおを与えられて、こう命じられた、「さあ立って、神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々とを、測りなさい。聖所の外の庭はそのままにしておきなさい。それを測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう。そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう」。彼らは、全地の主のみまえに立っている二本のオリブの木、また、二つの燭台である。もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない。預言をしている期間、彼らは、天を閉じて雨を降らせないようにする力を持っている。さらにまた、水を血に変え、何度でも思うままに、あらゆる災害で地を打つ力を持っている。そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。彼らの死体はソドムや、エジプ



トにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、三日半の間、彼らの死体をながめるが、その死体を墓に納めることは許さない。地に住む人々は、彼らのことで喜び楽しみ、互(たがい)に贈り物をしあう。このふたりの預言者は、地に住む者たちを悩ましたからである。三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた。その時、天から大きな声がして、「ここに上ってきなさい」と言うのを、彼らは聞いた。そして、彼らは雲に乗って天に上った。彼らの敵はそれを見た。この時、大地震が起って、都の十分の一は倒れ、その地震で七千人が死に、生き残った人々は驚き恐れて、天の神に栄光を帰した。

第二のわざわいは、過ぎ去った。見よ、第三のわざわいがすぐに来る。（第一一章一～一四節）

これも第六のラッパによる預言の続きである。この中の預言者が日本とドイツを象徴しているらしいということはすぐにわかった。ところが、この預言には四十二カ月、千二百六十日、三日半と期間を表わす語句が三種類も出てきており、それが何を意味しているのかがわからなかった。それでもこの数字には必ず意味があると確信した私は、この謎(なぞ)を解くべく今までにない時間をかけて検討したのであった。

そして、その結果得られた解答は、私が当初考えた通りのものであった。いや、それ以上の衝撃を与えたと言った方が適切であるかもしれない。私は『ヨハネの黙示録』が未来に起こることを預言していたというより、まるで歴史の方が『ヨハネの黙示録』に書かれているシナリオ通りに進んでいこうという〝意志〟があったかのような印象を受けたのだった。

◉◉今解明される歴史のシナリオ

コロンブスが「地球は球形であり、インドへ行くにはそれまでの反対回り（つまり西回り）の方が近い」という説を信じてスペインを出発したのは一四九二年のことであった。その彼が、インドならぬ新大陸を発見し、アメリカ大陸の発見者として歴史に名をとどめたことは周知のとおりである。

その後、コロンブスの発見に刺激されて、ヨーロッパ人の目は西方へと向けられる。それは、先進国の植民地収奪の始まりでもあり、原住民の悲劇の始まりでもあった。

十六世紀前半、スペインのキューバ征服、コルテス（スペイン）のメキシコ征服、ピサロ（スペイン）のペルー征服と続く。このときコルテスは、アステカ文明を滅ぼし、ピサロはインカ文明を滅ぼしている。

アステカ文明とは、マヤ文明を受け継いだアステカ族が築いた文明で、アステカ帝国を形成し

ていた。ここでは古代エジプトに似て、神殿・ピラミッド・太陽暦・神聖文字（未解読）などが存在した。

一方、インカ文明は、インカ帝国を建てたインカ族によって発展していたもの。この文明も古代エジプトとの類似点が多く、国王（インカ）が太陽神の子として絶対的な権力を持っていた。高度に発達した石の文化を持ち、神殿・宮殿・灌漑設備・道路などが建築されていた。結縄（キープ）記号というものが文字のかわりに使用されていたが、これはまだ未解読だそうである。

スペインは典型的な略奪政策をとり、原住民は奴隷化された。強制労働による死亡や殺害などによって、現地では原住民の人口が急速に減少したという。

十七世紀に入るとオランダ、フランス、イギリスに植民地支配の主力が移り、アフリカ大陸の黒人が奴隷としてアメリカ大陸・西インド諸島へ送られるという奴隷貿易が盛んとなった。

十八世紀には、イギリスが広大な植民地の支配権を獲得して勢力を広げ、帝国主義の時代に入ると、イギリス、フランスを先頭に強国が競ってアジア・アフリカの植民地化に乗り出した。これは、第二次産業革命によって急速に発達した資本主義社会の、余剰資本の投資先として、商品市場として、また原料の供給地として植民地が必要であったからである。

以上簡単に述べてきた強国による後進地域の植民地化政策、これを指しているのが『異邦人が、四十二か月の間この聖なる都を踏みにじるであろう』という一文だったのである。

なお、それとは反対に〝聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々〟というのは、強国の帝国主義等に同調しない〝真理に目覚めた人〟ということになる。ヨハネは、『それを測りなさい』と言われたが、果たしてそういう人達が神の意に適うだけいたかどうか？　その答えは書かれていない。

さて、四十二カ月というのは、四二〇年と見てよいだろう。多少のずれはあるが、強国による植民地化が始まってから四百数十年後、ようやく植民地は独立解放されていくのである。一九四五年、第二次世界大戦終結後まもなく、インドネシアとベトナムが初めて独立の声をあげ、翌四六年フィリピン、四七年インド・パキスタンと相次いで新しい独立国が誕生した。このようにして、アジアのほとんどの植民地・半植民地が被支配国を脱したのである。そして、その後少し遅れてアフリカ諸国独立の時代がやってくるのだ。二〇〇〇年近くも前に、これらの動向、時期、期間までもが預言されていたということになる。

◉◉歴史を動かした二人の〝預言者〟

次の記述では、『ふたりの証人が荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言する』となっている。この二人の預言者がドイツと日本だったのだ。

この二国がオリブの木、燭台であるというのは、ドイツ民族至上主義の根強いドイツと神の

国を自認していた日本という両国の選民主義や国粋主義を指している。そして、どちらも自国のこれからの強大化を国民に説き続け、それが預言で象徴されている。

その期間であるが、千二百六十日というのを月に換算してみると四十一カ月十五日となるが、この数字がまさに四十一年半という期間を示していたのである。

ドイツが先進の帝国主義国に対して植民地の再配分を要求、イギリスの三C政策に対抗して三B政策を打ち出し、世界に乗り出したのが一九〇二年（この年、三B政策の基底となるバグダード鉄道の敷設権をペルシアまで延長することに成功。ドイツのペルシア湾・インド進出に大幅に近付く）。

一方、ドイツ・ロシア・フランスの干渉（三国干渉）の前に臥薪嘗胆した日本が、日英同盟を結び、日露戦争へと向かっていったのが同じく一九〇二年。その後急激に大陸に進出していく。つまり、ドイツと日本は同じ年に国際舞台に踊り出たのである。

そして、第一次世界大戦、第二次世界大戦と歴史は進む。第一次世界大戦でドイツは敗戦国に、日本は戦勝国となったという違いはあるものの、それ以降両国は第二次世界大戦終結まで同様の突っ走り方をする。『もし彼らに害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、その敵を滅ぼすであろう』という言葉通り、その頃、第二次世界大戦に突入してからもしばらく各地で勝ち続ける。『天を閉じて雨を降らせない』というのは、穀物が収穫されないことを示してお

り、被占領地での搾取や強奪を意味しているものと思われる。

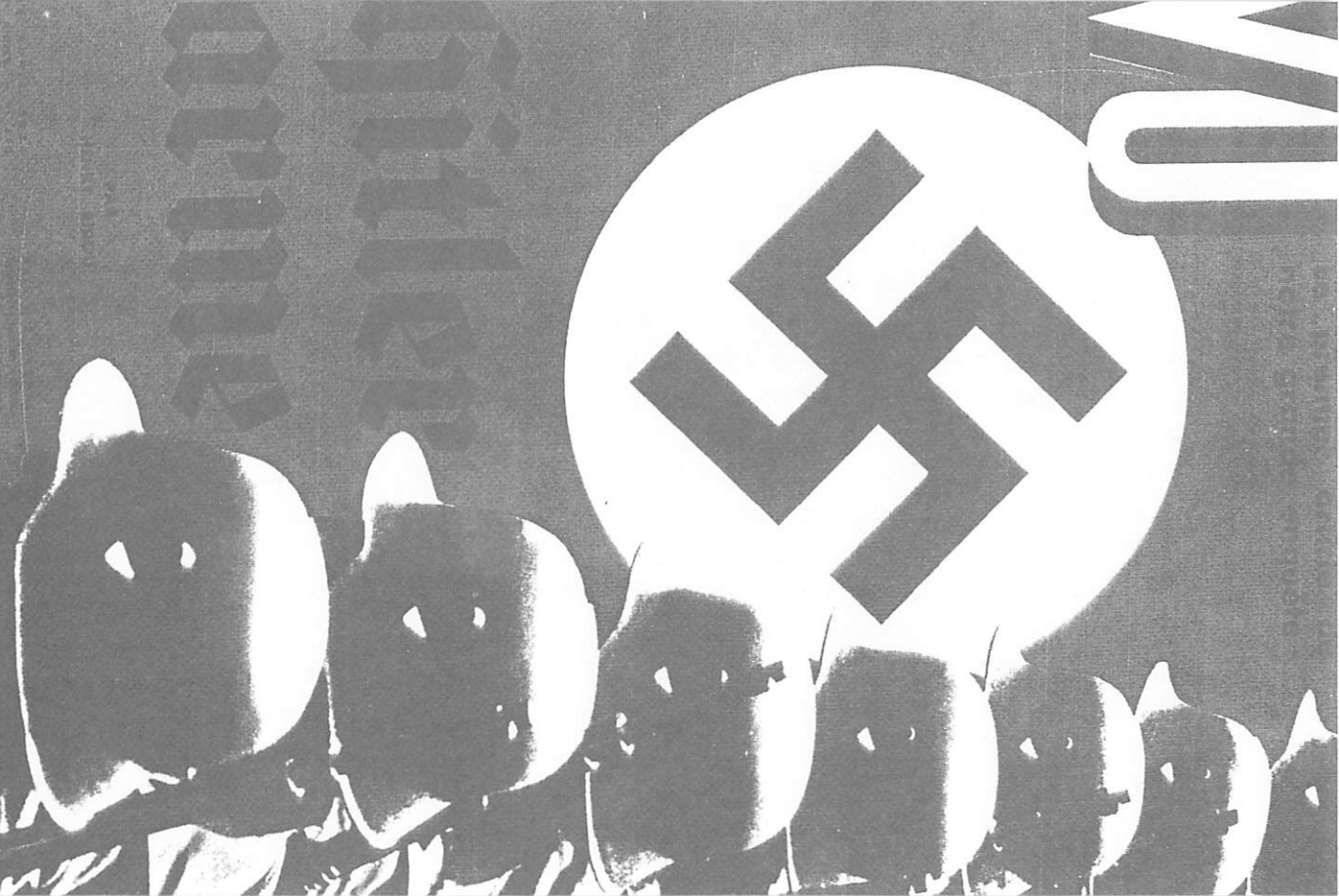
『さらにまた、水を血に変え、何度でも思うままに、あらゆる災害で地を打つ力を持っている』というのは、両国の戦力である。〝水を血に変える〟のは海戦を指す。中でもドイツの潜水艦U48（Uボート）は、三二〇〇〇トンの通商船を撃沈するなど、合わせて七〇〇隻もの船を撃沈し、『最大戦禍』と称された。そして〝地を打つ〟のはロケット砲や爆撃である。

『そして、彼らがそのあかしを終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す』

ドイツ・日本の力が限界に達したとき、アメリカが底知れぬ所からのぼって来るのだ。一九四三年、北アフリカのドイツ軍は米・英軍のアフリカ上陸のため挟撃されて降伏。同じ年、連合軍がシシリー島を占領した時点でムッソリーニが失脚、連合軍がイタリア本土に上陸するとムッソリーニのあとを継いだ新政府は無条件降伏する。これによってドイツは軍事同盟を結んでいたイタリアを失う。ドイツはムッソリーニを援助して北イタリアに新政府を作らせたりするが、それも空しくドイツ軍はいたるところで敗北していく。

日本軍も一九四三年、太平洋地域でアメリカに次々と敗北して撤退や玉砕あるいは極度の補給難による餓死が続き、以後勢力を盛り返すことなく壊滅状態に陥っていくのである。

この一九四三年という年に注目していただきたい。ドイツも日本もこの年がターニング・ポイ


Hitler

ントになっているのである。アメリカ軍、あるいはアメリカ軍が参加している連合軍によって。両国が領土拡大の野望を持って活動を開始してから、ちょうど四十一年余後のことであったのだ。

『彼らの死体はソドムや、エジプトにたとえられている大いなる都の大通りにさらされる。彼らの主も、この都で十字架につけられたのである。』

大いなる都、ベルリンも東京も大空襲によって無残にも焦土と化し、ドイツ軍の指導者ヒトラーはそこで自殺、日本軍の指導者東条英機はA級戦犯として絞首刑となった。

三日半、これは三年半という意味で、この間復興はあまり進まないということ。戦勝国側の人々は、ドイツ・日本が負けたことを大変喜ぶ。

ところがである。

『三日半の後、いのちの息が、神から出て彼らの中にはいり、そして、彼らが立ち上がったので、それを見た人々は非常な恐怖に襲われた。』

これはもちろん両国がめざましく復興していく様子である。戦後ドイツは、アメリカ・イギリス・フランスの支配する西ドイツとソ連の支配する東ドイツとに分かれていたが、西ドイツは一九四九年ドイツ連邦共和国として生まれ変わった。以後、国力の復興・経済の発展ともにめざましく、国際社会に復帰していった。東ドイツはドイツ民主共和国となり、共産圏に属する国となった。

日本はと言えば、一九四九年戦後の悪性インフレが収束し、翌年の朝鮮戦争による特別需要の波は、それまでの不景気を好景気へと転じた。後、『神武景気』『岩戸景気』を経て、六〇年代の高度経済成長を迎える。そしてその経済力を背景に、日本は国際的地位を急上昇させたのだ。敗戦国のこの急成長は〝雲に乗って天に昇る〟ようなものである。

そして、日本では地震預言も成就し、七千人以上が死亡したのであった（終戦の一九四五年から続いて、三河地震・南海地震・福井地震が起こる。死者は合計七三六四人）。

◉◉第七のラッパ——暗示された救世主の誕生

第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。すると、大きな声々が天に起って言った、

「この世の国は、
われらの主とそのキリストとの国となった。
主は世々限りなく支配なさるであろう」。

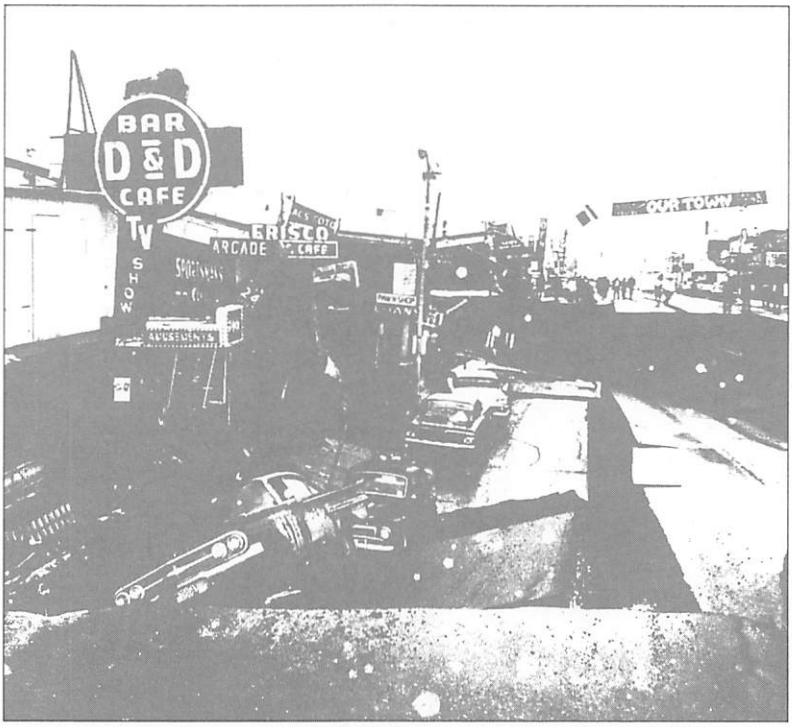
そして、神のみまえで座についている二十四人の長老は、ひれ伏し、神を拝して言った、

「今いまし、昔いませる、全能者にして主なる神よ。
大いなる御力をふるって支配なさったことを、
感謝します。

諸国民は怒り狂いましたが、
あなたも怒りをあらわされました。
そして、死人をさばき、あなたの僕なる
預言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、
すべて御名をおそれる者たちに報いを与え、また、
地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」。
そして、天にある神の聖所が開けて、聖所の中に契約の箱が見えた。また、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴と、地震とが起り、大粒の雹が降った。（第一一章一五～一九節）

「主は世々限りなく支配なさるであろう」という一文に、この世が神の計画書通りに動かされていくだろうことが暗示されている。そしてそれは、「すべて御名をおそれる者たちに報いを与え、また、地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました」という表現に結びついていく。これは神に帰依する者には良きことを与えよう。反対に地を滅ぼす者どもは滅ぼそうということである。カルマの法則にのっとったことが行なわれるのだ。もうその時が来たということは、この第七の預言でそれが明らかになるということであろうか？

契約の箱に関しては、二つの解釈ができるので、一応両方とも書いておくことにする。一つは、

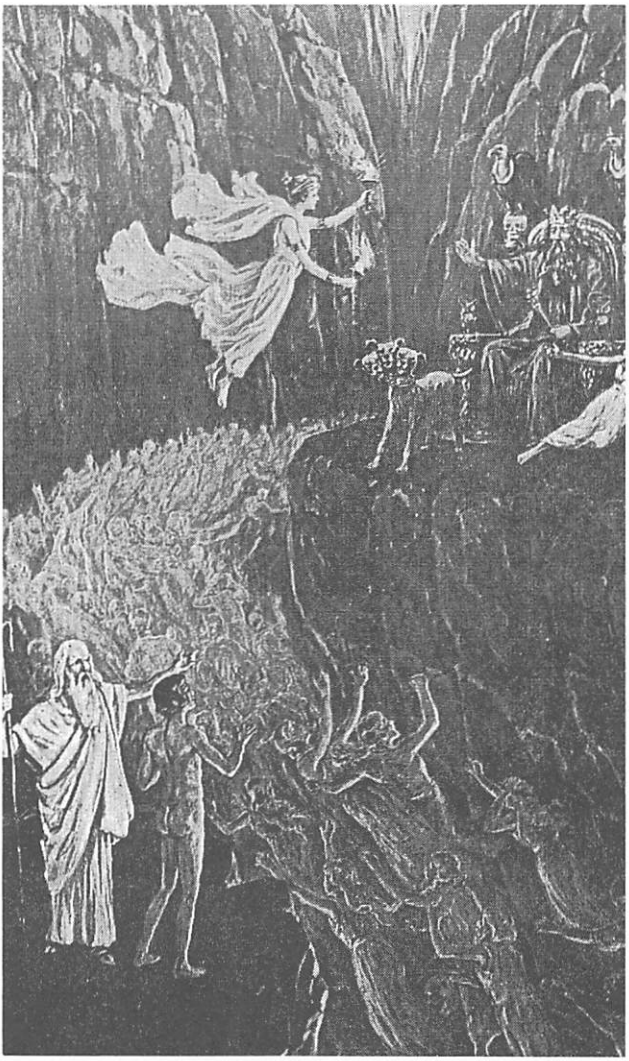


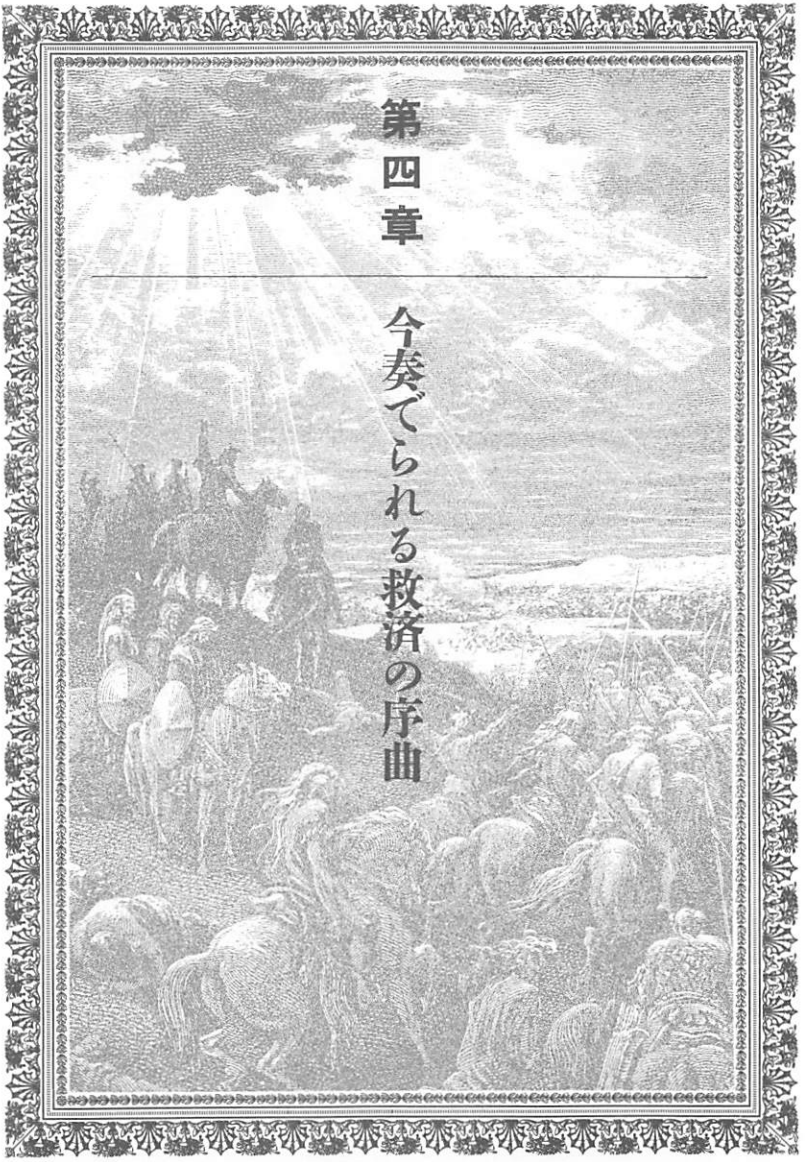
1945年以降の大地震（出典「理科年表」62年度版）

	西　暦	月　日	場　所	死者・行方不名
三河地震	1945年	1月13日	愛知県南部	死者 1961人
南海地震	1946年	12月21日	潮ノ岬沖	死者 1330人 行方不名 102人
福井地震	1948年	11月28日	福井平野	死者 3895人

イスラエルの建国を表わしているということである。旧約聖書によると、契約の箱は神とユダヤ民族との交わり、及び部族相互の結合を示しており、ユダヤ人が神に選ばれた民の証となる重要なものだ。そして、ユダヤ人の国にはこの箱が聖所に納められることになっている。そのことから、一九四八年のイスラエル建国が考えられるのである。

だが、イスラエルは今のところ世界情勢には目立った影響を与えていないし、神がヨハネに預言を残させようとしているからには、もっと大きな事象を指しているのではないかという気もする。となると、前文とも関係して、御名をおそれる者たちに報いを与え、〝地を滅ぼす者どもを滅ぼす〟ものであるのかもしれない。また、『この世の国は、われらの主とそのキリストとの国となった』という最初の文までを合わせてみるならば、それを行なうのがキリストで、救世主の降誕を予言しているとも考えられる。私はどちらかというと、こちらの解釈の方をとりたい。ただ、キリストという言葉には気をつけていただきたい。これは救世主という意味であって、必ずしもイエス・キリストを指してはいない。キリストとイエス・キリストを混同している人が多いが、これはキリスト教が各国に伝わっていく過程で、言葉の取り違えから生じた問題である。





第四章

今奏でられる救済の序曲

赤い龍の登場——共産主義の命運

◉◉女と赤い龍——登場した共産主義

また、大いなるしるしが天に現れた。ひとりの女が太陽を着て、足の下に月を踏み、その頭に十二の星の冠をかぶっていた。この女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた。また、もう一つのしるしが天に現れた。見よ、大きな、赤い龍がいた。それに七つの頭と十の角とがあり、その頭に七つの冠をかぶっていた。その尾は天の星の三分の一を掃き寄せ、それらを地に投げ落した。龍は子を産もうとしている女の前に立ち、生れたなら、その子を食い尽そうとかまえていた。女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があった。

（第一二章一～六節）

太陽は権威の象徴であり、月は霊的なものの象徴である。月はここでは足に踏まれているので、

反霊的なものを指していることになる。その頭には十二の星の冠。星には「星の位」などという言葉があるように、高い地位や頂点に立つものなどを示す。かつ、この女は子を宿しているのだ。謎々めいてくるが、何を表わしているかおわかりになるだろうか？

これは確実に大戦後の中国を表わしている。中国は戦後、国際連合の常任理事国に加わるなど、国際的に権威を持つようになった。しかし、国内では宗教を否定する（反霊的）中国共産党の毛沢東が勢力をのばしつつあったのである。

十二の星の冠は、それまでの中国の十二の主な王朝・政権を表わしている。すなわち、殷・周・秦・漢・魏・隋・唐・宋・元・明・清・中華民国である。このような歴史を持っている中国が、今まさに子を産もうとしているのだ。そして、〝産みの苦しみと悩みとのために、泣き叫んでいた〟のである。

そこまでわかると、生まれようとしている子が、共産主義の中華人民共和国であり、〝苦しみと悩み〟が蒋介石率いる国民党と毛沢東率いる共産党との激しい内乱であることが明らかとなる。その直前までの日中戦争も産みの苦しみに含まれるかもしれない。

そこに、大きな赤い龍が登場する。赤は共産主義を象徴する色、大きいという点からソ連が連想される。七つの頭と十本の角が、それぞれ「東欧友好相互援助条約（ワルシャワ条約機構）」と「東欧経済相互援助協議会（コメコン）」に名を連ねる社会主義国の数と一致している。なお、

七つの冠というのは、主権が七カ国であることを示すのである。

しかも、龍が地に投げ落とした〝天の星の三分の一〟とは、共産主義が全世界の三分の一に波及するということで、現在、実に全世界の人口の三十二パーセントが共産主義となっている。

『龍は、生れたなら、その子を食い尽そうとかまえていた。女は男の子を産んだが、彼は鉄のつえをもってすべての国民を治めるべき者である。この子は、神のみもとに、その御座のところに、引き上げられた。女は荒野へ逃げて行った。そこには、彼女が千二百六十日のあいだ養われるように、神の用意された場所があった。』

これを順に解釈していくとこうなる。ソ連（龍）は、共産主義の新しい中国（子）が生まれたなら、配下にしよう（食い尽くそう）とねらっていた。中華人民共和国（男の子）が生まれたが、それは人民解放軍（鉄のつえ）をもってすべての国民を治めるのである。当初の中国の共産主義は崇高な理念を持っていた（神のみもとに引き上げられた）。そこでは、古代中国の倫理観を背景とした、毛沢東思想による人民のための政治が展開されていたのである。

〝女は千二百六十日養われる〟――これはまだ成就していない預言だ。興味深いことである。中国の滅亡する時期が明確に書き表わされているのだから。

この預言によると、中国の滅亡は、二〇〇四年末から二〇〇五年初頭である。これまでの預言が完全に現実化していることを考えると、この預言も必ず現実のものとなるはずだ。

一応、千二百六十日からどのように滅亡の時期を特定することができたのか説明しておこう。千二百六十日は、先のドイツと日本に関する預言と同じように計算すると、これも四十一年半となる。女が龍から逃げた時期を、中ソ対立の始まった一九六三年と考えると、それから四十一年半後が滅亡の時期というわけである。

◉◉繰り広げられる戦い——共産主義の分裂

さて、天では戦いが起った。ミカエルとその御使たちとが、龍と戦ったのである。龍もその使たちも応戦したが、勝てなかった。そして、もはや天には彼らのおる所がなくなった。この巨大な龍、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへびは、地に投げ落され、その使たちも、もろともに投げ落された。その時わたしは、大きな声が天でこう言うのを聞いた、

「今や、われらの神の救と力と国と、
神のキリストの権威とは、現れた。
われらの兄弟らを訴える者、
夜昼われらの神のみまえで彼らを訴える者は、
投げ落された。

兄弟たちは、
小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、
彼にうち勝ち、
死に至るまでもそのいのちを惜しまなかった。
それゆえに、天とその中に住む者たちよ、
大いに喜べ。
しかし、地と海よ、
おまえたちはわざわいである。
悪魔が、自分の時が短いのを知り、
激しい怒りをもって、
おまえたちのところに下ってきたからである」。

龍は、自分が地上に投げ落されたと知ると、男子を産んだ女を追いかけた。しかし、女は自分の場所である荒野に飛んで行くために、大きなわしの二つの翼を与えられた。そしてそこでへびからのがれて、一年、二年、また、半年の間、養われることになっていた。へびは女の後に水を川のように、口から吐き出して、女をおし流そうとした。しかし、地は女を助けた。すなわち、地はその口を開いて、龍が口から吐き出した川を飲みほした。龍は、女に対して怒り

を発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。そして、海の砂の上に立った。

（第一二章七～一八節）

天のミカエルと龍との戦いのところで、龍（共産主義）の由来が示されている。すなわち、天での戦いは物質的共産主義とミカエルを象徴とする神権主義との戦いであったのだ。

物質的共産主義は、一時的に平等のように見えても、物質から離れられないために精神的な進化はない。そればかりか、無宗教を唱える神を冒とくする思想である。ゆえに天から投げ落とされたのだ。

ところが、天界では龍がいなくなったので喜んでいるのであるが、今度は龍が地上に下ってきたということで人間界に物質的共産主義が広まるということになったのである。

龍は女を追いかける。これが中ソ国境紛争などのような、政治的・軍事的トラブルとなって表面化する。

しかし、女は大きなわしの二つの翼を与えられ助けられる。わしはアメリカ合衆国の象徴だ。ロサンゼルス・オリンピックのときのシンボルだったイーグル・サムを思い出してほしい。預言通り、一九七二年のニクソン訪中によって、中国とアメリカの国交が回復した後、しばらくの間

ではあるが、経済援助が行なわれ、中国は発展する。

龍はなおも女を押し流そうなどと試みる。これはソ連側の中国に対する強硬な政策を表わしており、具体的には、一九七九年の（ソ連の関与が明らかな）中越戦争、中ソ友好同盟相互援助条約の破棄などが挙げられよう。

だが、ソ連の思惑に反して、国際世論が中国を支持し、ソ連を批判したという事実が〝地は女を助けた〟という言葉で表わされている。

そして最後に、次の一文が書かれている。

「龍は、女に対して怒りを発し、女の残りの子ら、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを持っている者たちに対して、戦いをいどむために、出て行った。そして、海の砂の上に立った」と。

こんなところまで預言されていたとは！　アジア・アフリカ会議（A・A会議）にまつわる問題のことだ。

A・A会議は、一九五五年、アジア・アフリカの二九カ国によって民族自立と国際平和を求めて結集されたもの。しかし、諸国の路線が違いすぎ、会議の存続すら危ぶまれるような状態であった。そんな中で調停に努め、「平和一〇原則」への合意を導いたのが中国だったのである。したがって、当時のA・A諸国は、中国が好影響を及ぼした〝子〟と言ってもよいだろう。

ところが、その後は思わしくない。〝龍が戦いをいどむために、出て行った〟とあるように、ソ連の影が見えてくる。

一九五九年と六二年の中印国境紛争後、A・A諸国は親中国派と反中国派に分裂していたが、親中国派が第二回A・A会議開催を提唱したとき、反中国派は「ソ連招待論」を提起して抵抗している。

一方、ソ連の方もA・A諸国への経済援助・軍事援助を通じて、着実に第三世界への影響力を拡大してきたのだ。〝海の砂の上に立った〟というのは、親ソ連派となったA・A諸国の沿岸に造られたソ連の軍事基地のことである。

◉◉武力と権力をふりかざす〝獣(けもの)〟

わたしはまた、一匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が十本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚(けが)す名がついていた。わたしの見たこの獣はひょうに似ており、その足はくまの足のようで、その口はししの口のようであった。龍は自分の力と位と大いなる権威とを、この獣に与えた。その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。そこで、全地の人々は驚きおそれて、その獣に従い、また、龍がその権威を獣に与えたので、人々は龍を拝み、さらに、その獣を拝んで言った、「だれが、

この獣に匹敵し得ようか。だれが、これと戦うことができようか」。この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。そこで、彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち、天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。地に住む者で、ほふられた小羊のいのちの書に、その名を世の初めからしるされていない者はみな、この獣を拝むであろう。耳のある者は、聞くがよい。とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。（第一三章一～一〇節）

「ここには、ソ連が社会帝国主義に変貌していく様子が書かれているんだね。他の社会主義国をソ連の強大な軍事力で押さえ込んでいくという。そこには思想も理想もあったものじゃない。まさに大国の権力をふるう獣となったんだ。」

一九六六年、大陸間弾道ミサイル（ＩＣＢＭ）が配備されている。射程距離が長く、ソ連は自国の基地から相手国の本土を核で直接破壊できるようになったというわけだ。艦艇で相手国に接近する必要もなくなったということで、そのことが〝海から上る〟という言葉で示されている。もちろん、アメリカも時を同じくして大陸間弾道ミサイルを配備しているが、アメリカに関し

ては後で出てくるので、ここではソ連の方だけ説明していく。

◉◉傷を受けた一つの頭——チェコ事件の勃発

その獣には〝角が十本、頭が七つ〟あるが、これはソ連が龍であったときと同じにワルシャワ条約機構の七カ国とコメコンの十カ国を表わしている。が、冠は十に増えている。これは、ワルシャワ条約機構の関係国、ソ連・ポーランド・チェコスロバキア・東ドイツ・ハンガリー・ルーマニア・ブルガリアに加えて、新しくキューバ・モンゴル・ベトナムがソ連陣営に入って十カ国になったからである。

キューバは一九六一年「社会主義宣言」をしたが、やがて自国だけで社会主義路線を歩むことの困難さを悟り、七〇年以降ソ連との結びつきを強めた。

一九六六年には、ソビエト・モンゴル友好協力相互援助条約が結ばれており、ベトナムも一九七八年にカンボジアに対して軍事介入を行なったおり、ソ連から近代的な兵器の援助を受けているのである。

この獣の〝くまの足〟も〝ひょうの体〟も〝ししの口〟もソ連の体質を示していると言えよう。つまり、計画的に社会主義圏の強化をはかっているところが、着実に地面を踏み固める熊の足、秘密主義がひょう、他の国々を威圧し、正しさを喧伝するところがライオンの口なのである。

『その頭の一つが、死ぬほどの傷を受けたが、その致命的な傷もなおってしまった。』というのが一九六八年のチェコ事件である。

チェコスロバキアでは、社会主義体制への不満から「人間の顔をした社会主義」目指しての動きが盛り上がっていた。まず、出版物の検閲が解除され、「社会制度及び政治制度全般の民主化」も発表された。ソ連にとっては、七つの頭の一つであるチェコが致命的な傷を受けたのだ。

そういうチェコの動きに対して、ソ連陣営は「反革命の危機」として警戒を強め、ソ連を始めとする東欧の五カ国軍二〇万をもってチェコに侵入、改革指導者をソ連に連行してしまうという暴挙に出た。そのためチェコは改革前の状態に戻らざるを得なくなってしまったのである。これがソ連陣営の言う〝正常化〟だった。傷は治ったのである。

◉◉二〇〇四年、ソ連は崩壊する!

この次がまだ成就していない、ソ連の運命を暗示する預言である。

『この獣には、また、大言を吐き汚しごとを語る口が与えられ、四十二か月のあいだ活動する権威が与えられた。』

今までと同様に四十二カ月が四十二年間を指しているととると、この獣となったソ連が存続できるのは四十二年間ということになる。

それでは、いつソ連が龍から獣に変化したととらえたらよいであろうか？　前提は、ソ連が軍事力をもって一番最初にとんでもないことをやった時期ということになる。そこで年代をさかのぼってみると、一九六二年のキューバ危機にぶつかるのだ。

キューバ危機とは、アメリカ大陸で孤立していたキューバに、ソ連が攻撃用ミサイルを設置した事件である。当然アメリカ側は黙ってはいられない。米ソは対決寸前、世界中にあわや核戦争――という緊張が走った。結局交渉が成立し、世界中を恐怖に陥れた危機は去ったのだが、やはりこの事件をソ連の社会帝国主義のはしりと見てよいであろう。

結論を言おう。『黙示録』は、ソ連が一九六二年から四十二年後、二〇〇四年に崩壊することを預言しているのだ！　これは中国の滅亡と奇しくも同じ年。西暦二〇〇四年、何が起こるのか？　預言にはソ連がこれからますます強大になってゆくことがほのめかされているが……。

「とりこになるべき者は、とりこになっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある。」

「これは『カルマの法則』そのものですよ。」

K大師が言う。

「仏教的な『カルマの法則』が聖書に出てくるなんて、すごいですね。」

「それが真理であったなら当然だと思うよ。何しろ、この『黙示録』自体、シヴァ神の示唆なん

だから。しかし、〝ここに、聖徒たちの忍耐と信仰とがある〟と言っているところをみると、これからの時代の大変さが預言されているんだろうね。」

◉◉「カルマの法則」とシャクティーパット

先日、私の五才になる三女が、ある大師をつかまえて問いかけたことがあった。その問答の中に、「カルマの法則」がよく表われていたのでここに引用して、その説明にかえよう。

「ある人が他の人に殴られるのはなぜ?」

「それは、その人が以前に他の人を殴ったことがあったからだよ。」

「じゃあ、一回も殴ったことのない人が殴られるのはなぜ?」

「もし、人を殴ったことがないのに殴られたとしたら、その人は前生で人を殴ったことがあって、そのカルマが残っていたんだね。」

「前生でもそんなカルマを作っていなかったのに殴られたとしたら?」

ここでその大師は答えにつまってしまったらしいので、私が補足する。そのカルマがなかったはずなのに殴られたのだとしたら、その前にそのカルマを持っていた人とエネルギー交換が起きているということだ。だれかに触れたり、シャクティーパットを行なったりすると、カルマがある程度入れ替わってしまうのである。

例えば、私や大師が信徒にシャクティーパットをした場合、相手のカルマや煩悩が自分の方に移ってしまい、著しく心身のバランスを崩してしまう。相手の体の痛みが自分の痛みと変わってしまったり、イライラするようになったりということが起こるのだ。

ただ、エネルギーは高低があった場合だけ移動が起こるので、同じステージの人同士であればカルマの交換は起こらない。したがって、大抵はあらゆる事象の根は自分の中にカルマとして存在していたことになるわけだ。

そして、大変な不幸に襲われたときでさえ、「すべて自分の過去のカルマによる」ということを理解できるかどうかは、修行の大きなポイントでもある。「カルマの法則」を完全に理解しきらない限り、苦からの解放、すなわち解脱はあり得ない。

『黙示録』に「カルマの法則」が出てくるのも、それだけの意味あってのことなのである。

666の秘密——獣の謎を解く

◉◉意外な結末——明かされた獣の正体

わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。さらに、先の獣の前で行うのを許されたしるしで、地に住む人々を惑わし、かつ、つるぎの傷を受けてもなお生きている先の獣の像を造ることを、地に住む人々に命じた。それから、その獣の像に息を吹き込んで、その獣の像が物を言うことさえできるようにし、また、その獣の像を拝まない者をみな殺させた。また、小さき者にも、大いなる者にも、富める者にも、貧しき者にも、自由人にも、奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、

人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。（第一三章一一～一八節）

ついに、有名な『黙示録の野獣666』が出てきた。この666が何を指しているのか昨今の日本でも大変な話題となっている。666がネロであったとか、ナポレオンであったとか、ヒトラーのことだとか……。あるいは、既に生まれている人類を滅亡へと導く反キリストである等、謎の数字666は様々な論議をかもし出している。

『ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。』

さあ、この私もこの数字を解かなければならないときが来た。英語版の『ヨハネの黙示録』では、"reckon the number"と書かれている。計算して解けということだ。しかし、どのように計算して？　数字はたった一つ666しかない。

私は、私一人だけの力では如何ともしがたいと感じた。そこでシヴァ神に祈り、瞑想に入ったのだった。

「グル、シヴァ神よ、私は今この数字の解き方がわからずに困っています。どうかお力を貸してください。」

すると、「素因数分解」――、シヴァ神は私に一言「素因数分解」というヒントを与えてくだ

さったのである。

これは、数をそれ以上割ることのできない素因数に置き換えることだ。私は早速やってみた。666は（2×3×3×37）と素因数分解することができる。だが、

「違う。これではない。」

私は直感的に感じた。

「七つの封印、七つのラッパとあるように、ヨハネの素因数には7が絡んでいる。四十二日間は（6×7）、三日半は7の半分だ。千二百六十日だって7は素因数の一つ。それなのに、どうしてこの獣の数字にだけ7が関係していないんだ？」

私は最初に戻ろうと、もう一度この章を読み直した。すると、英語版に小さな注意書きがあることに気付いたのだった。

――古代の学者で、この数字を六百十六とするものもいた――

と。616！　これを素因数分解してみる。（2×2×2×7×11）

「これだ。獣の数字は666ではなく616だったんだ。」

私は、この数字をアルファベットに置き換えた。2→B、7→Gというように、アルファベットの順番通りに数字をあてはめていったのである。私は他の文章からこの獣がアメリカを指していると確信していたので、それらの数字に1を加えてみた。1はもともと素因数であるし、かけ

	1	2	3	4	5	6	7	8
大文字	A	B	Γ	Δ	E	Z	H	Θ
読　み	アルファ	ベータ	ガンマ	デルタ	エプシロン	ゼータ	エータ	テータ
音　価	a	b	g	d	e	dz	ē	th
	9	10	11	12	13	14	15	16
大文字	I	K	Λ	M	N	Ξ	O	Π
読　み	イオタ	カッパ	ラムダ	ミュー	ニュー	クシー	オミクロン	ピー
音　価	i	k	l	m	n	ks	o	p
	17	18	19	20	21	22	23	24
大文字	P	Σ	T	Υ	Φ	X	Ψ	Ω
読　み	ロー	シグマ	タウ	ウプシロン	フィー	キー	プシー	オメガ
音　価	r	s	t	ü	ph	kh	ps	ō

ても割っても変わらないからである。そして1をアメリカのAにあてはめたのだった。

しかし、それでも解けなかった。暗号解読のように、考え得る限りの操作を加えてみたが、今度はほとんどの国名にあてはまってしまうのである。

「ひょっとしたら、ギリシア語では？」

私の頭に閃いた。ヨハネが書いた原典は確かギリシア語であったはずだ。

(616＝1×2×2×2×7×11) それをギリシア文字にあてはめると、次のようになる。

(音価　a・b・b・b・ē・l)

Α・Β・Β・Β・Η・Α

しばらく文字をながめていると、いきなり「バイブル（聖書）！」とつながった。国際的な言葉となっている英語のつづりを無視して発音だけをとるならば、

BAHBBA (baēbbl) は BIBLE (baibl) にきわめて近いのだ。

考えてみれば、預言が解読されるであろう時代の国際的な言語の発音で残されている方がむしろ自然であると言えるであろう。獣の数字616は「バイブル」だったのだ。そして、『その数字とは、人間をさすものである』と。だとしたら聖書を経典とするキリスト教徒のことであることは間違いない。なんと獣がキリスト教徒！　意外な結末である。

これはシウァ神の巧妙なトリックだったとしか考えられない。なぜなら、ヨハネがもしこの預

言の内容を理解していたのだとしたら、キリスト教徒である彼のこと、こんなキリスト教徒が冒とくされるようなことを記すようなことをしないであろう。シヴァ神は、だからこそ謎めいた数字を示し、『ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい』との示唆をつけ加えたのだ。また、現代に至るまでの間に、キリスト教徒によるこの文章の抹殺を避けるためにも、そうする必要があったであろう。

さて、ここの文章は獣の数字のあった文末から解釈してしまったが、これから文頭に戻ることにする。そして、最初から通して解釈すると、「バイブル（キリスト教徒）」が、キリスト教国であるアメリカ合衆国のことであることが、おのずと理解できよう。まずは読んでいただきたい。

◉◉弱肉強食――〝獣〟アメリカの歴史

次に出現する獣はアメリカ合衆国であった。アメリカの歴史を見ると、これは弱肉強食の獣の歴史である。

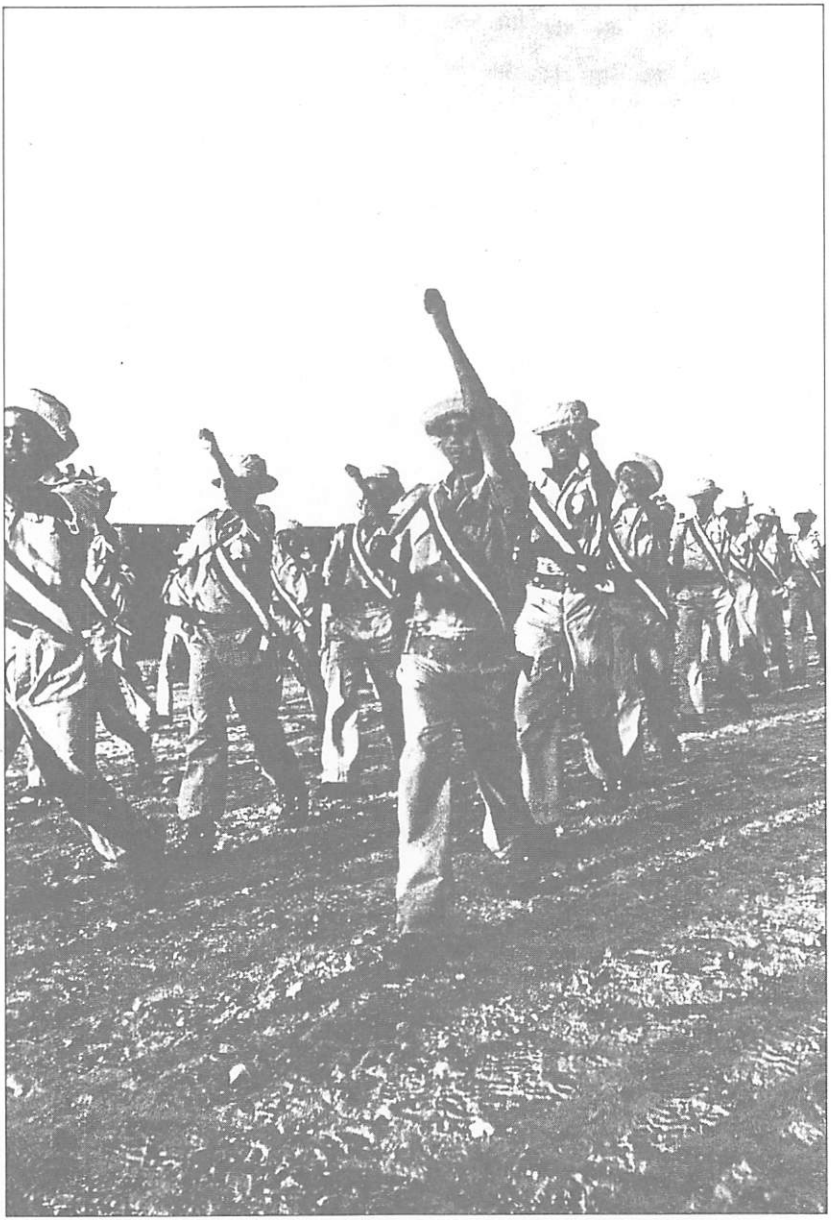
もともと原住民（アメリカ・インディアン）が何万年にもわたって住んでいたアメリカに、イギリス人が植民地を建設し始めたのは一六〇〇年代である。植民が促進された大きな要因の一つは、イギリス内での宗教問題だった。信仰の自由を求めてキリスト教の各宗派の教徒がアメリカへと渡ってきたのである。メイフラワー号でやってきたピューリタン（清教徒）など特に知られ

ている。

だが、彼らは原住民に対して布教したわけではなかった。彼らを同じ人間として見ることさえ否定した。そのため、植民地の発展は武力による威嚇・殺戮・土地の奪取という形で表われ、原住民の大きな犠牲の上に成り立っていたのである。このようにキリスト教徒がやってきたこと、それはアメリカの植民地時代から、これから述べる現代に至るまでまさに獣の行為であり、そこにキリスト教徒と獣とが結びつく理由がある。

ヨハネは言う。「その獣は二本の角を持っている」と。この角は共和党・民主党というアメリカの二大政党を表わしているものと思われる。そして、「先の獣（ソ連）の持つすべての権力をその前で働かせた」のである。そういうことができるくらいなので、アメリカにはそれ以上の力があったということが言外に含まれている。

「地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた」という文に出てくる〝致命的な傷〟は先に挙げたチェコ事件のことを指しているのではない。ここでは頭の一つが致命的な傷を受けたのではなくて、その獣自体の致命的な傷なのである。ゆえに、もっと以前の第二次世界大戦で負った〝致命的な傷〟のことだ。



◉◉〝先の獣〟ソ連の復興

第二次世界大戦において、ソ連は死亡だけでも兵員、一般人を合わせて二千六十万人という犠牲者を出している。これは参戦国の中でも最大のもので、他の国々と比較すると一ケタ違う数字だ。物質的損害の方も莫大で、データによると、都市一七一〇、村七〇〇〇、工場三一八〇〇、コルホーズ・ソフホーズ（集団農場・国営農場）九九八七六が被害を受けたとされる。

それを復興させ、アメリカと並ぶ超大国として堂々たる地位を確立していったソ連の裏に、アメリカの影響を感ぜずにはいられない。それは、裏でアメリカとソ連がつながっているのではないか、あるいはアメリカがソ連をコントロールしているのではないかという疑いを抱かせるほどのものである。

◉◉〝刻印のない者〟――東西陣営のはざま

アメリカはソ連が武力をもって勢力を広げていくのを放っておき、共産主義の脅威を必要以上に宣伝し、それによって自由主義国のほとんどを支配下に入れてしまうことに成功しているのだ。また、ソ連の軍事力に対抗し、西側陣営を防衛するためという大義名分のもとに、核の保有量を増やし、新型兵器を次々に開発し、とうとう核兵器を超えるＳＤＩ等の宇宙空間を利用した兵器まで開発されようという段階に達している。

つまり、『地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた』のは他ならぬアメリカであって、それを利用して自国の強化・勢力拡大をはかったのである。何とも巧妙な手段であった。

また、アメリカは『すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできないようにした』とある。

聞いてみると、キリスト教でもイニシエーションで額を使い、病気を治すときには額と手を使うのだそうだ。これが手や額の刻印に通じていると受け取れなくもないが、私はこれを指しているのではないと考える。

それよりも、共産主義、自由主義というレッテルを貼ることなのではないだろうか？　現在、各国の貿易相手国、貿易量ともに同じ陣営内の国々が圧倒的に多くなっており、二大陣営の勢力図がそのまま世界の経済地図のような状態である。これは『刻印のない者はみな、物を買うことも売ることもできない』と言えないだろうか？

救世主は来りて——超人類への予感

◉◉救世主の出現——小羊と十四万四千の聖徒

なお、わたしが見ていると、見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、十四万四千の人人が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。またわたしは、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のような声が、天から出るのを聞いた。わたしの聞いたその声は、琴をひく人が立琴をひく音のようでもあった。彼らは、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった。彼らは、女にふれたことのない者である。彼らは、純潔な者である。そして、小羊の行く所へは、どこへでもついて行く。彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、彼らは傷のない者であった。

わたしは、もうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわち、あらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、

「神をおそれ、神に栄光を帰せよ。神のさばきの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られたかたを、伏し拝め」。

また、ほかの第二の御使が、続いてきて言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者」。

ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」。

（第一四章一～一二節）

◉◉救世主を称えるシャンバラの歌

いよいよ救世主がこの世に現われるという預言が始まる。ヨハネはシオンの山に小羊（救世主）が立っていたというが、それでは古代のキリスト教圏の枠を出ない。私は、これから現われる救世主だとしたら、全世界的な立場から見なければならないと思うし、何回も言うようにアストラル・ヴィジョンは観念によって左右されることもあるので、地名は限定しないという立場に

立ちたい。また、十四万四千人という人数にしても、前に出てきたユダヤ人の十二部族の中からそれぞれ一万二千人という数え方なので、こちらもあてにならないと思うのである。

『彼らは、御座の前、四つの生き物と長老たちとの前で、新しい歌を歌った。この歌は、地からあがなわれた十四万四千人のほかは、だれも学ぶことができなかった』

とある。これは天界のシャンバラの歌なのであろう。天界の歌や音楽は、アナハタ・チャクラ以上のチャクラが開いた場合、またはそれを知っているグルが弟子に教えた場合以外、知ることはできない。

また、この歌は、いよいよ救世主が誕生するということを称えて歌われているのである。私には、この世で成就者・解脱者が誕生する瞬間に、天界から音楽が聞こえてくるのであるが、これも同じである。

小羊（救済者）のもとへ集まった人々について詳しく説明されている。それによると、それは明らかに出家者だ。女にふれたことがない。純潔である。口に偽りがない。そして『小羊の行く所へは、どこへでもついていく』と絶対的な帰依が強調されている。

K大師が言った。

「これは、オウムのシッシャの姿そのままですね。」

「オウムでは、戒律が厳しい上に修行も激しくて、シッシャではこういう人間しか残らないから

ね。特に性欲の戒を守れないでつぶれていく人間が多い。動物的本能の強い者は救済されないんじゃないかな。」

◉◉大破局を越えて——予言された〝超人類〟の誕生

ところで、『彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である』とされている。〝あがなう（redeem）〟とは「救われる」という意味だ。人間の中から救われた初めての実り（初穂）という言葉の中に、人類を超える超人類の誕生が暗示されているとは言えないだろうか？

この超人類の誕生を予言している予言者は結構多い。私が初めてこの種の予言に接したのは数年前のことだった。酒井勝軍（さかいかついさ）という予言者の軌跡をたどっていた私は、東北地方で偶然にも一人の古老と巡り合った。彼は、酒井勝軍と行動をともにした最後の生き残りだったのだ。

古老によると、酒井は身近な人々にだけいくつかの非公開の予言を残していたのだという。当時（昭和初期）の世相では、公（おおやけ）にするのをはばかられるという種類のものだったからである。

その非公開の予言には、日本が太平洋戦争で負けるということ、その後世界的な工業国として復興するということや、イスラエルの建国等が含まれているのであった（これらはすべて適中している）。が、その中でも私が心ひかれたのが、

「人類は今世紀末のハルマゲドン（人類最終戦争）で滅亡する。生き残るのは神仙民族だけだ。その王は日本から出るが現在の天皇とは違う。」

という予言であった。神仙とは辞書を調べると、「修行の結果、神通力を得た仙人」となっている。すると、超能力を持った超人類がその頃までに集団（民族）を作っているということになる。ここに『ヨハネの黙示録』との恐ろしいほどの一致がある。『ヨハネの黙示録』でも、そういう超人類の集団の出現が、神の怒りによって人類が終局を迎える時期と一致しているということが、先を読み進めれば明らかとなってくるのだ。

あの大予言者ノストラダムスも、その予言詩集『諸世紀』の中で人間とは違う〝別のもの〟や〝新しい種族〟が生まれるであろうことを暗示している。

また、ナチス・ドイツの総統ヒトラーも様々な予言を残し、そのほとんどが適中しているらしいが（日本の近代化、月着陸、コンピューターと情報システムの発達、日本・韓国・台湾の自動車産業の発達、ゴルバチョフ書記長の登場、大陸間弾道ミサイルの予言等）、彼もまた、超人類の誕生を予言している。それによると、今世紀末の大破局が〝救いの超人や神人を生み出す〟のだという。

やはり、神の怒りによる大破局を、神を心から信じる超人類のみが乗り越え、新しい世界を築くのではあるまいか？

◉◉仏教とモーセの戒の類似性

一人の御使いが、神の裁きのときが来たことを伝える。次の御使いが不品行による神の激しい怒りによってバビロンは倒れたと言う。神の裁きの具体的内容については、後章に書かれているが、何が神の怒りを買う不品行であるのか、ここでは少し考えてみたい。

参考として、『旧約聖書』の中の「出エジプト記」で神がモーセに説いた戒めを挙げてみよう。

・あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。
・あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。
・あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。
・安息日を覚えて、これを聖とせよ。
・あなたの父と母を敬え。
・あなたは殺してはならない。
・あなたは姦淫してはならない。
・あなたは盗んではならない。
・あなたは隣人について、偽証してはならない。
・あなたは隣人の家をむさぼってはならない。

こうしてみると、仏教の戒と一致しているところがある。仏教では、

・殺生をしてはならない。
・盗んではならない。
・邪淫をしてはならない。
・ウソをついてはならない。
・必要のない言葉をしゃべってはならない。
・悪口を言ってはならない。
・人と人とを仲たがいさせるような言葉をしゃべってはならない。
・むさぼってはならない。
・憎しみから怒りを発してはならない。
・真理を否定してはならない。

とあり、また〝自分のために刻んだ像を造ってそれにひれ伏してはならない〟という戒めと同じ偶像崇拝を否定する戒めも原始仏典には見られるのである。

少なくとも、『殺生をしてはならない』『盗んではならない』『邪淫をしてはならない』『むさぼってはならない』『偶像崇拝をしてはならない』等の戒めは、神が人間に望んでいる正しい行ないであろうことがわかる。

◉◉かまを入れて刈り取れ！

またわたしは、天からの声がこう言うのを聞いた、「書きしるせ、『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』」。御霊も言う、「しかり、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく」。

また見ていると、見よ、白い雲があって、その雲の上に人の子のような者が座しており、頭には金の冠をいただき、手には鋭いかまを持っていた。すると、もうひとりの御使が聖所から出てきて、雲の上に座している者にむかって大声で叫んだ、「かまを入れて刈り取りなさい。地の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた」。雲の上に座している者は、そのかまを地に投げ入れた。すると、地のものが刈り取られた。

また、もうひとりの御使が、天の聖所から出てきたが、彼もまた鋭いかまを持っていた。さらに、もうひとりの御使で、火を支配する権威を持っている者が、祭壇から出てきて、鋭いかまを持つ御使にむかい、大声で言った、「その鋭いかまを地に入れて、地のぶどうのふさを刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから」。そこで、御使はそのかまを地に投げ入れて、地のぶどうを刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒ぶねに投げ込んだ。そして、その酒ぶねが都の外で踏まれた。すると、血が酒ぶねから流れ出て、馬のくつわにとどくほどになり、一千六百丁にわたってひろがった。

（第一四章一三～二〇節）

『今から後、主にあって死ぬ死人はさいわいである』と、ここでは、はっきりと救世主がすでにこの世に生まれていることを表わしている。

『彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく』と、わざ（業）、すなわちカルマが、死んでもついていくと言っている。この場合のカルマは〝労苦を解かれて休み〟とあることから、良いカルマ・善行によって作られたカルマであることがわかる。

次に、この世に現われる救世主の姿らしきものが浮かび上がる。それは、〝人の子のような者〟で仙人のように雲に乗っているのだ。そして、頭には金の冠をいただき、とあるのでサハスラー・チャクラが開いている人らしい。実際、このチャクラが開いているのを霊視すると、金の冠をかぶっているように見えるのである。

彼は地の穀物が実ったということで刈り集める。この穀物は先の初穂と同義とみてよいだろう。信仰心の強い清らかな人々を集めたのだ。彼らは救世主とともにあり、これから起ころうとしている神の裁きのときにも救われることが約束されている。

救世主が現われて、清らかな人々を集めたのと大体同時に、ぶどうが刈り集められて神の激しい怒りのぶどう酒が作られた。ぶどうが人間の悪業（悪いカルマ）の象徴なのである。それが限界にまで達して（熟して）しまうと、そのカルマが返ってくるときが恐ろしく激しい。それが

〝血〟によって暗示されている。ものすごくたくさんの人が死ぬということは間違いないだろう。

◉◉彼らによって神の激しい怒りは終わる……

またわたしは、天に大いなる驚くべきほかのしるしを見た。七人の御使が、最後の七つの災害を携えていた。これらの災害で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。またわたしは、火のまじったガラスの海のようなものを見た。そして、このガラスの海のそばに、獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々が、神の立琴を手にして立っているのを見た。彼らは、神の僕モーセの歌と小羊の歌とを歌って言った、

「全能者にして主なる神よ。
あなたのみわざは、
大いなる、また驚くべきものであります。
万民の王よ、
あなたの道は正しく、かつ真実であります。
主よ、あなたをおそれず、
御名をほめたたえない者が、ありましょうか。
あなただけが聖なるかたであり、

あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。
あなたの正しいさばきが、
あらわれるに至ったからであります」。
その後、わたしが見ていると、天にある、あかしの幕屋の聖所が開かれ、その聖所から、七つの災害を携えている七人の御使が、汚れのない、光り輝く亜麻布を身にまとい、金の帯を胸にしめて、出てきた。そして、四つの生き物の一つが、世々限りなく生きておられる神の激しい怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使に渡した。すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、七人の御使の七つの災害が終わってしまうまでは、だれも聖所にはいることができなかった。
（第一五章一～八節）

これは第十五章であるが、この文の初めの内容が何となくおかしい。『七人の御使が、最後の七つの災害を携えていた。これらの災害で神の激しい怒りがその頂点に達するのである。』というところである。〝怒りがその頂点に達する〟のでは、その後も神の怒りによる災害が起こり続けるというニュアンスが含まれてしまう。しかし、今までにも、様々な災害が人間の世界に起こってきた。そして、次に来るべきものはその総決算とも言うべき最後の大破局でなければならない。私は念のために翻訳のもととなった英文の『黙示録』を調べてみた。すると、果たして私が考

えていた通りの表現になっていたではないか。ここの部分だけ私に訳し直させていただきたい。

「彼らによって神の激しい怒りが終わるからである」

と。

さて、これで意味が通じるようになった。これからの預言が、ハルマゲドンを含んだ最終的な大災害、地球規模で行なわれるカルマの清算だ。

しかし、選ばれた清らかな人々（おそらくは超人類）は救世主と共にある。『火のまじったガラスの海のようなもの』、これが救世主なのだ。救世主の発する透明光とクンダリニーの光によるエネルギーによってこのように見えるのである。

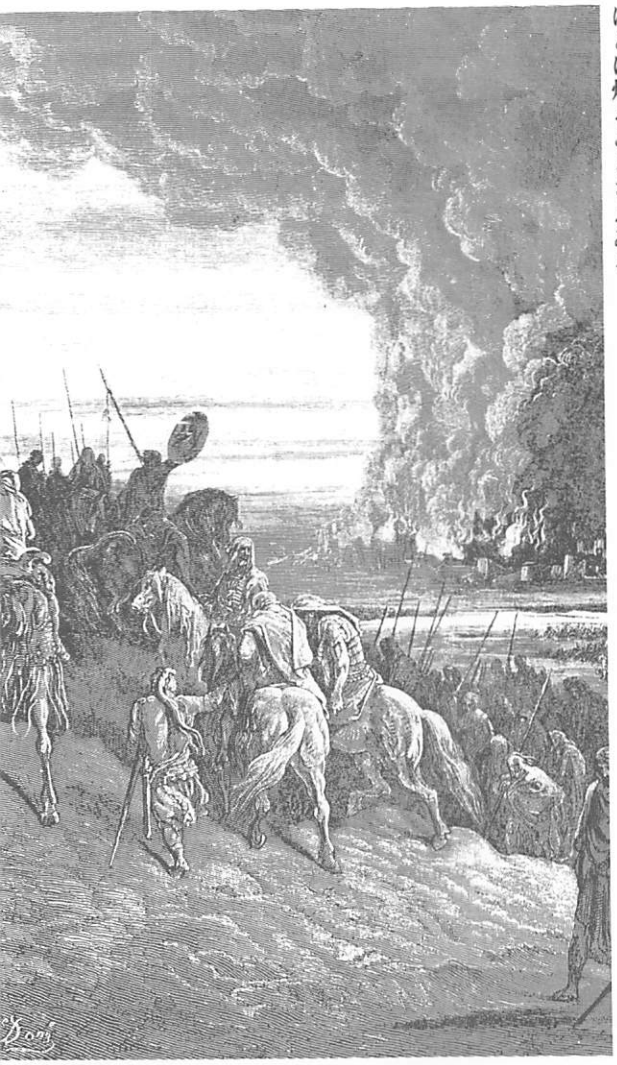
また、選ばれた人々が出家者の集団であることが、ここにも表われている。〝獣とその像とその名の数字とにうち勝った人々〟なのである。これは、制約を何一つ受けていない、国の制約すら受けていないということで出家者の状態なのだ。

『四つの生き物の一つが、世々限りなく生きておられる神の激しい怒りの満ちた七つの金の鉢を、七人の御使に渡した。すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、七人の御使の七つの災害が終わってしまうまでは、だれも聖所にはいることができなかった。』

いよいよ最後の七つの災害が起こるのである。七人の御使いは〝神の激しい怒りの満ちた七つの金の鉢〟を渡された。この中にはハルマゲドンも含まれているのだ。それら災害の内容につい

てはすべて次章で明らかになっていくだろう。

一方、シヴァ神は瞑想に入られたらしい。災厄を現象化させるための瞑想である。瞑想によってアストラル・エネルギーを強めたとき、周囲は煙るのだ。これは私も体験しているし、他の人々の証言もある。普通の人には理解できないかもしれないのだが、実際に身体が隠れてしまうほどに煙ることさえある。



第五章

そして、七つの鉢が傾けられた

◉◉最後の災害の始まり——傾けられた七つの鉢

それから、大きな声が聖所から出て、七人の御使にむかい、「さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ」と言うのを聞いた。

そして、第一の者が出て行って、その鉢を地に傾けた。すると、獣の刻印を持つ人々と、その像を拝む人々とのからだに、ひどい悪性のでき物ができた。

第二の者が、その鉢を海に傾けた。すると、海は死人の血のようになって、その中の生き物がみな死んでしまった。

第三の者がその鉢を川と水の源とに傾けた。すると、みな血になった。それから、水をつかさどる御使がこう言うのを、聞いた、「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このようにお定めになったあなたは、正しいかたであります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことであります」。わたしはまた祭壇がこう言うのを聞いた、「全能者にして主なる神よ。しかり、あなたのさばきは真実で、かつ正しいさばきであります」。

第四の者が、その鉢を太陽に傾けた。すると、太陽は火で人々を焼くことを許された。人々は、激しい炎熱で焼かれたが、これらの災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰すことをしなかった。

第五の者が、その鉢を獣の座に傾けた。すると、獣の国は暗くなり、人々は苦痛のあまり舌をかみ、その苦痛とでき物とのゆえに、天の神をのろった。そして、自分の行いを悔い改めなかった。

第六の者が、その鉢を大ユウフラテ川に傾けた。すると、その水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かれてしまった。また見ると、龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきた。これらは、しるしを行う悪霊の霊であって、全世界の王たちのところに行き、彼らを召集したが、それは、全能なる神の大いなる日に、戦いをするためであった。（見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者は、さいわいである。）三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集した。

第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、そ

れほどに激しい地震であった。大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった。また一タラントの重さほどの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のゆえに神をのろった。その災害が、非常に大きかったからである。

（第十六章一～二十一節）

◉◉第一の災害、人間に対する死の宣告――「癌」

これからの預言の一部は、既に始まっており、刻々と悪化し続けているものである。そして、残りの預言は今後現象化するはずのものなのだ。

第一の鉢の災害では、〝ひどい悪性のでき物ができた〟とされているが、これは、今増え続けている癌を指している。

癌とは、私たちの肉体を構成している細胞が、何らかの原因で突然変異を起こして異常に増殖していく病気である。その増殖をくい止めることができなければ、命までもが奪われてしまうのだ。

現代の医学の発達が目覚ましいものであることはだれもが認めるところである。癌の治療法にしても、外科療法・放射線療法・加温療法・化学療法・免疫療法・レーザー療法があり、それらの研究は更に進められている。

にもかかわらず、癌による死亡者数は年々増加の一途をたどり、日本では一九八一年以来、死亡原因のトップとなり続けている。八五年の厚生省の統計では、実に十八万七千七百十四人という多くの人間が癌によって命を奪われているのだ。

しかも、癌が他の病気に比べて特殊であるところは、癌の宣告が死の恐怖による精神的苦痛を招き易いというところである。ゆえに、日本では癌患者に対しては本当の病名を告げない方が良いという意見が根強いようである。

肉体的にも精神的にも大きな苦痛を伴う癌――これは神の激しい怒りの表われだったのである。となると決定的な予防法も治療法もみつかることはないのではなかろうか？〝ひどい悪性のでき物〟による犠牲者の増加に歯止めをかけることはできないのではないだろうか？

◉◉第二の災害、脅かされる生物たち――「海洋汚染」

第二の鉢による災害では、海の生き物がみな死んでしまう。これは言うまでもなく海洋汚染のことだ。

「蝕まれる地球」（石弘之著、朝日新聞社）という文献にはこう書かれている。

「一九六九年、南極の氷から〇・〇四ppmの農薬DDTが検出された時は、世界に衝撃が走った。DDTは南極から何千キロも離れた陸上でしか使われていない。それが見つかったというこ

とは、畑や森林から川を伝い、海を流れてたどりついたものか、大気によって運ばれ、降り注いだものとしか考えられない。PCB（ポリ塩化ビフェニール）も、北極のアザラシ、南極のペンギン、南極海のクジラなどの体内に蓄積していることが次々に明るみに出ている。……（略）……

極北の民、エスキモーの血液中から高濃度の有機水銀が見つかり、それが魚や海洋哺乳動物を経由したものだと、カナダ政府が発表したのは一九七七年のことだ。核実験に由来するストロンチウム90やセシウム135などの人工放射性物質は、世界のどこの海でも、深さ数千メートルの深海からでさえも検出できる」

小羊が第七の封印を解いたところでも水質汚染として触れたが、アザラシの大量死や、東京湾のダイオキシン汚染はここにも関連している。すべてが流れ込む海、そしてそれ以上どこにも汚染物質の行き場のない海——どうなることか。

私は、海の生物が実際にどれだけ影響を受けているのか、詳しい資料を探してみた。ところが不思議と見つからないのである。ようやく、「ニューズウィーク」（八月号）の英語版で特集記事を見つけたのだった。東京湾のダイオキシンについても、「影響が大きいから」と具体的な汚染地域をひた隠し。日本人の国民性がそんなことを許しているのだろうか？　なぜか娯楽の方にばかり興味が向きすぎて、大切なことを忘れているような気がする。私達が地球の一員であることを忘れてはいけない。それでなくても、もう何もかも手遅れになりかけているというのに。

以下、『ニューズウィーク』より――

「クリスチャンサン（ノルウェー南部）の村の近くで養殖していたサケ二二トンが二日で全滅。原因は五月に南スカンジナビア海域で異常発生した有毒な藻類（赤潮）」

大抵の場合、赤潮の発生には、海洋汚染が関係しているものである。これもその一例であろう。『ニューズウィーク』の記事はこう説明する。

「赤潮は世界中の魚の群を荒らしている。それは植物プランクトンと呼ばれる微生物の大きな集団で、何千年前、おそらく何百万年という昔からあった。しかし、最近のものはずっと頻繁に現われ奇怪な特色を示している。以前は毒素を持っていなかったし、異常発生をすることもなかった。最近は汚染が原因しているという説が有力である。」

「商船、特にタンカーが植物プランクトンの種子を運び、世界中の海域で異常発生させているという推測もある。」

「地球の気温の高温化、海流、諸開発などが植物プランクトンの異常発生の環境を作っている。」

「スカンジナビアの赤潮で、養殖魚に二億ドルにのぼる被害がでている。」

「科学者達は赤潮と海洋哺乳動物の死とが、関係あるのではないかと見ている。昨秋、マサチューセッツで一ダース近くのサトウクジラが死んだ。」

赤潮――これは〝海は死人の血のようになって、その中の生き物がみな死んでしまった〟という表現にぴったりではないか。

そして、これは日本でもよく発生して被害を与えているのである。

「世界中の海洋が二〇〇億トンのゴミ（ソーダ缶から放射性廃棄物、化学薬品、重金属など）によって埋め尽くされてきている。」

「注射器や薬びんなどの医療廃棄物が海洋に流れ着いている。血液のサンプルから陽性のエイズ抗体が検出された（ニューヨーク）。」

「北海のサケ・チョウザメ・カキ・エイ・タラが消えた。かろうじて生き残っているものでも、皮の伝染病、骨の奇形、できものに冒されている。」

「アザラシの大量死について。原因は呼吸器系を冒すウイルスであるが、汚染も間接的な原因となっている。動物の免疫システムが毒素、ＰＣＢ、重金属によって弱められるからである。死んだアザラシからは一〇〇〇以上の有害物質が発見された。」

「ヘドロによってエビやカニに焼けたような跡がついた。」

「海鳥がしょっちゅう原油の流出事故の犠牲になっている。」

原油の流出事故のことが出てきたが、タンカーや海底油田の事故が一旦起これば、海の生態系

石油の海洋環境への流入量(1973年) 米国アカデミー資料から

原　　因	流　入　量　(万t)
海上輸送	213.3
タンカー運航	108
乾ドック	25
積み降し	0.3
ビルジ水	50
タンカー事故	20
他の船舶事故	10
海底石油掘削	8
臨海精油施設	20
産業廃棄物	30
都市廃棄物	30
下水	30
河川（レクリエーション用の船舶によるものを含む）	160
石油の自然浸出	60
石油製品の蒸発物が降下	60
計	611.3

（出典：石弘之著「蝕まれる地球」朝日新聞社）

を簡単に破壊してしまうのだ。

また、事故以外の経路を合わせると、年間数百万トンを越える量の石油が海に流入しているという。

◉◉第三の災害　しのびよる魔の手――「放射能汚染」

第三の御使いは、鉢を川と水の源とに傾けた。やはり、河川や湖などの汚染が考えられる。これも先の水質汚染の悪化した状態と言えるが、これはまだすべてが現象化しているというわけではないのではないだろうか？

私はもっともっとひどい事態に陥るのではないかという予感を持っている。それは放射性物質による汚染だ。

「原子力発電所というのは、川のそばにあるんじゃないかなあ？」

門外漢の私がインスピレーションのみからこんなことを言ったら、

「あたりまえですよ。原子力発電には多量の冷却水が必要ですから川のそばと決まっています。日本では島国ということもあって海のそばですが。」

と科学者M大師に一笑に付されてしまった。

一九八六年四月に起こったチェルノブイリ原子力発電所事故。史上最悪の原発事故といわれて

いる。

チェルノブイリがロシア語で〝苦よもぎ〟という意味を持っていることから、御使いの第三のラッパによる災害がこの原発事故の預言であったのではないかとの意見もあった。だが、私は時代が一致していないとの理由から、その預言に関しては以前の工業廃棄物による水質汚染から発生した災害と解釈したのである。しかし、今回の第三の御使いの鉢による災害には、チェルノブイリ原発事故も含めなければならない。

チェルノブイリのすぐ脇にはキエフ湖があり、プリピャチ川がある。水系への汚染防止のため浸透防止壁の設置や堤防の建設工事が行なわれはしたが、放射能に汚染された水は既に流れ込み、死の水源と化してしまっているのだ。

また、チェルノブイリ原発事故による死の灰は、高度一万メートルの上空にまで上昇し、ヨーロッパ全域に拡散した。雨とともに放射能は地に降りそそぐ。これをフォール・アウトと呼ぶ。この放射能はどこへ行くんだ？　農地を汚染し、牧草を汚染し、また川やダム・湖に流れ込んで行くのだ。魚も汚染され、飲料水でさえ汚染されていくということになる。いや、もう既に汚染されてしまっているのだ。

『DAYS』という月刊誌に、「アメリカ・コロンビア川における再処理工場下流の濃縮サイクル」というデータが載っていた。これは、川に流れ出た放射性物質が、水→プランクトン→魚→

アヒルと進む食物連鎖の中でどのように濃縮されていくかという実測データである。それによると、

川の水の放射性物質を『1』とすると、
水中のプランクトン　二〇〇〇倍
プランクトンを食べる魚　一万五〇〇〇倍
その魚を食べるアヒル　四万倍
川の虫を与えられる子ツバメ　五〇万倍
水鳥の卵の黄身　一〇〇万倍

となるのだそうだ。この数字には私も驚いた。生物体内での濃縮がこんなにも大きなものだったとは！　そしてこの数字の現象化として、「一九七九年のスリーマイル島の原子炉の大事故のあと、アヒルの卵が黒くなって一羽もふ化しなかった」「チェルノブイリ原発事故のあと、渡り鳥の集まるフロリダで四九種類の鳥のふ化率が六十五パーセントにも減少している」「ウィンズケールで飼っていたアヒルの卵がふ化したとき、十二羽中七羽は目が見えなかった」例などが挙げられている。

最後に挙げたウィンズケール（イギリス）には、プルトニウムの再処理工場があり、プルトニウムの生体内濃縮によって近くの村に子供の白血病が多発しているという。

水の放射性物質による汚染は、想像を絶するほどの被害をもたらすのだ。水鳥だけでなく、人間にも既にその魔の手を広げつつあるのである。

もっと恐ろしいのはこれから先――チェルノブイリを上回る事故がないとは限らない。また、現在稼動している原子力施設から流れ出ている放射性廃棄物はじわじわと水を、そして生物を、人間を蝕み続けているのだ。

◉◉第四の災害、悪業がもたらした異変――「旱魃」

第四の御使いが太陽に鉢を傾けると、人々は激しい炎熱で焼かれた。これは旱魃である。

もちろん旱魃は人類の歴史とともに昔からあり続けた。しかし、近年の旱魃は少雨という気候の影響のみならず、人為的な側面をも合わせ持っているという点で、質が違ってきているのである。

癌の多発にしても、海の汚染や河川や水源の放射能汚染にしても、人間の傲慢さが生み出した産物である。そして旱魃――本当に人間が積んできた悪業によってカルマが返ってきているのだとしか思えない。

無計画、かつ過剰な農耕や放牧、生態系の微妙なバランスの人為的破壊、樹木の無計画すぎる伐採、都市部や工業地帯での水の大量消費等、人間側が、少雨による旱魃に致命的な追い打ちをかけているのだ。また、生産活動によって増加しつつある二酸化炭素が温室効果を増大させて気

温を上昇させることも懸念されている。世界資源研究所によると、地球の平均気温は八〇年代に入って急速に温暖化しているという。また、シカゴ大学の研究グループはフロンガスによる温室効果についても警告している。

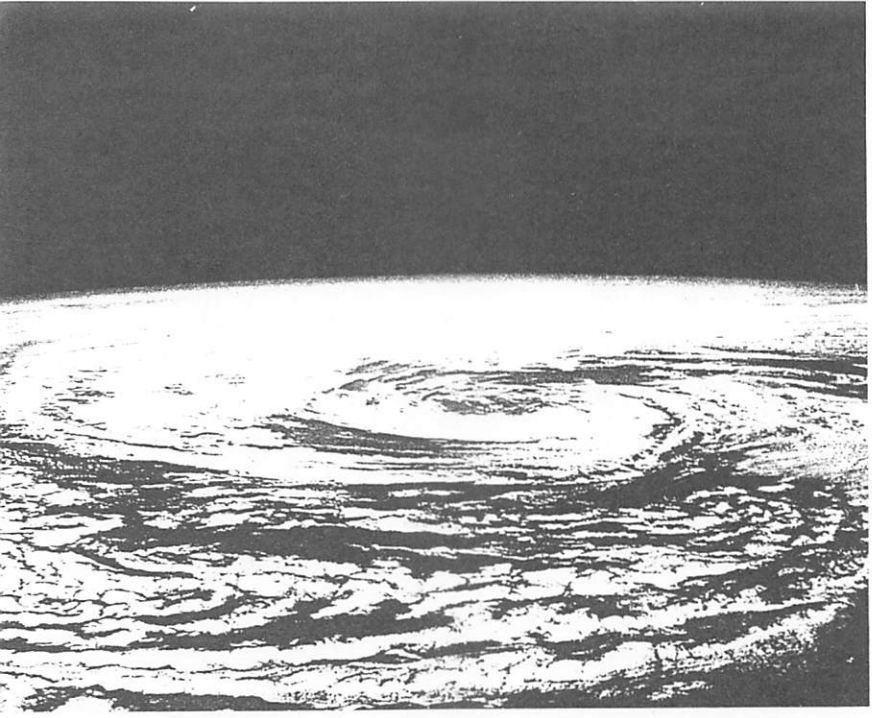
アフリカ大陸で頻発する旱魃による飢餓は全世界に衝撃を与えた。先進国といわれる国々で飽食を戒める風潮が生まれるほど、食物が過剰に、そしてぜいたくになっている時代に、アフリカでは多くの人々が餓死していったのである。あるいは、栄養失調から病気に対する抵抗力を持たずに死んでいったのである。餓鬼界の苦しみ、悲哀がこの世に現われたようなものであった。

旱魃が襲ったのはアフリカ大陸だけではなかった。

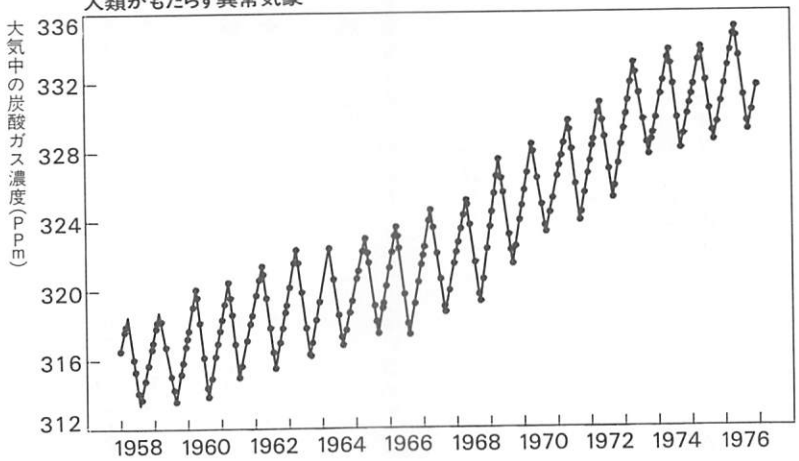
七五年～六年にはヨーロッパで旱魃が相次いだ。フランスでもイギリスでも、西ドイツでも、イタリアでも、そして東ヨーロッパ圏でもひどい旱魃に見舞われている。各国とも農業・畜産が大打撃を受けた。

その後も、アメリカ合衆国で、中国で、東南アジア諸国で、旱魃は猛威をふるったのだった。

そんな気象異常がしばらく落ち着いたかと思っていれば、昨年（八七年）も旱魃の年となり、日本でも深刻な事態に陥ったことは記憶に新しい。ダムの貯水量は日に日に減ってゆき、とうとう干上がって湖底が姿を現わしたダムさえあったほどだ。梅雨時だというのにである。当然厳しい給水制限もあった。



人類がもたらす異常気象



同じ頃、東南アジア諸国やインドでも旱魃の大被害を受けていた。また、七月下旬になってからは日本で日射病・熱射病で倒れる人が続出。ギリシアでも異常な暑さのため、一〇〇〇人以上の死者が出ている。これも預言に含まれていたと言える。

今年（八八年）もアメリカ合衆国中西部を中心に大旱魃が襲った。六月の降雨量がミネソタ州で平年の五パーセント、イリノイ州、インディアナ州、オハイオ州などで一〇パーセントと極端に少なく、この状態は七月下旬まで続いた。

同じくアメリカでは八月、西海岸を除く全土が異常な熱波に襲われている。

「人々は、激しい炎熱で焼かれたが、これらの災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰すことをしなかった」

とあるように、あまり自ら環境を悪化させたということに対する反省は見られないようである。

◉◉第五の災害、アメリカをみまう恐怖――「エイズ」

次はアメリカ合衆国に関して書かれている。第五の御使いが、鉢を獣の座に傾けたのだ。すると、獣の国は暗くなり、でき物もできたとなっている。

アメリカが暗くなったのは、貿易赤字と財政赤字というアメリカ経済に影を落としている二大問題のためである。毎月百億ドルという貿易赤字は、アメリカを世界一の債務国に転落させ、更

にその債務を増やし続けているし、財政赤字の方は年間一千五百億ドルにのぼっているのだ。

ブッシュ次期大統領がレーガン政権を引き継いだとしても、アメリカの財政赤字削減に対する不信感は残りそうである。また貿易赤字にしても今年、月ごとの増減が激しすぎ、将来は見えないともいわれている。〝暗さ〟は少なくとも当分取り除くことができないであろう。

さて、アメリカでのでき物と言えば、何と言ってもエイズをおいて他にはない。この病気はあまりにも関心を集めているので、今さら説明する必要がないかもしれないが、一応は簡単に触れておく。

「エイズの治癒例は一例だってありませんよ。」

こう言うのは、最近出家してシッシャとして私のもとにやってきた医学博士である。彼はその直前まで、大学の研究室でエイズ・ワクチンの開発に携わっていたので当然エイズについては専門的な知識を持っている。

「感染したらいずれ必ず発病します。日本の潜在的な感染者は……。」

と、彼は感染者の推定人数を挙げたのだが、その数字は厚生省が把握して発表している数字とあまりにも違う。楽観はできないようだ。

さて、エイズが初めて確認されたのは一九八一年のアメリカ、わずかに七年前のことだった。当時は全く未知の謎の病気が突然この世に涌いて出たようなものだったが、その実態が明らかに

なるにつれて〝現代の黒死病〟などと呼ばれたりした。発病者の急増と死亡率の高さゆえにである。

以後エイズの原因がエイズ・ウイルスＨＩＶによることが判明し、急速に数々の研究が進んでいるものの、治療法もワクチンも発見されるには至っていない。

今年、一九八八年八月三十一日現在、ＷＨＯ（世界保健機関）に報告された患者数は、合計一一万一八六四人。このうち南北アメリカ八万九九四人（うち米国七万一一七一人）、アフリカ一万四九三九人、ヨーロッパ一万四一六〇人、オセアニア一〇三四人、アジア二八七人、日本九〇人となっている。これは死亡者も含めた数字で、アメリカの場合、八月一日現在の患者約六万九〇〇〇人のうち死亡者が約三万九〇〇〇人となっているので、一カ月後の統計でも六割近くは死亡しているとみてよいだろう。なお、発病してからの死亡率は一年で五〇パーセント、三年で八〇パーセント、五年で九〇パーセントとなっている。

アメリカでは病因・死因の大きなウエートを占めており、血友病患者・違法静注薬物常用者（麻薬・覚醒剤の静脈注射）の死因の第一位となっている。

ＨＩＶ感染者の数は一〇〇万人～一五〇万人と見られ、成人の感染者のうち同性愛か両性愛の男性と静注薬物常習者が九〇パーセント近くに達している。子供の場合、七十八パーセントが母子感染である。輸血・性行為・麻薬や覚醒剤の静脈注射・母子感染によって感染しているのである（注射は一本で回し打ちするのが原因）。

エイズの正式名が後天性免疫不全症候群となっている通り、普通の人が何でもないような微生物が命を奪うまでに増殖してしまう免疫不全の病気、それがエイズである。

エイズの症状は四期に分けられるという説がある。それによると、第一期はＨＩＶ感染後約二週間して、リンパ節の腫れ・疲労感・頭痛・発熱等があるが数週間以内に消える。第二期は無症候性キャリアの状態が長期間続く。第三期はエイズ関連症候群というものが現われる（リンパ節の腫れ、微熱や下痢・脳神経症状等）この状態は長く続き、細胞性免疫は低下する。第四期、これは終末期である。日和見感染（カリニ肺炎・中枢神経系トキソプラズマ症・消化管ガンジダ症等）・複合性エイズ痴呆・悪性腫瘍（カポジ肉腫・直腸癌・舌癌・白血病等）に冒され死に至る。

このような治療法が見つからないような病気が、突然文明が一番発達したようなアメリカに出現したのが不思議である。いまだ風土病に苦しめられているようなアフリカの奥地だったらわかるのに。やはり神の計画によって災害は進んでいるのだろうか？　だとしたらハルマゲドンが終わるまで、エイズはこの世にはびこるということになる。

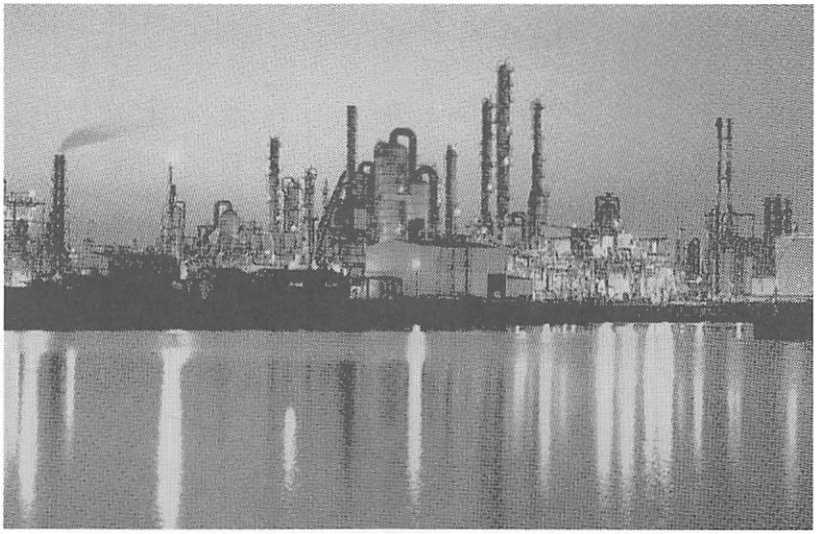
「第六の者が、その鉢を大ユウフラテ川に傾けた。すると、その水は、日の出る方から来る王たちに対し道を備えるために、かれてしまった」

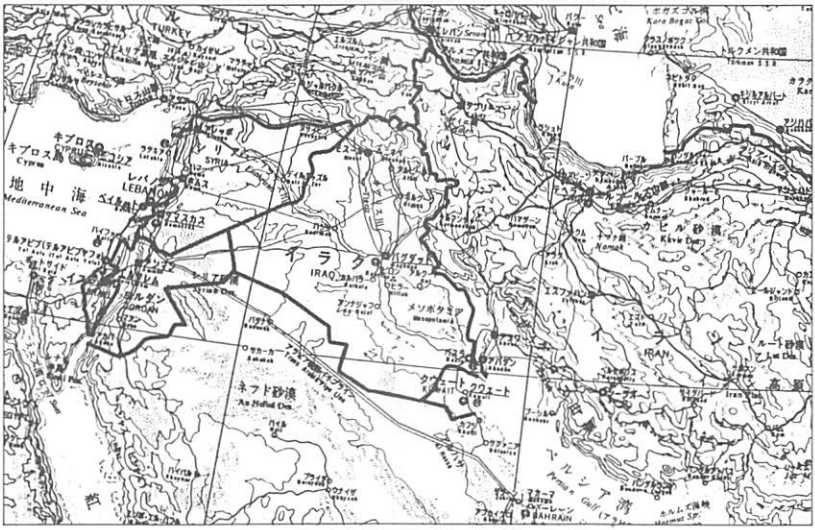
現在でもこの大ユウフラテ川（ユーフラテス川）を巡っての問題がないわけではない。この川はトルコに源を発し、シリア、イラクと流れてチグリス川と合流、シャッタル・アラブ川と名を変えて最終的にはペルシア湾に注いでいるのだが、数カ国の間を流れているということが深刻な水争いを引き起こしている。

まず、イラクよりも上流に位置するシリアが水力発電と灌漑を目的としてこの川にダムを造った。だが、一九七五年に貯水が始まるとイラクを流れる水量が減ってしまい、農作物に大きな被害が出たのである。この事態は、もともと長い間抗争を繰り返してきた両国の関係を急激に悪化させてしまったのであった。今も水の分配は国際的な問題となっている。

では、〝水がかれる〟という預言をこの大ユウフラテ川の水問題とみてよいだろうか？　いや、

◉◉第六の災害、対立化する世界――「石油危機」





ユーフラテス川付近の図

私はそうは思わない。この預言はまだ成就してはいず、成就するときにはもっと大きな問題に発展してしまうだろうという予感があるのだ。〝日の出る方から王たちが来る〟という表現は一層その感を強める。

それでは、何が起こると考えられるだろうか？

この地域性から見て、重要なポイントとなるのは石油であろう。今のところ、私達は石油に不自由しているという印象はあまりないが、万が一石油が手に入らなくなってしまったとしたらどうなるか？　現に、オイル・ショックという問題が二度までも起こっている。

中東の産油国で組織しているＯＰＥＣ（石油輸出国機構）は、一九七三年一〇月、第四次中東戦争が始まると、原油削減・輸出価格の四倍化などを宣言した。これが第一次オイル・ショックを招き、石油輸入国に重大な影響を及ぼした。

第二次オイル・ショックは、七九年にイラン革命が引き金となって起きたもので、原油価格の暴騰が世界経済を混乱させた。そしてこれらのオイル・ショックは、輸入原油にかなりの部分を頼ってきた西側諸国の土台のもろさを再認識させたのであった。

石油は限りある資源なのだ。約六〇パーセントは中生代（二億四七〇〇万年前から六五〇〇年前）の地層から産出されており、これはこの気の遠くなるような長い期間をかけて太古の海や湖の底にたまったプランクトンや藻類から石油が生成されてきたことを示しているのである。した

がって、石油がなくなったらもうおしまい。どんなに頑張っても、人間の手で石油を作り出すことなどできないのだ。

アメリカとソ連、そして日本という三国だけで世界石油の半分を消費しているといわれる。このうちアメリカは自国産の石油では足りずに三十五パーセントを輸入、世界最大の石油輸入国となっている。しかも、八四年の資料によると、あと九年でアメリカが自国に有している埋蔵量が底を尽くとされる。（出典…石油連盟・内外石油資料・一九八四年版）

ソ連は、自国産で需要を満たしているものの、同じようにこのままでは一四年分しか埋蔵量を持たない。日本に至っては、現在でも需要の九九・八パーセントを輸入に頼っている。

それに対して、クウェート二六七年、サウジアラビア一〇二年、アブダビ一一年、イラク一〇〇年、イラン六十一年など、中東の産油国は圧倒的な可採年数を誇っている。

近い将来、石油を全く持たないアメリカ、ソ連、日本等の先進諸国に対して、豊富な石油を有して発言力を増した中東の産油国という構図ができ上がるのは間違いない。

この時期に、これらの産油国が〝大ユウフラテ川〟の水がかれるように〝輸出を禁止する〟などの強硬手段を取るような問題が生じたとしたら——。〝日の出る方から王たちが〟石油を奪いに攻めてくる可能性だってあるのだ。〝王たち〟と複数であるからには一国だけではない。少なくとも数カ国であるのだ。どんな事態に陥るか、わかったものではない。

〝日の出る方〟と言えば中東から見て東である。アメリカも日本も当然含まれる。国土の広いソ連も一部、東に含まれるかもしれない。中国だってそうだ。

もし、このような国際問題が生じたとしたら、ハルマゲドンに発展する可能性は十分にあるのである。

◉◉ハルマゲドン——それは近い未来に

次の一文で、ますますハルマゲドンが近付いてきたことがわかる。龍の口から、獣の口から、にせ預言者の口から、かえるのような三つの汚れた霊が出てきて、全世界の王たちのところへ行く。戦いのための召集をしに。そして、三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集したのであった。王たちを召集したということは、軍隊をハルマゲドンに集めたということだろう。

この三つの汚れた霊のうち、龍の口から出たものは共産主義の象徴である。獣の口から出たものは自由主義だ。ではにせ預言者は？　今のところはまだはっきりはわからないが、人々を惑わして戦争へと突入させていくようなイデオロギーが、その頃出現するのかもしれない。

『第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。』

〝事はすでに成った〟――これがハルマゲドンの勃発である。

「いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので――」

と、人類が滅亡するほどの激しいハルマゲドンの描写は続く。〝島々はみな逃げ去り、山々は見えなくなった〟と核兵器によるすさまじい破壊の様子。大きな災害を与える雹（ひょう）のような爆弾――。この恐怖は、おそらくあなた自身が身をもって体験することになるだろう。ハルマゲドンは、遠い未来の出来事ではないのだ。

私はここに私自身の予言を明らかにしておこう。一九九五年の選挙でアメリカ大統領となる人物と、その時点でのソ連の書記長がハルマゲドンまで導いていくだろう――と。

第六章

多くの魂の救済に向けて

実は、ハルマゲドンの終わった後の世界についても、『ヨハネの黙示録』は明らかにしている。私は一応残りの預言に目を通して、その内容を解読してしまった。しかし、「一日も早く皆さんにハルマゲドンに至るまでの経緯を〝警鐘を込めて〟お知らせしたい」との思いが強いため、ここで一旦ペンを置くことにする。

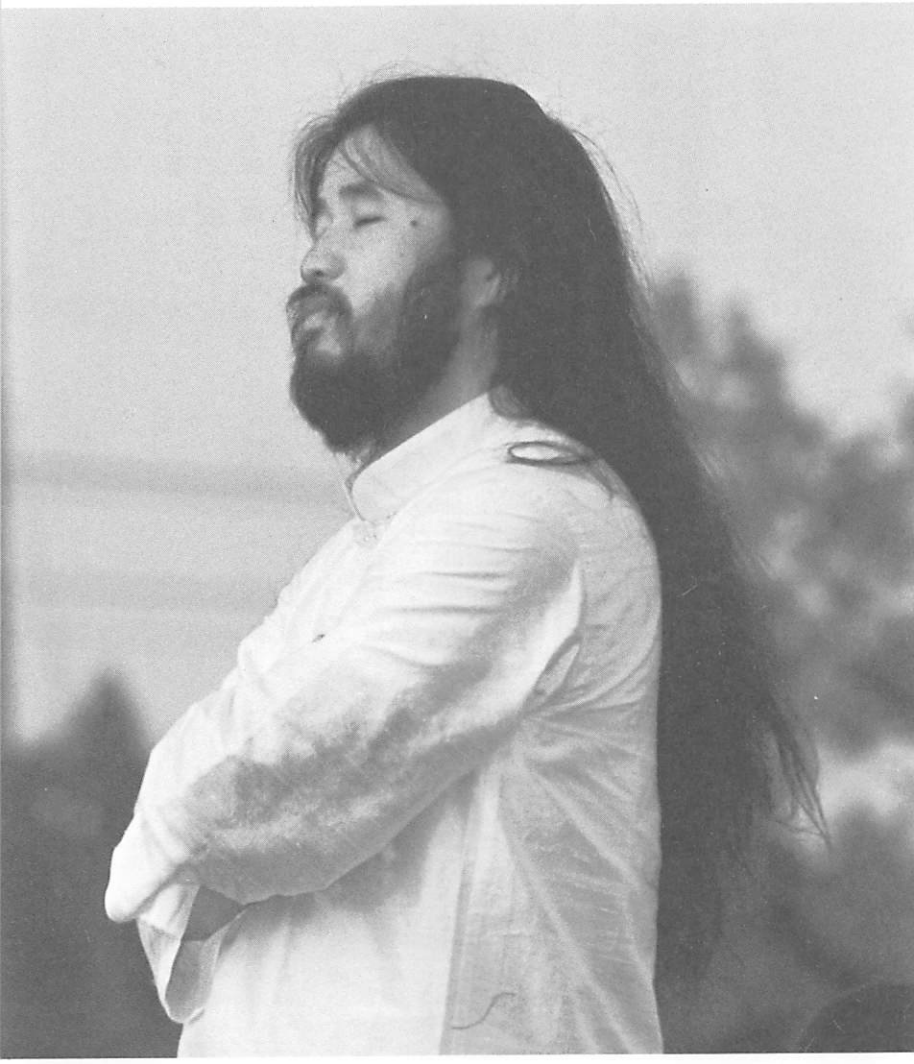
M大師「この本は、読んだ人が消化不良を起こしてしまいそうですね。」

K大師「本当にそうですよ。実証データが豊富で、息をつく暇もないのですから。内容から言ったら、普通の預言解釈書の十冊分くらいありますね。」

M「そうそう。一般に出回っているこの手の本は、イメージであじゃないか、こうじゃないかと言うだけで、その裏付けもないし、突っ込みも足りない。しかし、こちらは実証主義で全くタイプが違いますよね。」

私「これも協力してくれた、たくさんの人のおかげだね。ところで、今まで読んできて何を一番強く感じた？　二人とも聞かせてくれないかな。K大師は？」

K「もう修行の道しかないんだって改めて思いました。『黙示録』の預言によると、何をやっても無意味だということになってしまいますから。今楽しいことだって、ハルマゲドンが起これば一瞬にして消え去ってしまう。そこにはまるで地獄のような図が展開するとなったら、やは



りそんな世界にはいたくないですね。」

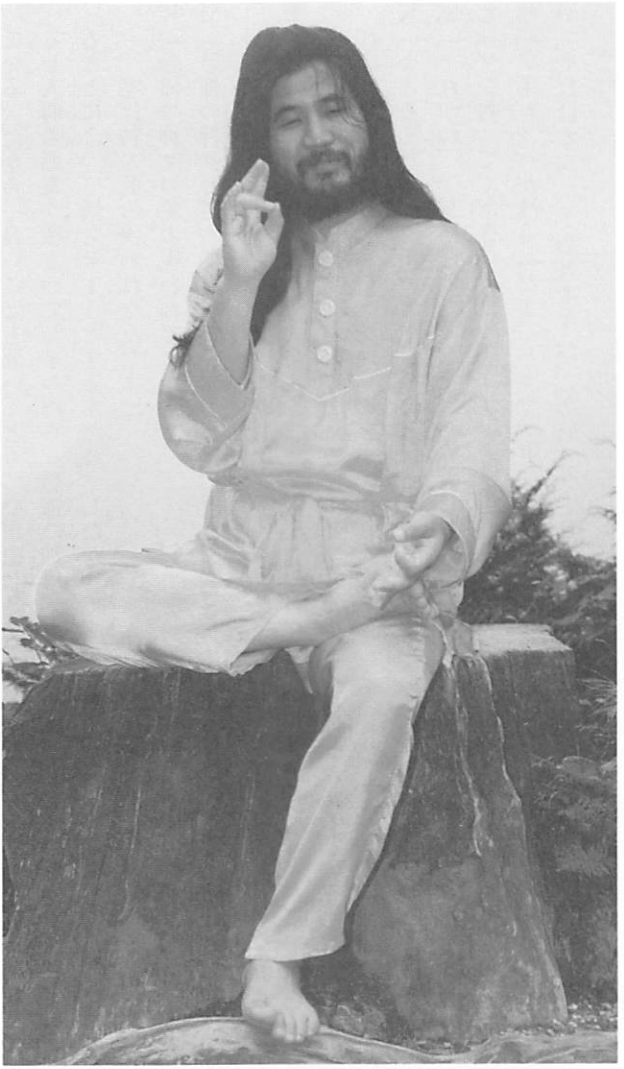
私「M大師はどう感じた?」

M「私もK大師と同じです。私は今では修行によって高い世界に行けるということを知っていますけど、知らないままの人も多いでしょう。そういう人にぜひ知ってもらいたいという気がしますね。それと、今まで解き明かされなかった預言書が、どうして今解き明かされたのか——ということを考えてみますと、やはり終末が近付いているんでしょうね。そして日本で解き明かされたからには、これからの日本の役割が大きいのだと思います。」

私「私もそれを痛切に感じるね。それから、神には平和の神々と恐怖の神々といらっしゃるわけだけど、現代は恐怖の神々の時代なんだということ。『旧約聖書』で見てみると、モーセの『出エジプト記』までが平和の神々の時代で、それ以降は恐怖の神々の時代になっているね。」

K「ヒンドゥー教でも恐怖神カーリー・ユーガの時代に入っていることになっていますよね。」

私「チベット仏教の『バルドソドル（死者の書）』の中にもね、こんな一節があるよ。死後の光の経験のあと、平和の神々がまずやってきて私たちを救済してくれる。それでも救済されなかった人々は恐怖の神々によって救済される、とね。まさに、現代は恐怖の神々による救済の時代なんだろう。あまりにも煩悩的になったこの地球人類は、やさしい顔をして法を説くだけでは救済されないだろうしね。この地球の出来事というものは、すべてカルマの法則にのっとっ



ている。だから、良いことも悪いことも、心が生じさせているんだ。すべて心の現われなんだ。もし人間の悪業が積もってしまったら、恐怖の神は、カルマの法則をもってそれを具現化させることによって悟らせようとするんだね。したがって、神の激しい怒りの裁きと言われるものも、実は神の愛の現われなんだよ。」

K「恐怖の神々の愛の現われですか？」

M「恐怖の神々と言っても、『ヨハネの黙示録』を読むと、キリスト教の神でないことがはっきりしていますね。」

私「そうだ、それは重要なところだ。『黙示録』にはキリスト教の破滅が暗示されているんだから。獣の数字の解読内容でもわかる通り、バイブルそのものに問題があるというんだから、あれには驚いたね。」

K「ところで尊師、ハルマゲドンのあとはどうなるんですか？『黙示録』によると――。」

私「それがね、予想外だったんだよ。今発表しちゃっていいのかな？」

K「ぜひ教えてください。」

私「ヨーロッパが残るんだよ。ハルマゲドンの後でも。」

M「それは本当に予想外ですね。では、ヨーロッパの人々が〝選ばれた人〟ということですか？」

私「それが、そうではないんだ。その後、ヨーロッパは滅亡してしまうことになっているんだから。ヨーロッパが滅亡したあとで超人類が登場してこの世を統治するらしい。そして、昇華し、最終的にはラトナサンバヴァの世界に聖なる者たちが到達していくんだね。」

K「そのラトナサンバヴァの世界というのは何を意味しているんですか？」

私「うーん、これは奥儀であって今は明かせないな、悪いけど。」

K「では、次の本では明かされるのでしょうか？」

私「そうだね。私は次はこの残りの部分の封印を解いた本を出したいと考えている。だとしたら、そこでは明かさないとまずいだろうね。」

M「それは楽しみですね。最終的にどういう世界ができ上がるのか知っておきたいですからね。」

私「あと、次の本では〝どのようにしたらハルマゲドンを生き延び救済されるか〟を検討してみたいと考えている。これも奥儀だよ、実際。いずれにしろ人類の滅亡は近いんだ。読者の皆さんには、早く煩悩を超越してほしい。そして、この『黙示録』に書かれている示唆を読み取って〝命の巻物〟に名前を記される魂となってほしいね。」

オーム　マハー　ヤハー　シヴァ　サティアン

参考資料……聖書・第一七章～二二章

今回、本書で「ヨハネの黙示録」として取り上げたのは全二二章中一六章である。そのすべてを扱わなかった理由は、第六章にも述べたように、ハルマゲドンに至るまでの解釈を一日も早く読者の皆さんにお伝えしたかったからである。ハルマゲドン以降の詳細な解読については、続編を期待していただきたい。

ここには、その予備知識となるよう、聖書の第一七章から二二章までを参考資料として掲げておいた。

第一七章 それから、七つの鉢を持つ七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。多くの水の上にすわっている大淫婦に対するさばきを、見せよう。地の王たちはこの女と姦淫を行い、地に住む人々はこの女の姦淫のぶどう酒に酔いしれている」。御使は、わたしを御霊に感じたまま、荒野へ連れて行った。わたしは、そこでひとりの女が赤い獣に乗っているのを見た。その獣は神を汚すかずかずの名でおおわれ、また、それに七つの頭と十の角とがあった。この女は紫と赤の衣をまとい、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものと自分の姦淫の汚れとで満ちている金の杯を手に持ち、その額には、一つの名がしるされていた。それは奥義であって、「大いなるバビロン、淫婦どもと地の

憎むべきものらとの母」というのであった。わたしは、この女が聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれているのを見た。

この女を見た時、わたしは非常に驚きあやしんだ。すると、御使はわたしに言った、「なぜそんなに驚くのか。この女の奥義と、女を乗せている七つの頭と十の角のある獣の奥義とを、話してあげよう。あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。地に住む者のうち、世の初めからいのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。ここに、知恵のある心が必要である。七つの頭は、この女のすわっている七つの山であり、また、七人の王のことである。そのうちの五人はすでに倒れ、ひとりは今おり、もうひとりは、まだきていない。それが来れば、しばらくの間だけおることになっている。昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、彼らはまだ国を受けてはいないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。彼らは心をひとつにしている。そして、自分たちの力と権威とを獣に与える。彼らは小羊に戦いをいどんでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、彼らにうち勝つ。また、小羊と共にいる召された、選ばれた、忠実な者たちも、勝利を得る」。

御使はまた、わたしに言った、「あなたの見た水、すなわち、淫婦のすわっている所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語である。あなたの見た十の角と獣とは、この淫婦を憎み、みじめな者にし、裸にし、彼女の肉を食い、火で焼き尽すであろう。神は、御言が成就する時まで、彼らの心の中に、御旨を行い、思いをひとつにし、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたからである。あなたの見たかの女は、地の王たちを支配する大いなる都のことである」。

第一八章 この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た。地は彼の栄光によって明るくされた。彼は力強い声で叫んで言った、「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。そして、それは悪魔の住む所、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった。すべての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み、地の王たちは彼女と姦淫を行い、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによっ

て富を得たからである」。

わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。彼女がしたとおりに彼女にし返し、そのしわざに応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。彼女が自ら高ぶり、ぜいたくをほしいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみとを味わわせてやれ。彼女は心の中で『わたしは女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』と言っている。それゆえ、さまざまの災害が、死と悲しみとききんとが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう。彼女をさばく主なる神は、力強いかたなのである。彼女と姦淫を行い、ぜいたくをほしいままにしていた地の王たちは、彼女が焼かれる火の煙を見て、彼女のために胸を打って泣き悲しみ、彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言うであろう、『ああ、わざわいだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、わざわいだ。おまえに対するさばきは、一瞬にしてきた』。また、地の商人たちも彼女のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、ひとりもないからである。その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隷、そして人身などである。おまえの心の喜びであったくだものはなくなり、あらゆるはでな、はなやかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女の苦しみに恐れをいだいて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、『ああ、わざわいだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、わざわいだ。これほどの富が、一瞬にして無に帰してしまうとは』。また、すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たちは、遠くに立ち、彼女が焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、『これほどの大いなる都は、どこにあろう』。彼らは頭にちりをかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、『ああ、わざわいだ、この大いなる都は、わざわいだ。そのおごりによって、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も一瞬にして無に帰してしまった』。天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この

都について大いに喜べ。神は、あなたがたのために、この都をさばかれたのである」。

すると、ひとりの力強い御使が、大きなひきうすのような石を持ちあげ、それを海に投げ込んで言った、「大いなる都バビロンは、このように激しく打ち倒され、そして、全く姿を消してしまう。また、おまえの中では、立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラッパを吹き鳴らす者の楽の音は全く聞かれず、あらゆる仕事の職人たちも全く姿を消し、また、ひきうすの音も、全く聞かれない。また、おまえの中では、あかりもともされず、花婿、花嫁の声も聞かれない。というのは、おまえの商人たちは地上で勢力を張る者となり、すべての国民はおまえのまじないでだまされ、また、預言者や聖徒の血、さらに、地上で殺されたすべての者の血が、この都で流されたからである。

第一九章 この後、わたしは天の大群衆が大声で唱えるような声を聞いた、

「ハレルヤ、救と栄光と力とは、
われらの神のものであり、
そのさばきは、真実で正しい。
神は、姦淫で地を汚した大淫婦をさばき、
神の僕たちの血の報復を
彼女になさったからである」。

再び声があって、「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる」と言った。すると、二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、「アァメン、ハレルヤ」。その時、御座から声が出て言った、

「すべての神の僕たちよ、神をおそれる者たちよ。
小さき者も大いなる者も、
共に、われらの神をさんびせよ」。

わたしはまた、大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のようなものを聞いた。それはこう言った、

「ハレルヤ、全能者にして主なるわれらの神は、
王なる支配者であられる。
わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。
小羊の婚姻の時がきて、
花嫁はその用意をしたからである。
彼女は、光り輝く、
汚れのない麻布の衣を着ることを許された。
この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである」。

それから、御使はわたしに言った、「書きしるせ。小羊の婚宴に招かれた者は、さいわいである」。またわたしに言った、「これらは、神の真実の言葉である」。そこで、わたしは彼の足もとにひれ伏して、彼を拝そうとした。すると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスのあかしびとであるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスのあかしは、すなわち預言の霊である」。

またわたしが見ていると、天が開かれ、見よ、そこに白い馬がいた。それに乗っているかたは、「忠実で真実な者」と呼ばれ、義によってさばき、また、戦うかたである。その目は燃える炎であり、その頭には多くの冠があった。また、彼以外にはだれも知らない名がその身にしるされていた。彼は血染めの衣をまとい、その名は「神の言」と呼ばれた。そして、天の軍勢が、純白で、汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、彼に従った。その口からは、諸国民を打つために、鋭いつるぎが出ていた。彼は、鉄のつえをもって諸国民を治め、また、全能者なる神の激しい怒りの酒ぶねを踏む。その着物にも、そのももにも、「王の王、主の主」という名がしるされていた。

また見ていると、ひとりの御使が太陽の中に立っていた。彼は、中空を飛んでいるすべての鳥にむかって、大声で叫んだ、「さあ、神の大宴会に集まってこい。そして、王たちの肉、将軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷との肉、小さき者と大いなる者との肉をくらえ」。

なお見ていると、獣と地の王たちと彼らの軍勢とが集まり、馬に乗っているかたとその軍勢とに対して、戦いをいどんだ。しかし、獣は捕えられ、また、この獣の前でしるしを行って、獣の刻印を受けた者とその像を拝む者とを惑わしたにせ預言者も、獣と共に捕えられた。そして、この両者とも、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。それ以外の者たちは、馬に乗っておられるかたの口から出るつるぎで切り殺され、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた。

第二〇章 またわたしが見ていると、ひとりの御使が、底知れぬ所のかぎと大きな鎖とを手に持って、天から降りてきた。彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国民を惑わすことがないようにしておいた。その後、

しばらくの間だけ解放されることになっていた。

また見ていると、かず多くの座があり、その上に人々がすわっていた。そして、彼らにさばきの権が与えられていた。また、イエスのあかしをし神の言を伝えたために首を切られた人々の霊がそこにおり、また、獣をもその像をも拝まず、その刻印を額や手に受けることをしなかった人々がいた。彼らは生きかえって、キリストと共に千年の間、支配した。(それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生きかえらなかった。)これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者はさいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。

千年の期間が終ると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、天から火が下ってきて、彼らを焼き尽した。そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣も にせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。

また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

第二一章 わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。先の天と地とは消え去り、海もなくなってしまった。また、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下って来るのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのを聞いた、「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬ

ぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである」。

すると、御座にいますかたが言われた、「見よ、わたしはすべてのものを新たにする」。また言われた、「書きしるせ。これらの言葉は、信ずべきであり、まことである」。そして、わたしに仰せられた、「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。かわいている者には、いのちの水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である」。

最後の七つの災害が満ちている七つの鉢を持っていた七人の御使のひとりがきて、わたしに語って言った、「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう」。この御使は、わたしを御霊に感じたまま、大きな高い山に連れて行き、聖都エルサレムが、神の栄光のうちに、神のみもとを出て天から下って来るのを見せてくれた。その都の輝きは、高価な宝石のようであり、透明な碧玉のようであった。それには大きな、高い城壁があって、十二の門があり、それらの門には、十二の御使がおり、イスラエルの子らの十二部族の名が、それに書いてあった。東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。また都の城壁には十二の土台があり、それには小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

わたしに語っていた者は、都とその門と城壁とを測るために、金の測りざおを持っていた。都は方形であって、その長さと幅とは同じである。彼がその測りざおで都を測ると、一万二千丁であった。長さと幅と高さとは、いずれも同じである。また城壁を測ると、百四十四キュビトであった。これは人間の、すなわち、御使の尺度によるのである。城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られていた。都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、すきとおったガラスのような純金であった。

わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。都は、日や月がそれを照す必要がない。神の栄光が都を明るくし、小羊が都のあかりだからである。諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。人々は、諸国民の光栄とほまれとをそこに携えて来る。しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決してはいれない。はいれる者は、小羊のいのちの書に名をしるされている者だけである。

第二二章 御使はまた、水晶のように輝いているいのちの水の川をわたしに見せてくれた。この川は、神と小羊との御座から出て、都の大通りの中央を流れている。川の両側にはいのちの木があって、十二種の実を結び、その実は毎月みのり、その木の葉は諸国民をいやす。のろわるべきものは、もはや何ひとつない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。彼らの額には、御名がしるされている。夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらない。主なる神が彼らを照し、そして、彼らは世々限りなく支配する。

彼はまた、わたしに言った、「これらの言葉は信ずべきであり、まことである。預言者たちのたましいの神なる主は、すぐにも起るべきことをその僕たちに示そうとして、御使をつかわされたのである。見よ、わたしは、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、さいわいである」。

これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。わたしが見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足もとにひれ伏して拝そうとすると、彼は言った、「そのようなことをしてはいけない。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい」。

またわたしに言った、「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うままにさせよ」。

「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれのしわざに応じて報いよう。わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。いのちの木にあずかる特権を与えられ、また門を

とおって都にはいるために、自分の着物を洗う者たちは、さいわいである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出されている。

わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらのことをあなたがたにあかしした。わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である」。

御霊も花嫁も共に言った、「きたりませ」。また、聞く者も「きたりませ」と言いなさい。かわいている者はここに来るがよい。いのちの水がほしい者は、価なしにそれを受けるがよい。

この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受くべき分を、この書に書かれているいのちの木と聖なる都から、とり除かれる。

これらのことをあかしするかたが仰せになる、「しかり、わたしはすぐに来る」。アァメン、主イエスよ、きたりませ。

主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。

◉クリヤ・ヨーガとは何か?

クリヤ・ヨーガとは、ヒマラヤに伝わる肉体浄化の秘法です。修行をささえる超健康体をつくるだけでなく、あなたのアストラル・ボディー（幽体）の浄化にもかかせません。アストラル・ボディーの浄化こそは超能力獲得・解脱の決め手!クリヤ・ヨーガであなたの修行は飛躍的な進歩を遂げることでしょう。難病根治の法も満載!

麻原彰晃著
今蘇るクリヤ・ヨーガの秘法
超能力秘密のカリキュラム 健康編

◉どこまで信じられるか?今常識は覆されようとしている!

●三時間睡眠でエネルギッシュに活動できる　●明晰な頭脳・記憶力を獲得する　●超能力者になれる
●超健康体になれる　●精神的ストレスの解放　●神秘体験ができる

麻原彰晃著　定価980円　ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は左記まで。（送料300円）
・オウム出版　〒一五四　東京都世田谷区世田谷二―八―十七
・電話　03(323)9294・郵便振替　東京2―109325

イニシエーション INITIATION

麻原彰晃 著

B6判 堂々巻頭カラー 定価2100円

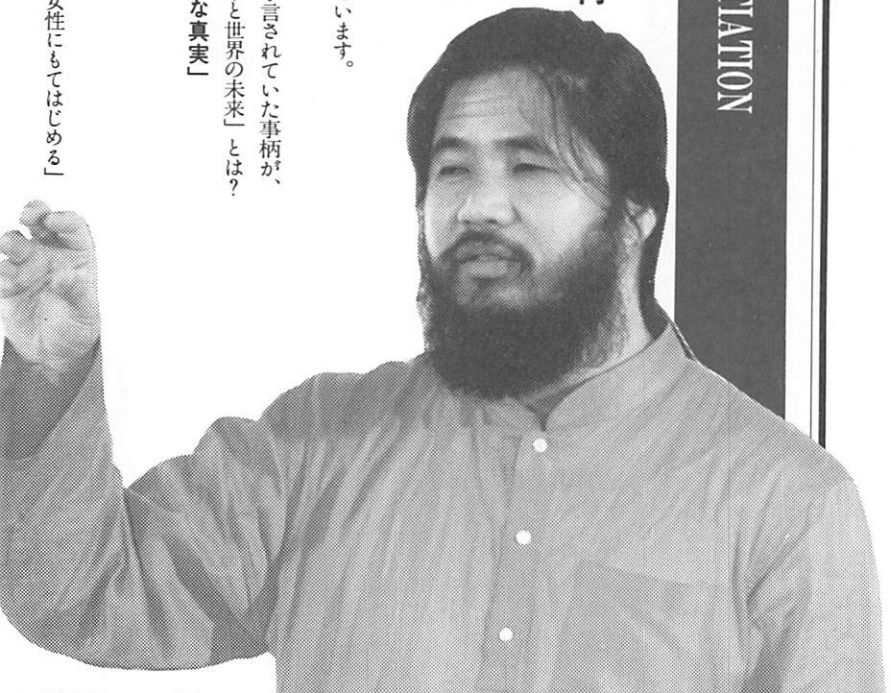
至上最高の秘儀・秘伝書!! 精神世界のバイブル 重版出来!!

◉解脱と悟りの真のプロセスを解明!
著者、麻原尊師の弟子八名がすでに「解脱」「悟り」を得、成就! このことは尊師の教えと修行法の正しさを裏付けています。

◉次々と適中する予言——確実に核戦争だ!!
「富士山の噴火」「日米経済摩擦の深刻化」など尊師が事前に予言されていた事柄が、一つ一つ現実と化してきました。その麻原尊師が語る「日本と世界の未来」とは?

◉古今東西どの経典にも記されていなかった「貴重な真実」
チベット密教ゲールク派のタントラ・イニシエーションとオウムのイニシエーションを比較しながら解説します。

◉豊富な体験談を掲載!
「クンダリニーが覚醒する」「過去世が蘇る」「精神面の充実」「女性にもてはじめる」



既に修行をはじめている三十一名の方々の体験談をステージ別に載せています。

絶賛の声

●**加藤孝子さん（福岡県・主婦）**
「真の救済者としての偉大さ、あふれる愛とエネルギー、論理の明快さ。めぐり合わせて戴いた幸せを感じて居ります。」

●**池田麗子さん（東京都・主婦）**
「初心者にもわかりやすく書かれ、内容も広くて深い素晴らしい本です。」

●**栩木小百合さん（大阪府・主婦）**
「真理が一杯詰まった、そして真理の実践のプロセスが説き明かされている、偉大な書であると思います。」

●**大川博之さん（東京都・アーティスト）**
「読めば読むほど味わいのある本であり、読むたびにいろいろ違った方向で勉強させられた。」

●**浅野国利さん（東京都・ピアノ調律師）**
「今まではっきりしなかった、各ヨーガの特長がよくわかってよかった。写真が美しかった。」

●**野呂すみえさん（大阪府・マッサージ師）**
「身と心が引き裂かれるようなヴァイブレーションを感じ、私は恐ろしさの為、思わず本を閉じてしまったのです。」

●**青柳聡子さん（東京都・看護婦）**
「現代社会に合わせた悟りのプロセスが、わかりやすくまとめられた、最も優れた書物であると思います。」

●**浅井信滋さん（ロスアンゼルス・医師）**
「純粋に人生の探究を思いたったあなたに唯一この本が答えを与えてくれるでしょう。」

●**秋山伸二さん（東京都・学生）**
「読み返すたびに、修行上や精神上の問題に必ず新たな道を照らし出してくれる本です。」

「イニシエーション」
麻原彰晃著
B6判
定価2100円

現実に存在する神秘の世界、そして真実の世界をあなたものぞいてみませんか？「イニシエーション」を手にした瞬間、あなたも真実の道を歩みたくなるかもしれません。

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は左記まで。（送料300円）

・オウム出版〒一五四東京都世田谷区世田谷二―八―十七
電話03（3323）9294・郵便振替東京2―109325

解脱とは?
解脱の真の意味合いとは?…

「マハーヤーナ・スートラ」

MAHA YANA SUTRA

大乗ヨーガ経典

麻原彰晃 著

あなたは苦悩してはいないか?
あなたは迷妄の中でもがいてはいないか?
あなたは騙されてはいないか?
麻原彰晃が説き明かす真理のすべて

本で初めての
大な経典

川知子さん
(阪府・OL)
願わくば、すべての魂マハーヤーナに入るま……」この麻原尊師の願に胸がときめくのをじました。宇宙の構造らすべてのヨーガについて、体系的にわかりやく書かれ、尊師自ら体証明してくださってます。日本で初めての、の偉大な経典に向かうき、おのずと謙虚になのです。

宗教家が論争する時代は終わった!

満生均史さん
(福岡県・不動産会社経営)
麻原尊師のすべての人々を救済したいという願いが、誰もが待ち望んだ経典、「マハーヤーナ・スートラ」には込められている。この中のステージをただ確実に昇っていきさえすれば、気づいたときには解脱し、マハーヤーナへと到達しているだろう。真理への道筋はもう決まった!

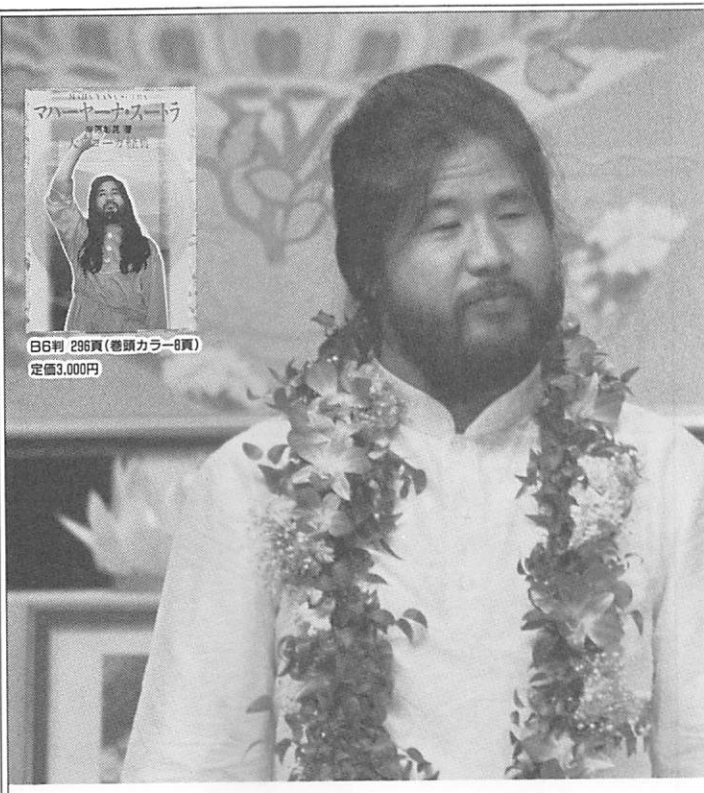
心の成長、"神"の能力を取り戻したい人々への至宝

柴田俊郎さん
(東京都・公認会計士)
もともとは"神"としてマハーヤーナに存在していた私達の魂。この「マハーヤーナ・スートラ」は、物質的欲望や刹那的楽しみを追い求める現代人がどんな方法で、どんなステップで、また一人の神に戻ることができるのかを明確に答えてくれる。

長い間の重荷から解放された

遠藤誠一さん
(京都府・京都大学大学院1年)
「いっさいのものは、原因と結果の連続にすぎない。」この尊師の言葉に、私は長い間私の心を縛りつけていた重荷から解放されたような安らぎを感じた。そして、ここまで真理を公開された尊師の熱意に何とか報いなければならないような気がした。

B6判 296頁(巻頭カラー8頁)
定価3,000円



写真を見ているだけで やすらいだ気持になれる

今井啓貴さん
(東京都・早稲田大学2年)

あらゆる疑問と不安に答えてもらったような感じです。大乗と小乗の違い、各ヨーガの特色、修行を進めていく上での注意、それらが見事にひとつにまとめられていました。おそらく、古今東西初めての本と言えるのではないでしょうか。

尊師の教済の姿勢に 深く感銘

島田雪子さん
(長崎県・税理士)

迷妄の闇の中をさまよい続けている私達にとって、この書は大きな財産となりましょう。御自分の命を投げ捨てて、すべての魂を救済しようとする尊師の姿勢に感銘を受けました。そうした大乗の流れについていきたいという帰依の気持ちで一杯です。

興味深い 解脱者の体験談

平田雅文さん
(大阪府・整形外科医)

全く驚嘆すべき内容でした。「3つの世界の構造」「無と空の違い」などこれまで釈然としなかった事柄がすっきりと整理されていました。修行中の精神状態や行法について詳しく書かれた、解脱者道の"独房修行"の体験談は非常に興味深く読むことができました。

修行という幸福への旅 欠かせない"地図"

高木雄一郎さん
(東京都・東京大学大学

以前からマハーヤーナと至る、小乗と大乗の道、ラージャ・ヨーガクンダリニー・ヨーガの関連を詳しく知りたと思っていたが、この書はそれを明解に明かしくれる。1日も早く、そプロセスに到達したい

書店にない場合は、現金書留か郵便振替で下記までお申し込みください。(送料300円)
オウム出版 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 TEL03(323)9294 郵便振替 東京2-109325

絶対幸福の鍵を解く

生死を超える

現実生活の苦悩から修行を志し、ついに解脱するに至った麻原彰晃尊師の貴重な体験をもとに、釈迦牟尼の「縁起の法」が、実はクンダリニー・ヨーガのプロセスそのものであったことを説き明かした名著「生死を超える」。

麻原彰晃

八十六年十二月発売以来、宗教、精
絶大な支持を受け、解脱を目指す修
〝バイブル〟となっております。新たに八人の
著に
ことのできない
しえて贈る全面改訂版。

◎誰にも書けなかった知られざる世界が今ここに！
◎真実を求めるあなた、人生の悩み、苦しみを乗り越えたいあなたに贈るヨーガ、仏教の真髄！
◎修行者二十一人の豊富な体験談も満載！

麻原彰晃著／B6判／定価1800円 ●ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで。(送料300円)
● オウム出版 ● 〒154 東京都世田谷区世田谷2-8-17 電話：03(323)9294/郵便振替東京2-109325

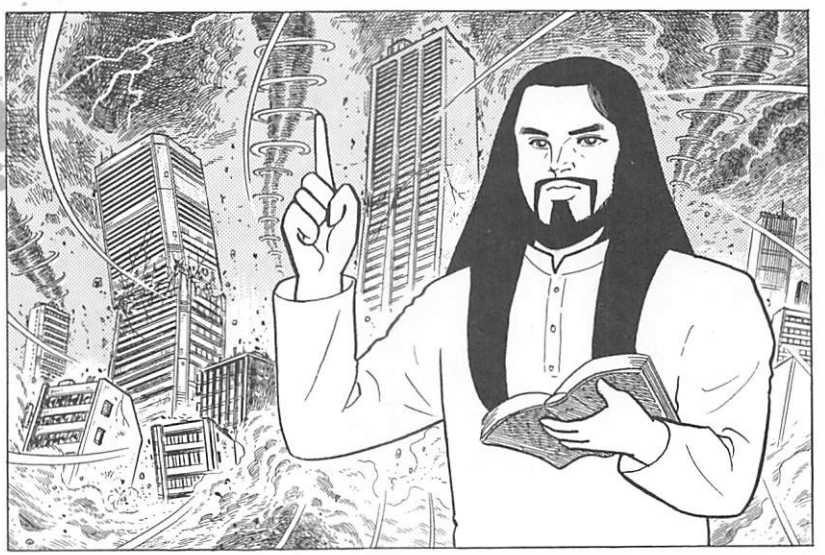
あの謎の預言書、「ヨハネの黙示録」がよりリアルに、わかりやすく……

原作 麻原彰晃

滅亡の日

マンガ版!!

刻々と迫る人類最期の日。私たちが生き残る道はあるのか？
戦慄の未来預言をあなたの目で確かめてみないか？



マンガ「滅亡の日」(仮題)　原作:麻原彰晃/作画:ダビデの星
B5判304ページ、予価1000円

ご注文は書店にてお願いいたします。直接弊社にお申し込みの場合は下記まで（送料300円）
オウム出版　〒154東京都世田谷区世田谷2－8－17
TEL 03（323）9294
郵便振替　東京2－109325

滅亡の日

麻原彰晃「黙示録大預言」の秘密のベールを剝ぐ

一九八九年二月十日　初版発行
一九八九年三月二日　第二版発行

定価一八〇〇円

著　者　麻原　彰晃
発行者　松本　知子
　　石井　久子
編　集　オウム出版編集部
印刷所　図書印刷株式会社
発行所　株式会社　オウム
東京都世田谷区世田谷二―八―十七
郵便番号　一五四
電　話　〇三―三二三―九二九四
振　替　東京二―一〇九三二五

乱丁・落丁がありましたらお取り替えいたします。

© 1989 Shoko Asahara
ISBN4-900497-24-X C0014 ¥1800E

ISBN4-900497-24-X C0014 ¥1800E 定価1800円